Rin!II

「あら、同い年なの？　なら先輩じゃなくて同期ね！　これからよろしく！」

　己よりも頭一つ分以上も低いところから見上げる視線は、とても綺麗だと思った。それは彼女の持つ、透けるような青銀色の色彩だけではない。瞳の奥から溢れ出る希望の光りが、何よりも輝いていた。
　そして目の前に差し出された小さな手。己の手を重ねると、綺麗な色彩とは合わないざらりとした感触が皮膚に触れる。
　瞳に無邪気な光りを宿しながらも、自己鍛錬を決して怠らなかったという証が、そこにあった。腰のベルトに括りつけられている双つの短剣は、決して見せ掛けのものではない。
　彼女もまた、同じだった。生きるため、先を見据えた未来のため、武器を手にとり、戦う道を選んだ仲間達と。

「――こちらこそ、よろしく」

　可憐な容姿に合わない、快活な印象。しかし今思えば、このときから既に彼女に惹かれていたのかもしれない。　これが少女、ダニエラとの出会いだった。

　食料が大量に入った紙袋を両腕で抱えなおし、ガルデアの街道を一人歩いていく。
　大きな建物が乱立する街の中を抜け、魔物から街を守るために設置された結界装置（シルトアプラテス）の向かい側にある、比較的真新しい印象を持つ建物をリンは見上げた。
　真新しい印象を受けるのもそのはず。この建物は五年ほど前に建てられたばかりなのだから。
　手押しで開く扉を背中で寄りかかるように開けると、ギィィと鈍い音が建物内に響き渡る。

「あら、リン。おかえりなさい」
「ただ今戻りました、ヴェルザさん。これ、頼まれていた食材です」
「ありがとう。助かるわ。ついでに、食堂に持って行ってもらってもいいかしら？」
「はい、わかりました」

　建物内で箒を手に、おっとりとした口調で応答した妙齢の女性にリンは軽く頭を下げ、食堂へ繋がる奥の通路へと足を運んだ。
　ここはギルド、ワイドリジョンのガルデア支部。五年くらい前に新しく設置された、比較的新しい支部である。先日、コリアリィにて行われた入団試験に無事合格を貰ったリンは、義兄で

あり、ガルデア支部の責任者を務めるレニィに連れられ、無事ガルデア支部の一員となった。
　まずはガルデア支部の者達との顔合わせから始まり、これから拠点とするガルデアの街並みを覚えるために、食料や雑貨などの買出しを一手に引き受けていた。
　ガルデアは、所属国チェスタジアの最西端にある街だ。隣接している二つの国、ネフニーとオリフィールに最も近い街でもあり、両国の流通の要としての機能を持つ、商売が盛んな商業の街である。日のあるうちはディーラーなどの旅商人や冒険者で人が溢れ、そこかしこで商売が行われている。色様々な物が集い、この街ならば必需品は一通り揃うだろう。当然街全体の規模も広く、建物と建物の間に挟まれた小路が幾つも存在し、大きな街道以外は複雑な迷路と呼んでも差し支えないほど、入り組んでいた。
　ガルデアにやってきて数日、リンは何度も街中へ繰り出し、漸く町全体の道や建物の場所がわかるようになっていた。これからずっと世話になる街なのだから、頭に情報を入れておけば、いざというとき役に立つ。
　同じく押すことにより開く扉を背中で開き、目的の食堂へと辿り着いた。テーブルの上に一度紙袋を置き、中身を取り出していく。

「これがこっちで、あれがあっちで……」

　初めに買出しを頼まれたとき、食堂のどこに何がしまわれているか、きちんと教えてもらっていた。同じ場所にしまうものを纏めていく。

　ダダダダダダダ！

　突然耳に入ってくる誰かの足音。それは徐々に大きくなっていることから、こちらに向かってきていることがわかる。

「リンちゃあああああん！」
「ただいま戻りました、ドロシーさん。扉はあまり力を入れて開けない方がいいですよ」
「そんなことよりもお！」

　バン！　と勢いよく扉が開かれると、一人の少女が飛び込んできた。リンがドロシーと呼んだ少女は勢い止まぬまま、リンの傍までやってくる。

「あたしが言った素材、あった!?　買ってくれた!?」

　金色の瞳を大きく見開き、キラキラと、まるで幼い子供のように光らせながらリンを見つめる姿は、リンよりも二つ年上だとは正直信じがたい。
　そんなドロシーにリンは苦笑しながら、紙袋からまだ出していなかった、あらかじめ一つ纏め

にしておいたものを取り出した。

「火を噴くことができる魔物の臓物、でしたよね？　数が少なかったので、魔物の種類はバラバラですが、頂いた金額分買ってきました。どうぞ」
「それで充分だよ！　あっりがとおおおう！」

　無地の布地に包まれたそれを渡すと、ドロシーは両手で頭上に掲げ、ルンルンと鼻歌を歌いながらテーブルの周りをスキップする。

「これで新しい爆薬が作れるよー！　材料探しに行きたかったけど、この辺火を吹く魔物いないじゃん？　当番だから遠出もできなかったから大助かりだよ、リンちゃん！」
「それはよかったです」

　先ほど会ったヴェルザもそうだが、彼女もまたガルデア支部の一員だ。ここガルデア支部は、リンを含めて十二人在席している。普段、各々依頼に奔走しているため、今現在ガルデア支部に残っているメンバーは、ヴェルザとドロシー、そしてリンの三人のみ。留守番も立派な仕事の一つである。

「それにしても不思議ですね。魔物の臓器が爆薬の材料になるだなんて」
「んっふっふー。基本的に魔物が噴く火は、その魔物の臓器の細胞から生み出されているのだよ、リンちゃん！　だから臓器は全体的に、発火性がとっても強いのさ！」
「なるほど」
「すり潰して粉にして火薬と混ぜると、いい感じの爆薬になるんだよねー！」

　ドロシーは、魔物の一部や生えている植物などから手に入る素材を調合することを得意、いや、趣味としている。傷に効く薬や、毒などを治す解毒剤など、市販で手に入れることができるものを、わざわざ自作し、ガルデア支部のメンバーはそれを愛用しているのだとか。リンも完成品を幾つか譲ってもらったが、怪我をしたり毒を受けたりはまだしていないため、使ったことはない。だが、同じ支部に所属している者達が信頼しているのだから、使うときは躊躇わず使うと決めている。

「僕も今度調合してみたいですね」
「お、いいよー。一緒にやる？　今作ろうとしてるのは、強い衝撃を受けると爆発するっていう、特殊な爆薬なんだけど」
「いえ、僕が調合したいのは薬の方で、爆薬ではありません」
「えー。爆薬いいよー、爆薬。普通の薬は素材が簡単に手に入るからいつでもできるけど、爆薬は材料が特殊で、滅多に作れないんだからさー」

　スッパリと爆薬作りを断ると、ドロシーがテーブルに顔を乗せながら、ブーと唇と尖らせる。彼女の調合の腕は確かなのだが、爆薬ばかり造りたがるのが玉に瑕だった。試しに作った失敗作が爆発したとき、ドカンという景気のいい爆音をいたく気に入ったらしく、暇さえあれば、爆薬の材料を調達しに、東奔西走している。だが、今は留守番を命じられたため、ガルデアを離れることができず、買出しに行ったリンに材料となる素材が売っていたら買ってくれと頼んでいたのだ。それだけでなく、遠方へ行く他の仲間達にも、余裕があったら集めてくれと収集を頼んでいる。最近はその見返りとして薬剤を調合しているらしい。とことん趣味に生きている人だ。

「あ」

　突如、ドロシーがパチリと金色の瞳を丸くし、すくっと立ち上がった。

「忘れるところだった。危ない危ない。さっきね、レニィさんが帰ってきたよ」
「義兄（にい）さまが？」
「うん。でもって、リンちゃんが帰ってきたら呼んでくれって言われてたんだった」
「……それを早く言って下さい」

　ごめーんと明るく言うドロシーは、どう見ても反省しているようには見えない。しかし短い付き合いながらも、既に彼女には何を言っても無駄だとわかっている。気をつけてほしいと言っても三秒後には忘れ去られるだろう。むしろ、きちんと思い出してくれただけでもよかったと思うようにする。そんなドロシーに言付けを託す義兄も義兄であるが。

「もしかしたら、ついにリンちゃんの初仕事が決まったのかもねー！」
「……そう、ですね」

　ガルデア支部に来てからは、支部の生活に慣れるための雑事ばかりしていた。買出しだけでなく、食事当番や掃除当番にも慣れなければならない。仕事を始めるより先に、生活のことを把握しなければならないのは当然で、正式にギルドの依頼を受けたことはまだ一度もなかった。
　ギルドの生活にも大分慣れてきたと、リンは自分でも思っている。所属しているメンバーと、も、協力関係を築いていけそうだとも。だから、そろそろ依頼を与えられる頃ではないかと、期待し始めていた頃だった。

「とりあえず、伝言ありがとうございます」
「おぅイエー！　こっちこそあっりがとう！　早速調合に取り掛かっちゃうよう！」

　始終高いテンションまま、ドロシーは食堂の扉をバン！　と勢いよく開いた。その中にミシッ

という軋む音が紛れていたのは、決して幻聴ではないだろう。義兄に食堂の扉を取っ手つきのものに変えるよう、進言した方がいいかもしれない。

（これを片付けたら、義兄さまのところに行こう）

　ドロシーの闖入で一旦は止まっていた片付けを、リンは再開した。

*　最近、急に我が街の周辺に魔物の数が増えに増え続けている。*
*　このままでは、溢れる魔物に恐れをなし、ディーラーや旅人が我が街を訪れなくなってしまうだろう。物流が途絶え、深刻な物不足に陥ってしまう状態になるより前に、この事態をどうにかしたいと考えている。*
*　そこで貴殿らに、魔物を正常な数にするための討伐をお願いしたい。*
*　報酬は――*

　書状の内容を確認すると同時に、唇がにんまりとつりあがるのを何とか堪えた。この事情を知っているのは自分達だけであり、テーブルを挟んだ向かいに座っている自分達の上司にはあずかり知らないことなのだ。変に勘繰られてはいけない。

「今説明した通りだ。お前達にはこれからその街へ向かってもらう」
「了解しました」

　頭を下げて顔が見えなくなったところでニヤリとこっそりほくそ笑む。両隣にいる仲間と目配せをした。

「それともう一つ、今回の件だが……」

　上司が言葉尻を下げ、ふと思わず顔をあげた。

「人数が圧倒的に足りていない。向こうからは七人から八人ほど寄越して欲しいといわれているが、我が支部が現在派遣できるのはお前達三人だけだ」
「！」

　まさか街の方から人数を指定されているとは思わず、面食らった。

「わ、我々三人で充分です……！　ここの街の魔物のランクはＢとかＣですよ!?」

　世界に蔓延る魔物には、それぞれ強さがランク付けされている。力のない、弱い魔物などのＤから始まり、Ｃ・Ｂ・Ａ・Ｓ・SSとランクが上がるにつれて、魔物の強さも跳ね上がるように強くなっていく。
　しかし、街と街を繋ぐ街道などに棲み付く魔物の強さは、最大でもＢランクで、Ａランク以上の魔物は特定の場所にしか存在しない。Ｂランクまでの魔物ならば一匹当たりの強さは大したことはなく、そう判断したからこそ、自分達はことを運んだというのに。

「そうは言っても、あちらさんはそれくらいの人数がほしいと思ったのだろう。俺も、どのくらい魔物が増殖したかはしらんが、人数が多いことに越したことはないと思ってな。それで、だ」

　嫌な予感にヒヤリと背筋が寒くなる。

「この街の近くにある二つの支部……ネフニーのアズゲリツとチェスタジアのガルデアに、それぞれ二・三人ほど応援を要請したから、現地で合流してくれ」
「他支部の連中の力なんざなくても……！」
「俺からは以上だ。準備が出来次第、街に向かえ」

　もう用はないと、手をヒラヒラと振られ、退出を促される。こちらが取り付く島もない。

（じょ、冗談じゃねえ……！）

　本来は自分達三人だけで、この依頼に取り組むつもりだった。さすれば、自分達の懐が豊かになることを狙って。なのに、人数が増えてしまっては、予定していた時の半分程度にしか、己達の懐に入らないことになる。――それでは何のために、今まで計画を立ててきたのか。

「お、おい……どうする……ゲント？」

　渋々部屋を退出した後、仲間の一人である、術師であるが故にひょろりとした体をしているハシルトが、青い顔をしながら縋るような目を向けてくる。

「も、もしこのことが他の支部の連中にバレたら、お、俺達は……！」
「落ち着けハシルト。俺達、ちゃんと見つからず、こっそりやってただろ？　だから証拠なんてねえんだから、それだけは大丈夫だ」
「そ、そうだぜ！　それよりも、俺達の儲けが減っちまうことの方が問題だな！」

　もう一人の、一番体格のいいザーガスがゲントに同調し、強きな口調で一番の問題点を口にした。　そう、このままでは割りに合わない。何のために細心の注意を払ってことを進めたのか。
　他の支部の人間が来てしまうのは、もうすでに決定事項だ。ゲント達がああだこうだ言って変更できることではない。ならば、彼らを出し抜いて自分達が利益を得る方法を考えるしかないだろう。

「どうやって他支部のヤツ等を出し抜くか……それが問題だな」
「うーん……」
「あ、そうだ！」

　ザーガスがひらめいたとばかりに掌を叩いた。そして声のトーンを落とし、ひそひそと己の考えを打ち明ける。

「……いいな、それ」
「だろ？　俺達、こんな苦労したんだ。少しくらい楽な思いをしたってバチはあたらねえぜ、きっと」
「それでいこう！　俺も大賛成！」

　ニヤリ。三人同時にほくそ笑む。
　沈んだ気分が一変し、足取りが軽くなる。物事の切り替えというのは大事であり、心にずっと不満を燻らせているのはよくない。計画当初よりも懐に入る量は減ってしまうが、その分楽が出来るのだから、プラスマイナスゼロと考えていいだろう。

「さあて。急いで出発の準備をしないとなぁ」
「おうともよ」
「急げ急げ！」

　それぞれ荷を纏めるために、別方向へ散っていく。頭の中で、稼いだ金の使い道を思い浮かべながら。

「見えた！　国境よ！」

　一人前を突き進む女性の甲高い声音が、喜色を帯びて弾む。肩の位置に切り揃えられた青銀色の髪が、日の光りを浴びて美しい艶を放った。
　申しわけ程度に整備された道を進んでいく途中に見つけた、左右対称の看板。手前にある方にはチェスタジア、そしてもう片方に書かれているのはオリフィールという国名。

「オリフィールに進入完了！　レンゲソウっていう街まで、もう一息ね！」
「レンゲソウじゃなくて、レンゲーの街だよ、ダニエラ」
「どっちも大して変わらないじゃない」
「いやいやいや……」

　得意げに胸を逸らす女性よりも頭一つ分以上も高い長身の、ベージュを基調とした長衣を身に纏った青年が、茶色の瞳を細めて苦笑しながら軽く首を横へと振った。瞳と同じ色の、あまり整えられているとはいえないぼさっとした髪が動きに合わせて揺れる。

「しかし、大分日が傾いてきましたね……そろそろ野営できる場所を探した方がよさそうです」

　薄らと朱（あか）く染まりつつある空をリンは見上げた。後数時間もすれば太陽は完全に沈み、暗闇が空を覆うだろう。そうなってしまう前に、眠れる場所を確保したい。

「えー……結局野営するのー……？」
「あらかじめそう言ったじゃないか。距離的に一日で着くのは難しいって」
「だって、ガルデアがレンゲルっていう街に近いから、援軍要請きたんでしょー？　それくらいで着ける距離だって思うじゃない」
「レンゲー、だよ。……地図はしっかりと見たかい？」
「デリハとリンが覚えてくれると思ったから、見てないわ。面倒だもん」
「君も地図くらい見てくれよ……」

　片手で顔を覆いながら、デリハと呼ばれた青年デリハルトは、肩を落とした。それを見てダニエラは「何落ち込んでんのよ」とバシバシ肩を叩いている。

　ダニエラとデリハルトは、リンより一つ年上の先輩だ。ダニエラのベルトに吊られているのは、一対の短剣。デリハルトの片手が握っているのは、一メートルほどの長さを持つ杖。彼らもまたワイドリジョン、ガルデア支部に所属する立派な傭兵である。今回リンが受けた依頼は、一人

でこなすものではなかった。

「隣国オリフィールにあるレンゲーって街が、魔物の大量発生に悩まされているらしい。これは本来、オリフィールの王都のセルシーにある支部に持ち込まれた依頼なんだが、現在セルシーは人手不足らしくてな。俺らガルデア支部から二・三人程派遣してほしいんだと」

　ドロシーから聞いたレニィの呼び出しは、やはりリンにとっての初仕事だった。高揚する気持ちを抑えながら、リンはまっすぐ義兄と向き合う。

「二・三人ということは、僕一人ではなく他の方と一緒に行く、ということですよね？」
「そうだ。ダニエラとデリハルトがそろそろ帰ってくる頃だろうから、戻ってきたら打ち合わせして、明日の朝、三人で行ってきてくれ」
「わかりました」

　漸く決まった初仕事だ。リンはぐっと両手に力を込める。
　それと同時に、同行者二人の姿を思い描いて、ある疑問を持った。

「あの……僕とデリハルトさんは、まだＣランクですけど、一人Ｂランクのダニエラさんに負担が掛かりそう、なんですが」

　ギルド、ワイドリジョンは、所属している傭兵全てに、個々の強さを表すランクを武器に刻むことを強制している。入団するとＣから始まり、有料である昇格試験に合格することで、Ｂ・Ａ・Ｓ・SSとランクが上がっていく。
　リンは入団したばかりで、己の獲物である剣の柄にＣという文字を刻んだばかりだ。そしてデリハルトもまたリンと同じＣランクであり、確実に街周辺の魔物に対抗できる人物はＢランクのダニエラだけ。

「そこは大丈夫だろ。あくまでお前達は応援みたいなもんだからな。セルシーからも一応人手を出すみたいだし、ネフニーにあるアズゲリツにも同じく応援を要請したみたいだ。リンはダニエラとデリハルトの補佐をしっかりこなせばいいんだよ」

　ニカリとレニィが笑うと、いつもしてくれるように、大きな掌でリンの頭をポンポンと撫でてくれる。

「普段通りやれば、お前なら大丈夫だ。なんたってあのキキョウに、みっちりと鍛えられたんだからな」
「……はい。姉様の教えを胸に、最善を尽くします」

　四年前に亡くなった唯一にして最愛の姉、キキョウ。リンが見につけた剣術や魔術は、全て姉のキキョウから習ったもの。姉が亡くなってしまった後も、姉から言われていた鍛錬を続けている。
　キキョウの教えは全てリンの身になるものばかりだった。だから彼女の教えを、活かせないわけがない。
　リンは胸元で揺れる紫色の光彩を放つガラス玉が嵌め込まれた首飾りを、思わず両手で握り締めた。姉の死を乗り越えるきっかけをくれたこの首飾りは、リンの大事な宝物で、お守りだ。触れるだけで心がきりっと引き締まっていくのを感じる。

　その日の夕方、ギルドに戻ってきたダニエラとデリハルトに依頼を受けたことを告げ、翌日、つまり今日の朝、ギルドを出発したのだ。

「ダニエラさんは、野宿が嫌いなんですか？」
「だって葉っぱとかがちくちく肌に刺さるじゃない。別に痛くはないけど痒くなるし、落ち着かないのよね」
「……それなら、もっと露出を抑えた服を着ればいいんじゃないかな」

　唇を尖らせるダニエラに、デリハルトが正論を言う。
　首まで覆っている高い襟と、二の腕から掌までを覆うアームウォーマー。しかし肩から先の袖はなく、二の腕までが露になっている。さらに上の服は胸部の下辺りまでしかない丈の短さで、臍が露出されていた。穿いているズボンは短すぎると言っても過言ではない長さで、引き締まった白い太腿が、大胆にも晒されている。通気性だけはとてもいいと言えるかもしれない。

　ここまで肌の露出が多ければ、当然野営時、生えている草花が肌に刺さるだろう。決して野営に適した服装ではない。

「寒くないんですか？　春も半ばで大分気温が上がったとはいえ、朝や夜は冷えますよ？」
「女の子にオシャレは大事なのよ！　自分を飾り立てることで身が引き締まるんだから！」
「……それで野営に苦労してたら世話ないよ」
「んもー！　デリハは一々口煩いわねえ」

　ダニエラはじとりと、綺麗に揃えられた前髪の奥から、髪と同じ色の瞳を細めてデリハルトを横目で睨む。

「でも、ダニエラさん。肌を覆っていないと魔物の攻撃を受けたとき大変ですよ？　ダメージを軽減できませんし」

　そういうリンの格好は、同じく袖のない上着だが、その下に半袖の黒のインナーを着ている。つけている手袋は二の腕近くまであり、下肢全体を覆う長ズボンを穿き、足を保護するための無骨なブーツが脹脛を覆う。洒落っ気など微塵もない、実用性のみを重視した服装だ。

「リンの言う通りだよ。リンみたいに……とまでは言わないけど、せめてズボンだけでも長いのを穿いたらどうだい？」
「あたしが足を出しすぎてるんじゃなくて、リンが出さなすぎなのよ。ねえねえ、今度あたしの服貸してあげるから、着てみない？　背丈あんまり変わらないから、サイズもきっとピッタリよ！」
「え？」

　予想外の切り替えしに、リンは面食らった。
　確かにダニエラはリンより数センチほど背が高いだけの、小柄な女性だ。サイズ的な問題はないだろう。だが、ダニエラが好んで着ている服というのは、今着ているのと同じで、総じて露出が高いものばかりだ。

「その……流石に露出が高めな服には、抵抗があるんですが……」

　リンが好む格好は、今着ているような露出が低く、どちらかというと男性用向きの動き易いもの。短いズボンは動き易そうではあるが、先ほども言った通り、攻撃を受けたらダメージを軽減できそうにない。

「一度着れば慣れるわよ、そんなの。そ・れ・に」

　突然ダニエラがリンの腕を取り、抱きしめるようにしがみついてくる。均整のとれた顔を耳元に近づけてきた。

「いくら鈍くたって、シグさんだって男じゃない？　綺麗な肌を見たら案外ころっと落ちるかもよ？」
「――!?」

　まるで爆発するかのように、リンの顔全体が朱に染まった。
　ダニエラが口にした固有名詞『シグさん』とは、ガルデア支部内では唯一のＳランクの持ち主、シグルドのことを差す。支部の中でも一番の長身と体格のよさを持ち、大剣を軽々と扱う屈強な戦士だ。

　彼と出合ったのは何と四年も前で、現在リンの首に掛けられている紫色の硝子玉が嵌めこまれた首飾りをくれた張本人。当時は亡くなった姉を偲んで泣いていたため、首飾りをくれた人が誰だったのか、ずっと不明なままだった。
　それが判明したのが先日、隣国ネフニーにある街コリアリィで行われた、リンのワイドリジョン入団試験の最中のこと。
　義兄の計らいである依頼をこなすためにコリアリィまで来ていたシグルドに、リンは危ないところを何度か助けられた。そして全て片がついたときに、シグルドが落ちていたというリンの首飾りを渡してくれたときに、判明したのだ。

「一緒にお風呂入ったとき思ったのよ。リンってばいいスタイルしてるのに、隠してばかりなのは勿体ない！　って。一一以外と大きくてビックリしたわ。あたしの方が大きいけど」
「いやその……僕は……」
「せめてサラシ巻くのやめたら？　大きな胸を嫌う男なんていやしないわよ」
「……っ！」

　そしてシグルドは、現在リンが絶賛片思いしている相手でもある。
　コリアリィでシグルドに助けられたリンは、何とその場で彼に一目惚れしてしまったのだ。しかし今まで一度も恋をしたことがなかったリンは、シグルドを見たり姿を思い出したりする度に心臓がドキドキバクバクと音を立てる理由に、さっぱり検討もついていなかった。

　そんなリンが自分の異変が恋によるものと気づいたのは、リンの入団試験を行うために吟遊詩人のロロとして潜入していたロードと、世話になった宿屋の娘であるマリナの言葉によるもの。誰かに指摘してもらわなければ、リンはきっと今でも、シグルドに対する自分の異変を『何らかの病によるもの』と勘違いしていたかもしれない。
　姉は戦い方は教えてくれたが、恋というものがどんなものなのかは全く教えてくれなかったから。

「そ、それよりも……！　ど、どうして僕がシ、シグルドさんのこと……す、好きだと知って……？」

　シグルドへの想いを自覚した後、誰にも相談を持ちかけたりはしていない。自分でも気持ちを持て余していてどうしていいかわからない状態であるのに、他の人に相談できる状況ではなく。故に、シグルドへの想いを知っているのは、コリアリィで世話になったマリナと、気持ちに気づくきっかけを作ったロードの二人くらいなものだろう。もしや、ロードがしゃべってしまったのだろうか。

「ふっふっふ……あたしの類稀なる洞察力があれば、そんなことはすーぐわかっちゃうのよ！

さあ、観念するのね！」
「ーー！」

　自らの行動で察せられてしまったとは露にも思わず、リンは閉口した。そしてずいと近づく好奇心に輝いた青銀色の瞳。

「ぼ、僕、野営できそうなところ探してきます！」
「あ！」

　リンは力を振り絞って腕からダニエラを振りほどき、全力疾走で一目散に逃げだした。

「ダニエラ……リンをからかうのもほどほどにしておきなよ」

　デリハルトは呆れたように軽く溜め息をついた。しかし当のダニエラと言えば、口元をニヤニヤと緩め、妙に生温かい眼差しをリンが走って行った方向に向けている。

「だってリンってば、初心で可愛くて面白いんだもーん。からかいがいのある子よねぇ」
「……それは否定しないけどね」

　普段はとても落ち着いている上に、そこらの男よりも男らしい雰囲気を纏っているせいで少年に見える少女が、片恋をしている相手のことになるとその空気が一変する。

　白い頬は目に見えて朱に染まり、落ち着きなくあたふたと慌て、それでも嬉しそうに微笑んだり、羞恥が勝って俯いたりする姿は、誰がどう見ても立派な少女だ。そこに鋭い洞察力なんて必要ない。

「きっと知らないのは、シグルドさんだけなんだろうなぁ……あんなわかりやすいのに、何で気づかないんだろう、あの人」
「脳筋で鈍いからでしょ。シグさんと初めて会ったとき言われた一言、本当に衝撃的だったわ。『その格好寒くないの？』よ。そこは普通、可愛い格好だねとか、足が綺麗だねとか、褒めるところだと思わない!?　そのとき一緒にいたロードさんはベタ褒めしてくれたっていうのに！」
「比べる相手が間違ってるよ、それは」

　ロードはガルデア支部のもう一人の責任者である、SSランクの実力者だ。男でありながら女口

調で話す、女性的な美貌を持った長身の美青年で、格好によっては本物の女性に見間違えることもある。
　そんな彼だが決して同性愛者ではなく、むしろ無類の女好きと言っていい。全ての女の子の味方だと常々口にしているし、だからと言って見境なくしつこく口説くわけでもない。女性メンバー全員に平等に紳士だ。シグルドでなくとも、女性に対する礼儀正しさを問われたら、ロードに誰もが適うわけがない。まさしく月と鼈だ。

「シグさんも罪作りな男よね。誰に対しても気さくで優しくて、そして何より男らしい！　知らない女の人に声をかけられてるとこ何度か見たことあるけど、持ち前の鈍さで全部撃沈してたわよ、あの人。これで女心を理解してたら、完璧だったのにね」
「女心を理解してるシグルドさんは、最早完全に別人だと思う」
「あたしもそう思うわ」

　自分で言っておきながら、ダニエラはデリハルトの返しにケラケラと笑った。思わずロードのように紳士なシグルドを想像してみて――あまりの違和感にデリハルトも噴き出した。

「ブッ……！　ロードさんみたいに紳士なシグルドさん……！　に、似合わない！」
「ちょ、想像させるようなこと、い、言わないでよ！　ブッ、アッハハハハハハハハ！」

　一頻り、二人は腹を抱えて笑い続けた。
　何だかんだで自分達は、気さくで優しいけれど、鈍いところが玉に瑕なシグルドを慕っているのだろう。頼りがいのある人ではあるけれど、どこか抜けているところがあるのも事実で、そこが彼の魅力的な部分とも言える。

「ダニエラさん！　デリハルトさん！　野営できそうなところを見つけ――二人して、何をそんなに笑っているんですか？」

　走って逃げていったはずのリンが戻ってきて、笑っている二人を見て首を傾げる。本当に言った通り野営できる場所を探してきたなんて、律儀な子だ。

「女心を理解するシグさんなんて、シグさんじゃないわよねーっていう話をしてたのよ。ね、デリハ」
「そう。それでもしそうだったら似合わないよね、って二人で笑ってたんだ」
「……シグルドさんに失礼ですよ、二人共」

　リンが憮然とする。好きな人が笑われたのだから、確かに彼女としては面白くないだろう。

「リンも想像してみなさいって。シグさんがロードさんみたいに女の子に紳士なところ」
「え……？」

　ダニエラに言われ、リンは無言で顔を俯かせる。すると突然ボッとまるで燃えるように顔が真っ赤に染まりあがった。キラリと青銀色の瞳が光ったような錯覚を覚える。

「リンちゃあん？　お顔が真っ赤だけど、あなたは一体何を想像したのかなぁ？」

　まるで水を得た魚のように、ダニエラの青銀色の瞳が爛々と輝き始めた。ずいずいと、リンとの距離を縮めていく。

「ほーらほーら、お姉さんに話してごらんなさい？」
「う……あ……」

　ダニエラがリンの腕に絡みつきながら枝垂れかかる。その図はまるで、年上の女性が初心な少年を誑かしているかのよう。というか、そういう風にしか見えない。

（……相手はリンだとわかってはいるけど）

　そんな二人の姿に、もやもやとしたものが胸中に溜まっていく。こうした後暗い感情は、頭で理解してどうにかなるものではないと、デリハルトは理解していた。

「ダニエラ、リンをからかうのもそのくらいにしなよ。リン、野営場所に案内してもらっていいかい？」
「は、はい！　わかりました！」
「チッ。もっと空気読みなさいよデリハー」

　リンは明らかにほっとし、ダニエラはつまらなそうに返事をする。何とも分かり易い二人の少女達に軽く苦笑しつつ、リンが見つけたという野営できそうな場所に三人は移動した。

　依頼内容そのものよりも、移動に時間がかかった依頼を終えて漸くガルデア支部に戻ったときには、日が既に高い位置にあった。この時間帯ならば、留守を任されている誰かが、昼食を作っている頃だろう。運がよければ、残り物が貰えるかもしれない。

「ただいまー」

　扉を開き中へと入ると、やはりそこはシンと静まり返っていた。食堂へ繋がる廊下を進んでいくと、その先からガヤガヤと賑やかな声が聞こえてくる。やはり丁度食事の時間らしく、皆食堂に集まっているようだった。

「どもー」
「お、シグルド」

　食堂にいたのは、テーブルに腰かけ、悠々と食事を楽しんでいる者が七人。一人奥で大きな鍋の番をしている者が一人。シグルドを含めたら、十二人中なんと九人がこの場にいることになる。夜と違い、大抵昼間は依頼で出払っている確立が高いため、こんなに集まっているのは珍しい。

　おかえりーと軽く仲間達と挨拶を交わしてから、あることに気づいた。

　リンがいない。

　彼女は最近ワイドリジョンに入団したばかりの見習いで、買出しや留守を任されることが多かったのに、彼女の姿は食堂のどこにもない。

（後で誰かに聞いてみるか）

　そう判断して、独り食事に混ざらず、奥で作業をしている女性に声をかけた。

「おかえりなさい、シグルド。今日は人数が多かったから、多めにシチューを作ったの。あなたも食べる？」
「もちろん食べます、ヴェルザさん」

　水色の長い髪を緩く三つ編みにして肩から下げている女性、ヴェルザが穏やかに笑う。
　今日は今朝野営した場所から、携帯食料のみを口にしただけで、他には何も食べていない。腹は全力で空腹を訴えている。己の分まで充分あるというのならば、遠慮する必要はない。

「はい、どうぞ。熱いから気をつけてね」
「ありがとうございます」

　シチューがよそわれた器が乗った盆を、ヴェルザから受け取る。湯気が立ち上り、空腹も相俟ってとても美味しそうだ。

「レニィさん、前失礼します」
「おう」

　空いていたレニィの前の席を引き、腰かける。いざ食べようとしたとき、ふとリンがこの場にいなかったことを思い出す。

「そういえばレニィさん、リンがいないみたいですけど、先に食べ終わってどこか行ったんですか？」
「リン？　ああ、あいつは今朝からガルデアにはいないんだ。そろそろ初仕事を受けさせてもいい頃だと思ってな。ダニエラとデリハルトの三人でレンゲーに行ったんだよ」
「あー成る程」

　確かに彼女はここでの暮らしに慣れてきたようであったし、そろそろ仕事を任される頃合いだろう。

「入れ違いになったか。残念だなぁ」
「何かリンに用事でもあったのか？」
「あ、いえ。用は別にないんですけど。ほら、俺とリンじゃランクに差がありすぎるから、依頼を手伝うことできないじゃないですか」

　基本的に、依頼の内容は受理した際に難度を大体計った後、できるだけ低いランクの人間を優先して依頼が渡される。何でもかでも、高ランクの人間にばかり解決させていては、低ランクの人間の成長に繋がらないためだ。一人で受けるには厳しい内容の場合でも、対峙するであろう魔物のランクがＢランク程度ならば、当然Ｓランクは手伝いに回ることはない。同程度の実力者同士でどうにかできなければ、更に上のランクを目指すことなど、できやしないのだ。

「だからせめて、頑張れって一言くらい声をかけたかったんですけど。入れ違いだったならしょうがないですね」

　彼女の受けた依頼を手伝うことはできないが、声援を送ることくらいならいくらでもできる。だからもしリンの初仕事が決まったら応援しようと決めていたのに、その場に自分がいなかったのなら仕方がない。間が悪かったことはどうしようもないのだから。

　シグルドはスプーンでシチューを掬い、食事を始める。空腹に温かい食事は、胃袋によく染

みた。

「ああ……だからシグルドが帰ってくる前に行かせたかったのね。兄の言葉よりも、片思いしている人の激励の方が嬉しいに決まってるもの」
「何のことだろうな」
「レニィさん……」

　食事に集中していたシグルドは、小さく呟かれた仲間達とレニィの会話に気づくことはなかった。

「跳ねろ水塊（すいかい）、『水飛沫（スプラッシュ）』！」

　詠唱の後、メラメラと燃えている焚き火の頭上に水の塊が現れ、ビシャーンと盛大な音を立てながら落下し、一瞬で炎を消し去った。

「火の始末終わりました」
「こっちも片付け完了よ」

　完全に消えた火を確認したリンは抜いていた細身の剣を鞘へと収めた。そして親指をグッと立てるダニエラに笑みを向ける。
　高々と成長し、生い茂っている木々から伸びる無数の枝葉に遮られ、日差しがあまり差し込まないこの場所は未だ薄暗い。そんな風景とは裏腹に、生物達は既に活動を始めている。チチチチチと聞こえる小鳥の囀（さえず）りが耳に心地良く、小さな虫が葉をおいしそうに食べていた。

「それじゃあ出発しようか」
「ええ」
「はい」

　デリハルトの言葉に、ダニエラとリンが揃って頷いた。
　昨日リンが見つけた野営できる場所で、三人は一夜を明かした。野宿を渋っていたダニエラも、一度決まってしまえば文句は言わず、テキパキと動いてくれる。彼女は切り替えが早く、さっぱりとした気性の持ち主だった。これはダニエラに限らず、ガルデア支部に所属しているメンバー全員に言えることかもしれないが。

「順調に行けば、昼ぐらいには到着できそうですね」
「街についたら、まずは何か食べに行きましょうよー。あたし、温かいものが食べたいわ。携帯食料みたいな素っ気無いのじゃなくて」
「そうだね。できればちゃんとした食事がいいよね」

　そんな話をしながら、三人はレンゲーの街に向かって歩みを進める。
　歩き始めた後は順調だった。時折魔物が物陰から飛び出してくるが、ここらに棲む魔物のランクは高くはない上に、三人もいるのだ。撃退にそう手間はかからない。
　暫くすると、視界の先が開ける。森を抜け、平原にでるのだろう。そして平原を抜けた先にあるのが、リン達の目的地であるレンゲーだ。

「よーし、森を抜けーー」

　ダニエラが一人先に、元気よく森を飛び出した。が、言葉を途中で途切らせると同時に、くるりと踵を返して慌てた様子でこちらに引き返してくる。

「ダニエラさん？　一体どうしーー」
「何あれ何あれ！　幾らなんでも、ヤバすぎるでしょ!?」

　青銀色の瞳を瞠目させながら、デリハルトの背中に回り込んでダニエラはわなわなと震えた。

「確かに異常繁殖した魔物を退治するっていう依頼内容だったけど、けど！　あの数はいくらなんでもありえないでしょ!?」
「ダニエラ、落ち着いーー」
「あんた達も見てきなさいよ！　そうすればあたしの言いたいことがわかるから！」

　リンとデリハルトはお互い顔を見合わせて頷くと、平原の方へと向かう。なるべく森の外に身体を出さないよう注意しながら、平原を覗く。

「なっ……」
「うそだろ……」

　そして二人は絶句した。
　森を抜けた平原は、視界を遮るようなものはポツリポツリと生えている木くらいなもので、遠くまでよく見渡せる。
　そして平原を出てからほんの数十メートル先に、のっしのっしと闊歩する複数の魔物がいた。いや、そこだけではない。視界の更に先に至るまで、夥しい数の魔物が平原の大半を埋め尽くしている。平原を進もうと思ったら、あの大群を相手にしなければならなくなるだろう。いくらランクが低い魔物とはいえ、この数を三人で相手にするには多すぎる。

「こ、こんなにうじゃうじゃいたら、レンゲーの街に辿り着けないじゃないか……！」

　デリハルトが青ざめながら、悲痛な声を上げる。追いついてきたダニエラも、コクコクと青い顔で頷いた。

「異常繁殖……それってこんなに増えてしまうものなのですか？」
「まさか！　いくらなんでも、平原一帯うじゃうじゃいるような状態にはならないって！」
「せいぜい、この半分以下ってところよね……異常すぎるわ」

　ダニエラがげんなりとしながら、群がっている魔物を見つめる。リンも苦い顔をした。しかし、このままじっとしていても何も始まらない。

「どう……します？　ガルデアに戻りますか？」

　このまま一度引き返したとしても、義兄は自分達を責めることはないだろう。己の力量を理解しておくことは大事であり、怪我や事故は未然に防げるならば防いだ方がいい。

「確かに戻った方がよさそうではあるけど……」
「せっかくここまで来たのに、戻るっていうのも癪よね」

　ここまで来るのに、一日以上かかっている。全速力で戻ったとしても、確実に途中で日が暮れるだろう。夜通し進んだとしても、最低一日は掛かる距離だ。そして再びガルデアを出発することを考えると、レンゲーの街に辿り着くのは二日後となる。

「元々依頼を受けてたセルシーの人達と、僕たちと同じく要請を受けたアズゲリツの人達は、辿り着けたのでしょうか……？」

　問題はそこだ。ガルデア・アズゲリツ・セルシーのある方角は、はっきりと別れている。アズゲリツはレンゲーから北西の場所に、セルシーは西、そしてガルデアは東だ。
　東側の区域がここまで魔物で溢れているとなると、他の方角も同じような状態であると考えた方がいいかもしれない。しかし、もしも他の方角がここよりもそれ程数が多くないのなら、レンゲーの街へと問題なく辿り着けるだろう。

「――戻るのは、一度大きく迂回して入れないかどうか調べた後でもよさそうだね。それで俺たちだけが引き返してしまったら、彼らに迷惑がかかってしまう」
「そうですね。魔物が多いのがこちら側だけなら、移動すればレンゲーに行けるわけですし」
「めんどくさぁ……」

　漸く突破口が見えたというのに、ダニエラは不満そうにげんなりとしている。今の時間から遠回りすれば当然その分到着に時間がかかり、それだけ昼食を食べるのが遅くなるからだろう。

「あ、そうよ」

　突然ダニエラがポンと手を打った。表情がパア、と明るくなる。それと同時にデリハルトが口元を歪めた。

「あたしが風属性の魔術で魔物を蹴散らすから、その隙に街まで走ればいいわ！」

　ダニエラの言葉にリンはぎょっと目を剥いた。

「そんなことだろうと思った……」

　デリハルトは予測していたのか、ハアと大きく嘆息する。

「分かり易くていい策じゃない。これで行きましょう！　あたし達三人なら、きっとできるわ！」
「その自信はどこから出てくるんだよ……いくらなんでも、無謀すぎるだろう……」

　ダニエラは得意げに胸を張る。しかしデリハルトの言うとおり、ダニエラの口にした策は、無謀もいいところだ。それに魔術は威力が高いものほど詠唱が長く、その分隙ができてしまう。周囲の魔物を一度に吹き飛ばす程の魔術は、確実に上級術だ。一度目はそれでいいとしても、その一度きりでは全ての魔物を吹き飛ばすことは不可能。レンゲーに辿り着くためには、もう何発か術を使わなければならない。

「ダニエラ、やっぱり一度迂回しよう。その作戦は危険すぎる」
「何よー、試しもしないで諦めるなんて。一度吹き飛ばした後、また詠唱すればいいんだから大丈夫よ。あたしにまっかせなさい！」
「その、次に魔術が使えるまでのタイムラグがネックなんじゃないか……それに、その魔術は上級術だろう？　ダニエラの魔力じゃ、一日に三回くらいしか使えないよ」
「むー……」

（でも、風属性の魔術で吹き飛ばすのは、有効であるのは確かなんだ……）

　ふとリンはダニエラの策を頭の中でよぎらせる。この策の問題点は、一度魔術で吹き飛ばし終わった後のタイムラグと、上級術故に、一日に使える回数が極端に限られているということだ。

（唯一のＢランクであるダニエラさんが術に集中してしまうということは、僕がその分フォローしなければならないし……。するのは別段構わないけど、二人を守りきれるだろうか）

　リンが一人思索に耽っている間も、デリハルトとダニエラの会話は続いていた。

「ならデリハも魔術使いなさいよー。何のための杖よそれー」
「……俺が攻撃系の魔術苦手なこと、ダニエラも知ってるだろ？　無茶言うなよ。それに風属性の術は中級までしか使えないし」

　デリハルトは補助や回復術に特化した術師である。故に魔物を殲滅するには力は足りないが、怪我を治したり、身体能力を向上させる術に関してはバラエティに富んでいる。
　当然ながら、人によって魔術の得意不得意は大きく変わる。ダニエラが風属性の魔術を使うことを提案したのは、彼女が風属性の魔術を得意としているからだ。デリハルトは攻撃術は苦手としているが、それでも氷属性ならば上級術まで習得しているという。
　そしてリンが得意なのは火属性の魔術である。しかし得意と言っても、唯一下級以上の魔術が使えるというだけだ。上級術にもなると、たった一回ですら発動させることすら困難である。並の術師の足元にも及ばない。

（あ。街に行くだけなら、別に上級術である必要はないか）

　ふとリンはあることを思いつく。四方八方吹き飛ばすなら上級術が必須だが、別に吹き飛ばすこと自体が目的ではないのだ。進路を妨害している魔物をどかせられれば、それでいい。

「ダニエラさん、デリハルトさん。中級術の『突風の槍（ブラストスピア）』は使えますか？」
「うん？　あたしは余裕で使えるわよー」
「一応使えなくはないけど……それがどうかした？」

　二人に声をかけると、彼らは言い争いをピタリと止め、リンの方を向く。口ではいろいろ言い合っていても、険悪な空気にはならない所が、この二人のすごいところだ。

「『突風の槍（ブラストスピア）』は前方に強烈な突風を吹かせる魔術です。この術ならデリハルトさんも使えるようですし、上級術より使用回数が増えます。交互に魔術を使えばタイムラグの心配もありません」
「あー、成る程！　そっちの術があったわね、そういえば！」

　デリハルトも使えるならば、二つの問題点は解決する。

「いやでも俺、走りながらだと、上手く発動させられる自信ないんだけど……？　氷属性の魔術ならまだしも、風属性はそこまで得意ってわけでもないし……」
「――それでしたら、氷属性の中級魔術の『雪の乱流（スノウストーム）』をお願いします。本来の目的である、魔物を吹き飛ばすのをダニエラさんに。デリハルトさんは『突風の槍（ブラストスピア）』のタイムラグの間、魔物の動きを牽制できれば、何とかなるかもしれません」

　タイムラグが問題なのは、その間に魔物が押し寄せる可能性があること。そこをどうにかするのなら、別に『突風の槍（ブラストスピア）』でなくとも問題ない。

「それと念の為に、ありったけの補助魔術をかけてほしいのですが……」
「ああ、それならお安い御用だよ」

　デリハルトは持っている杖を構えると、詠唱を開始した。

「我等の身に神の祝福を『神の息吹（ゴッドブレス）』！」

　白く煌く靄が、リン達三人を覆い始めた。一時的に身体能力を上げる補助魔術、『神の息吹（ゴッドブレス）』。リンも使える一般的な補助魔術ではあるが、リンでは一度に一人にしかかけることはできない。
　補助系の魔術は、術者の力量によって効果時間や射程距離、一度にかけられる人間の人数が増える。攻撃系の術が苦手なデリハルトであるが、補助や回復系の術に関しての腕は、ガルデア支部の中では右に出る者はいない。

「憤怒の激情、力となりて我等に纏え『怒れる強力（アンガーストレインジ）』！　鳥のごとき敏捷さを我等に『疾風の駆足（ゲイルラン）』！　我等に宿れ、人知を超える英知の輝き『賢者の才知（スマートブリリアンス）』！　我等を震撼させし災いへの守護『衝撃の保護（アタックプロテクト）』！」

　デリハルトは次々と補助魔術を唱えていく。リンは掌を握り締め、魔術が効いているのを感じた。

「『魔障の保護（マジックプロテクト）』……はいいか。魔術使ってきそうな魔物いないし」
「そうですね、ありがとうございます」「よーし！　デリハの補助もかけてもらったし、早速行動開始よ！」

　補助魔術を受けたダニエラは、即座に行動を始めた。颯爽と森から飛び出し、腰のベルトに括りつけられている双つの短剣を引き抜く。

「あ、ダニエラさん。ちょっと待って下さい」
「えー、何よぅ。まだ何かあるの？」
「これで最後ですので……」

　リンは鞘から剣を引き抜くと、両目を瞑って俯きながら詠唱を始める。

「御剣（みつるぎ）よ、我を仇名す者に制裁を『刀剣の盾（ダガーシールド）』」

　詠唱の後、リンの周囲に突如、宙に浮いた短剣が幾つも出現する。リンを中心として、くるくると旋回した。

「『刀剣の盾（ダガーシールド）』か……それ、俺も使っておいた方がいいかな？」
「いえ、デリハルトさんへの攻撃は僕が弾きますので、大丈夫です」

　『刀剣の盾（ダガーシールド）』は、術者に触れた者を浮いている短剣が突き刺すという、変り種の補助魔術だ。もしも魔物がリンの持つ剣の剣先にでも触れた場合、短剣は魔物目掛けて飛び、容赦なく突き刺す。追尾型で逃げることはできず、どんな魔物が相手でも確固としたダメージを与えることができるのだ。
　しかしこれは相手側が触れてこなければ意味がなく、こちらが先に触れることでは攻撃の対象にならないのが欠点だった。上手く衝撃を抑えながら相手の攻撃を受けねばならず、また、一度に消費される魔力の量も半端ではない上に、術者の魔力に比例して消費量は増えるため、内在する魔力が高ければ高いほど、魔力の消費量は多くなる。その分浮かび上がる剣の数と、発動時間は長くなるが。

　誰でも使える補助魔術ではあるが、消耗が激しい上に使いどころが難しいため、習得率はあまり高くないといわれている。リンも習ったはいいが、実際に使うことにしたのは今回が初めてだ。

「これで準備は整いました。行きましょう」
「待ってました！」

　ダニエラは片方の短剣の切先を、魔物の群れの方へと向けた。

「吹き荒ぶ風よ、障害を突き飛ばせ『突風の槍（ブラストスピア）』！」

　ゴオオオオオオオオオ！

　ダニエラの前方に、強烈な突風が吹き荒ぶ。突然の風に不意をつかれた魔物の群れは、槍のごとく鋭い風に、次々と吹き飛ばされた。道が開く。

「今です！　走りましょう！　次はデリハルトさんお願いします！」

「わ、わかった！」

　魔物が蹴散らされたことにより開いた道を、三人は駆け抜ける。突如現れた闖入者に、魔物達は一斉に殺気をこちらに向けた。ピリピリとした空気が肌を差す。だが、怯んで脚を止めてしまった時こそ、この作戦の失敗を意味している。

「荒ぶる氷せ……わあ！」
「デリハルトさん！」

　詠唱を始めたデリハルト目掛け、一頭の魔物が突進し始めていた。リンは魔物の横っ面を剣で突き刺すと、魔物の攻撃の矛先がリンへと移る。魔物に剣を向けたまま走ると、魔物は剣先に向かって突進してきた。タイミングよく剣を引くと、魔物の鼻先が剣先を掠める。リンの周りを浮いていた短剣の一つが、魔物に向かって飛来し、深々と突き刺さった。

　――ヂィィィィ！

　悲鳴が上がる。『刀剣の盾（ダガーシールド）』の攻撃を受けた魔物が怯んだ。

「今です！　お願いします！」
「あ、ああ！　……荒ぶる氷雪、宙へと舞い散れ『雪の乱流（スノウストーム）』！」

　――ヒュオオオオオオオ！

　春の暖かな気温の中、季節外れの真っ白な雪が、自分達の周囲を舞い踊る。リンの頬を冷気が撫でた。空を舞うように霧散する白い雪が、魔物の進行を食い止めてくれている。

「よーっし、もういっちょいくわよ！　吹き荒ぶ風よ、障害を突き飛ばせ『突風の槍（ブラストスピア）』！」

　再び突風が前方にいる魔物を吹き飛ばしていく。
　ダニエラが開いた活路を、三人はひたすら走り続けた。交互に魔術を展開することで、魔物の接近のほとんどを防げている。それでも偶に何頭か接近してくる魔物もいたが、それらもリンの『刀剣の盾（ダガーシールド）』の直撃を受けると、怯んでいく。

　走り続けた結果、街が目前にまで迫っていた。

「――最後に派手なのぶちかますわよ！　駆け巡る優しき風、その姿を烈刃へと変え、全てを薙

ぎ払え『緑風の大渦（トルネード）』！」

　ダニエラ達を中心に風が渦巻き始め、それは次第に大きくなって巨大な竜巻へと変化した。こちらへ突進してくる魔物を取り込み、あっという間に高い空へと打ち上げる。

「ダ、ダニエラ！　街の近くで上級魔術は……！」
「さあ！　道が完全に開けたわ！　今のうちに街までゴーよ！」
「聞いてないし……」

　デリハルトは肩を落としながらも、先行するダニエラの後を追う。リンも苦笑しながらも、魔物が襲ってこないか用心しつつ、二人の後を追って街を目指した。

　必死の思いで辿り着いた街の中は、思っていた以上に人通りが少なかった。ダニエラが街の近くで上級術を行使したため、騒ぎになっていやしないかと不安になったが、どうやら杞憂で済んだようである。

「随分外を出歩いている人が少ないですね……ガルデアと同じく国境付近の街なのに、閑散としてます」
「おかげでダニエラの魔術で騒ぎにならなくて済んだけどね」
「無事に街に入れたんだからいいじゃないの！　結果オーライね」

　反省するどころか、ダニエラは胸を張って得意げだ。これ以上の小言は最早彼女に通じることはない。一年以上の付き合いで、その性格をよく理解している。

「とにかく、先に滞在中の宿を確保しましょうよ。ついでに腹ごしらえもしたいわー、お腹すいたし」
「え？　先に他の支部の人達と合流しなくて大丈夫なんですか？」
「そんなの、お昼食べたあとあと！　でないと頑張って魔術使いまくった甲斐がないじゃない」

　ダニエラのことはさておき、リンの言い分もわからなくはない。自分達は要請を受け、レンゲーへと赴いたのだから、出来るだけ早くセルシー所属の傭兵達と合流した方がいいだろう。ここまで何事もなくこれていたのであれば。

「魔術を使いすぎて疲れたし……先に休んでからでもいいんじゃないかな。リンだって俺に魔物を近づかせないようにしてくれてたから、疲れてるだろ？　ダニエラも、魔術を連続使用したの初めてだから、疲れてるはずだ」

　一見二人共平然としているように見えるが、リンは表情に陰りがある。『刀剣の盾（ダガーシールド）』は一度きりでも魔力の消費が激しい魔術だ。その上デリハルトの詠唱を妨げないよう動いてくれて、疲れないはずがない。ダニエラも、普段彼女は双つの短剣を獲物としているため、あまり魔術を使うことがないにも関わらず、連続で使用するという無茶をやらかした。魔術にあまり慣れてない人間が連続で魔術を使うことは、思っている以上に精神的に疲労するもの。

「怪我だったら魔術でいくらでも治せるけど、疲労を回復させることはできないからね。俺も慣れない攻撃魔術たくさん使って疲れてるし、疲れきってる状態で会うのも失礼じゃないかな」

　今回合流するアズゲリツとセルシーの所属先に、知り合いはいない。それぞれ属国も違えば、

距離も離れた場所にある。同じワイドリジョンに所属する傭兵ではあるが、拠点とする街が遠ければ、その分顔を合わせる機会なんてほとんどないに等しい。
　初対面の相手に会うのだ。疲れきっている顔で合流したら、確実に心配されるだろう。それに、相手に自分達の実力を不安視される可能性もある。攻撃があまり得意でないデリハルト自身はともかく、ダニエラは小柄な少女ながら、魔物に果敢に立ち向かう勇敢な女性だ。突飛でお調子者ではあるが、双剣の手数の多さを生かした立ち回りは、ダニエラの最も得意としていること。腰のベルトに括りつけられている双つの短剣は、決して飾りなどではない。アームウォーマーに包まれた小さな両の掌には、それを証明する剣胼胝がある。
　リンもまた、入団したばかりの新米ではあるが、レニィの義妹なだけあって鍛えられ方が違う。魔物の群れを横断したことも、きっかけはダニエラの突拍子もない発言からであるが、そこから現実的な策を提示したのはリンだ。ダニエラとデリハルトの二人だったならば、確実に迂回するルートか、もしくは引き返す道を選んでいただろう。ランク以上の力が、彼女にはある。
　そんな彼女達が見くびられることは、絶対に避けなければならない。

「デリハの言うとおり！　ここはまずご飯が最優先よ！　さあさあ、行きましょう行きましょう！」
「あ、はい……」

　ダニエラがリンの腕を掴み、早く早くと急がせる。昨夜からろくなものを口にしていないため、温かい食事がしたい気持ちはデリハルトも同じだ。前を歩く二人の少女の後を追うように歩みを進める。

「それにしても……本当に人通りが少ないですね」

　歩きながら、リンが小さく呟いた。
　レンゲーの街並みは、ガルデアと同じく大きな建物が乱立している。広い街道もあり、ここでディーラーが商売をしていてもおかしくはなさそうなのに、それらしき姿はどこにもなく、ポツリポツリと人が歩いている程度だ。

「外は大量の魔物だもの。レンゲーに行く前に皆引き返しちゃったんじゃない？　あたし達ですら三人がかりでやっとだったし、ディーラーが雇える傭兵にも限界があるしね」

　国境付近の街は、ディーラーがもたらす物資による商売で成り立っている。ガルデアもそうだ。なのにその経済の要であるディーラーがレンゲーを訪れることができなければ、街は活力を失うことになる。寂れた雰囲気も、街の外に魔物が溢れる故の結果と考えると納得できた。

「できるだけ早めに解決しないと、だね……あ、あそこ宿屋じゃないかな」

「あ、ほんとだ。行くわよリン！　デリハ！」
「うわ！」

　宿屋の看板を見つけると、ダニエラは一目散に宿屋へとダッシュする。腕を掴んでいるリンを巻き添えにして。突然引っ張られてリンは一度つんのめるが、それでもすぐに体勢を立て直し、ダニエラの動きに合わせる。流石だ。デリハルトだったらそのまま引っ張られ続けただろう。

　二人に少し遅れて宿屋の扉を潜ると、そこにはポカンとした顔で立ち尽くす、一組の男女。同じエプロンを掛けていることから、宿泊客ではなく従業員であろう。よく似た面差しから、兄妹だろうか。

「え……い、今……何と？」
「だーかーらー、これから暫く滞在する予定だから、三人分の部屋と！　お腹が空いてるから温かいご飯が欲しいって言ったの！」
「……！」

　二人の従業員はカッと大きく目を開き、そして――

「やったあああああ！」
「久しぶりのお客さんだあああ！」

　諸手を上げて歓声を上げ、二人は抱き合いながら喜びを露にする。その姿に、今度はダニエラとデリハルトがポカンとした。まさか宿屋に入っただけでこんなに喜ばれるだなんて、思うわけがない。

「久しぶり……ということは、魔物の異常繁殖のせいで、客足が途絶えていたのですか？」

　そんな中で、唯一リンだけが彼らの言葉から拾った情報を纏め、淡々と冷静に切り返す。シグルドが関わってこなければ、どこまでも落ち着いた少女だ。

「そう……そうなんですよお！　魔物が増え始めてから、うちみたいなあまり大きくない宿屋は、どんどん客足が減っていってしまってですね……！」
「ここ五日ばかり、食事に来るお客さんもこなくて……家族一同頭を抱えていたところだったんです！」
「は！　マルク兄さん、だったらこんなところでおしゃべりしている場合じゃあないわ！　お客様！　今から腕によりをかけて昼食を作りますので！」
「おお、そうだったなチェルト！　さあさあお客様、どうぞこちらのお席へお掛け下さい！」

　久しぶりの来客に浮き足だった彼らは、感激していた表情をにっこりとした穏やかなものへと変え、マルクと呼ばれた青年に席へと案内される。チェルトと呼ばれた女性は、厨房の方へと慌てて走っていった。

　食事が出来るスペースは、彼らが言っていた通り、自分達以外の客の姿はない。木製のテーブルと椅子が、淋しそうに配置されていた。

「あ、申し遅れました。私はこの宿屋を経営しているマルクと申します。彼女は妹のチェルト。調理を担当しております」
「あ、俺はデリハルトです」
「あたしはダニエラ。よろしくね」
「僕はリンです」
「デリハルト様にダニエラ様にリン様ですね。他の所より小さくて何もない宿ですが、妹の料理の腕は確かですのでご安心下さい！」
「やったあ、楽しみ！」

　簡単に自己紹介を交えた後、ダニエラが上機嫌で椅子に座る。促されたのは三人掛けの丸いテーブル。手前の席にダニエラが座ると、続いてリンが向かいの奥へと座る。デリハルトは残ったダニエラの真正面の席へと腰かけた。

「マルクさん、でしたよね。少しお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「勿論です！　私なんぞでよろしければいくらでも！」

　リンがマルクに声をかけると、打てば響くかのごとく、すぐさま勢いのいい返事が返ってくる。浮かべる笑みは穏やかだが、瞳の奥は久しぶりの来客による接客を成功させるべく、メラメラと熱く燃えているのがわかった。デリハルトに向けられているわけでもないのに、その熱さに気圧され、若干口元が引きつる。

「近辺の魔物は、いつ頃から増え始めたのですか？」

　マルクの熱さに全く気圧される様子のないリンが、普段通りの理知的な紫色の瞳を向けた。ダニエラに至っては、現在自分達の昼食が作られているであろう厨房の方を気にかけ、マルクのことなど眼中にない。マイペースな彼女達が少し羨ましくなった。

「そうですね……魔物が増えてきたと感じるようになったのは、一ヶ月ほど前でしょうか……。この春の時期は繁殖期なので、一時的に魔物の数が増えるのは毎度のことと、初めはあまり気に

していなかったのです」

　寒い冬が過ぎ、温かくなった春の日差しは植物だけでなく魔物にも恵みを与える。草花・木の実などなど、食料が増え始める時期だ。そして己の栄養を満足にとることができるのであれば、種を残すべく繁殖行動をとるだろう。季節に多少の違いはあれど、春になると魔物が増え始めるのは、何もレンゲー周辺だけに言えることではない。

「ですが二週間ほど前になると……街の周辺を魔物がうろつくまでに増えておりました。日が経つにつれて増していく魔物達を見て、漸く異常に気づいたのです」

　そのときから、レンゲーに近づくのは危険だとディーラー達に伝わったのか、増える魔物と反比例するかのように、ディーラーの姿を見かけなくなったらしい。

「外の魔物は特別弱くはないですが、一頭二頭であれば街の人間でもどうにかなる強さなので、初めは勇士を募って魔物退治をしていたのですが……やはり戦い慣れていないせいか、効率が悪いのでしょうね。一日にせいぜい十頭ほど倒せる程度では、全く減らせる気配がなくて……」

　そこで漸く戦い慣れた傭兵を複数呼び、魔物を退治してもらおうと役人達は思い立ったのだという。

「そろそろ依頼していた傭兵さん達がレンゲーを尋ねてきて下さる頃……って、も、もしやあなた方は……！」

　街の近況を語ってくれたマルクは、自分達が何故魔物に囲まれて危険な状態であるレンゲーにやってきたのか。その理由に気づいたようだった。

「お察しの通り、僕たちはワイドリジョンに所属する傭兵です。セルシー支部から要請を受け、ガルデアにある支部からやってきました」
「な、何とあなた方が……！」

　リンはただ事実を述べただけという顔をしているにも関わらず、マルクは重大な事実を知ったかのような、驚愕に満ちた顔をする。確かに冷静になって考えれば、自分達がレンゲーを訪れた理由はすぐに察することはできるだろう。だが、客足が途絶えていた彼には、その事実すらもまた感嘆に当たる事柄だったようで。

「チェルト！　チェルト！　このお客さん達、魔物を退治しに来て下さった方々だ！　力のつくものをお出ししろ！」

「了解よ兄さん！」

　厨房にいるチェルトに向かってマルクが叫ぶと、威勢のいい返事が返ってくる。どちらも熱い兄妹だ。

「本当に来て下さってありがとうございます……！　これでレンゲーの街が、宿が、救われます……！」

　丸く、愛嬌のあるこげ茶色の瞳が、じわりと涙で滲んでいる。自分達に向かって深々と頭を下げ始め、これには流石のリンもギョッとして止めに入った。

「あの、僕たちはまだ仕事をしていません。申しわけがないので、頭を上げてください」
「そ、そうですよ！　俺たち、まだ要請を受けたセルシー支部の人達と合流もしていませんし……お礼を言われるのは、まだ早いです」

　何もやっていないどころか、自分達は魔物の群れを横切るので精一杯だった。他の支部の傭兵と合流できれば人数的にも些か余裕が生まれるだろうが、正直言ってあの数を掃討するのは数日がかりとなるし、下手に動けばこちらが闇雲に怪我をするだけだ。慎重に動かなければならないとデリハルトは思っている。

「いえ……あの魔物の群れの中を、危険を顧みず来て下さっただけでもう……チェスタジア方面なんて、特に魔物の出現数が酷いと聞いてましたのに……」
「……確かに密集してたけど、あそこが一番酷かったのか……」

　自分達が来た方角が偶々酷かっただけならば、それよりもましな状況であるセルシーやアズゲリツ方面の支部の者達も、既にレンゲーへと辿り着いているかもしれない。

「僕たちは依頼を受けました。それなのに依頼を中途半端に投げ出すわけにはいきませんから」
「そうですよ。ーーだからその、涙を拭いてはくれませんか。本当に俺たち、まだ何もやってないので……」

　マルクの瞳から、ボロボロと大粒の涙が零れていた。彼はすいませんと謝りながら、袖でごしごしと豪快に目元を拭う。

「お客様、大変お待たせいたしましたーーもう、兄さんってば。何を泣いているの。相変わらず涙もろいわね。お客様が困惑してらっしゃるじゃない」
「うっ、ううっ……すまん、妹よ……」

「謝るのはあたしじゃなくて、お客様でしょう？」
「も、申しわけありません、お客様……」

　泣いている兄をさして気に留めていないチェルトの様子からして、マルクが仕事中に泣いてしまうのは珍しいことではないのだろう。思わず苦笑を彼女に向けると、コトンと目の前に料理の乗った皿が置かれた。

「トマトシチューじゃない！　美味しそう！　いただきます！」
「どうぞ。お代わりもございますので、心行くまでお楽しみください！」

　会話に参加していなかったダニエラが、歓声を上げた。香ばしい香りと湯気の立つ、とろりとした紅いソース。その中に沈められた彩豊かなな野菜と食べ易く切り分けられた肉が、空腹を激しく刺激する。がっつきたい気持ちを抑え、両手を合わせてから、添えられているふっくらとしたパンを千切った。

「とても美味しいです」

　シチューを口にしたリンが、にっこりと笑って感想を言う。客が来なくとも、備えて煮込んであったのだろう、口いっぱいに広がる旨みに、デリハルトも無言でコクコクと頷いた。

「お代わりちょうだい！」

　ペロリとあっという間に食べ終わったダニエラが、すぐさまお代わりを要求する。チェルトがすぐさまやってきて皿を受け取って厨房へ行き、そして再びシチューがよそわれた皿を持ってきた。

「まだまだたくさんありますからね！」
「――じゃあ、俺ももらおうかな」

　昨日今日と、携帯食料のみしか口にしていないせいか、それともこのシチューが旨いせいか、同じくペロリと平らげてしまう。

「それにしても……物流は途絶えてしまっても、食料には余裕があるんですね。他所からきた僕たちにも振舞えるくらいに」

　お代わりがよそわれた皿に手をつけようとした手が、ピタリと止まる。
　そうだ、ディーラーがこないということは、物流が途絶えることであり、行く行くは街全体が

物不足に陥るということ。それは食料品とて例外ではない。なのに、遠慮もなく食べてしまった。思わず背筋に冷たいものが走る。

「はい、そこは大丈夫なんですよ。流石に香辛料はディーラー頼みだったので限りがあるのですが、野菜は裏の畑で自給自足してますし、肉については……今は街の外に大量にいるので、調達すること自体は然程難しくないので……」

　涙が止まったらしいマルクが詳しい事情を説明してくれる。表情がどこか複雑そうなのは、それが決して喜ばしいことではないからだろう。

「そういえばこの地域に生息している魔物は、食用として使われているのでしたね。セイボリーピッグは特に全身余すことなく食べられると聞いたことがあります」
「ええ、そうなんですよ。セイボリーピッグだけでなく、いいダシが取れる角を持ったテーストホーンや、脂肪が少なくてヘルシーだと女性に人気のある肉を持っているダイエタリーホースなど……そこが唯一の救いなのでしょうか」

　外に密集するほどの魔物がいるならば、余裕をもって街全体に食料が行き渡るだろう。以前のような彩りある食卓ではなさそうではあるが、餓死する可能性はない。あまり喜べることではないが、唯一の救いであることは確かだ。

「なら、遠慮せずにどんどん食べても大丈夫ってわけね。もう一回お代わりー！」
「ウフフ、そうですよ。遠慮なんてしなくていいですからね」

　チェルトが嬉々としてお代わりを要求するダニエラの皿を、微笑ましげな表情を浮かべながら受け取った。

「ダニエラ、動けなくなるまで食べるのはやめておきなよ？」
「だって美味しいんだもの。もっと食べたくなるじゃない」
「美味しいと言っていただけて、こちらも嬉しいです。はい、お代わりをどうぞ」
「ありがとう！」

　デリハルトも再びスプーンを動かし始める。彼らが食料に困っていないのなら、こちらも気にする必要はないだろう。

「リン様はお代わりは大丈夫でございますか？」
「はい。僕はこのくらいの量で丁度いいので。お気遣いありがとうございます」

　一人だけ、お代わりを要求していないリンが、空になった皿の隣にスプーンを置き、行儀よく座っている。背凭れに凭れることなく、背筋がピンと伸びているところは、大雑把なレニィの義妹とは思えない。彼女には既に亡くなった姉がいると聞いたから、きっとその姉から仕込まれたのだろう。しっかりとしたリンの言動は、レニィの教育の賜物ではないと断言できる。

「しかしリン様はすごい方ですね。ワイドリジョンは十六にならないと入団試験は受けられないと聞いてますが、その歳でもう既に入団されているなんて」
「ぶっ！」
「……」

　マルクの言葉に、リンではなくダニエラが噴き出した。デリハルトは思わず無言になり、そっとリンを見遣る。しかし当の本人は多少困ったような顔をしただけで、特別気分を害した雰囲気はない。

「こう見えても……僕は一応十六です」
「！　そ、そうなんですか!?　も、申しわけございません！」
「いいえ、年少に見られる外見をしているのは事実なので、お気になさらず」

　リンは小柄なダニエラよりも小さな少女だ。ガルデア支部の中で一番背が低いのは、彼女である。そして少女であるが故の顔立ちは、少年だと思って見てしまうと低い背丈も相俟って、幼く見えてしまうもの。

「た、大変申しわけありませんでした！　お客様になんという無礼を……！」
「いえ、歳相応に見られることの方が少ないので、気に病まれることはーー」
「本当に申しわけございません！」
「……聞いてないね、この人」

　マルクはリンに向かって何度も何度も頭を下げ続ける。流石のリンもこれには困惑気で、デリハルトはちらりと、妹であるチェルトの方に視線を送った。

「もう、兄さん。そう何度も謝られたら、お客様が引いてしまうじゃない。リン様、ごめんなさいね、兄は直情型の人間なもので」
「も、申しわけない……」

　チェルトは暴走する兄のよきストッパーらしい。彼女の言葉でマルクが頭を下げるのをやめると、リンは苦笑した。

「それじゃあそんなお二人さんに、もっと驚くこと教えてあげる」
「ダ、ダニエラ……？」

　口元を楽しそうにつり上げ、にこりと笑うダニエラから、何か嫌な予感がする。そしてそういった予感は大抵外れないと、経験が物語っていた。

「リンはあたしより一つ下の、十六歳の女の子よ。部屋はあたしと同室にしてあげてね」
「え……？」

　マルクとチェルトはぎょっと目を見開くと同時に、バッとリンを見た。そして、

「えええええええええええ！」
「うそおおおおおお!?」

　二人の絶叫が、暫く宿屋の中を木霊すことになる。

　賑やかだった宿の中から外へ出ると、再び静寂が空間を支配していた。時々そよぐ風の音が、大きくもないのに妙に耳に残る。

「……合流、しようか」
「はい……」

　胸中に一抹の寂しさが過ぎるのは、宿を経営している二人の兄妹がとても賑やかな人達だったからだろう。魔物の異常繁殖が起こる前はレンゲーの街も、同じように明るく賑やかだったはずだ。

「あたし達まで暗くなってどうすんのよ！　夕飯も腕によりをかけて作ってくれるって言ってたんだから、それを楽しみにしっかりと働かないとね」
「前向きだな、ダニエラは」
「それがあたしのいいところよ。スタイルのいい美少女は、内面から明るくないとね！」

　ダニエラが快活に笑う。確かに彼女の笑顔を見ていると、こちらも自然と笑みが浮かんでくる。彼女の容姿のよさが引き立ち、性別関係なく人目を引く魅力が溢れているのだろう。

「だからダニエラさんは、魅力的な女性なんですね」
「ウッフフフフフ！　そうよ、わかってるじゃなーい」

　正直に思ったことをいうと、ダニエラは気分がよさそうに口の端をつりあげ、リンの腕に己の腕を絡めてくる。彼女はよくこうしてリンの腕に抱きついてくることが多い。背丈がダニエラよりも少し低いだけのリンは、抱きつき易いのかもしれない。

「さあ、気分が浮上してきたところで早速探しに――って、何でまだ微妙な顔してるのよ、デリハ」

　ダニエラと一緒に後ろを振り返ると、デリハルトは視線を横へと泳がせ、口元を引き結び、陰りのある表情をしている。

「どうかしましたかデリハルトさん。何か気に掛かることでも？」
「いや……何でもないよ。気にしないで」
「いつになく暗いわね、デリハ。そんなんじゃ女の子にモテないわよー」
「あっはは……いや本当に、何もないから」

　ダニエラの軽口にも、デリハルトは乾いた笑みを浮かべるのみ。正直言って何もないように見えなかったが、彼の茶色の瞳が理由を聞いてくれるなと語っていた。ならばこれ以上は聞かない方がいいだろう。

「……本当に、リンが男の子じゃなくてよかった……」
「ん？　デリハ、今何て言ったの？」
「何でもないよ、ダニエラ」

　ボソリと呟かれた言葉は、リンの耳にも届かなかった。少し困惑しながらも、デリハルトから聞き出す術のない二人は、そそくさと先を歩く彼をじいっと見ることしかできない。

「なによう。デリハのくせに、あたしに隠し事なんて……絶対暴いてやるわ！」
「ほどほどにお願いしますね、ダニエラさん」

　拳を握りしめ、涼しい色彩なはずの青銀色の瞳が熱く燃えている。猪突猛進な彼女を止めることなどリンにはできるはずもないので、せめてやりすぎないよう釘を刺しておくに止めた。これも聞き入れてくれるかはわからないが、言わないよりはずっといいだろう。

　暫く三人は無言で閑散とした街を歩き回る。ほんの時折一人二人とすれ違うだけで、人気はほとんどなかった。そのため、自分達のように武器を持っている人間はとても目立つ。少し離れた先にいる得物を持った二人組みの男性がいることに気づくと、相手側もこちらに気づいたようだった。

「あ、もしかしてワイドリジョンの傭兵か？」
「あ、うん。そうだけど」

　声を掛けて来たのは、上背のある背中に槍を背負っている男性だった。デリハルトが返すと、彼らの表情がパアっと明るくなり、バタバタとこちらに向かって走ってくる。

「よかった。あなた方もレンゲーの街に来ることができたんですね」
「何とかってところだったけどな。俺らはアズゲリツから来たんだ。お前たちは？」
「あたし達はガルデアからよ。やっと合流できたんだし、まずは自己紹介でもしましょうか」

　ダニエラが切り出すと、背の高い男性はニカリと人好きのする笑みを見せた。

「俺はラントル。得物は見ての通り槍だ。でもって――」

「オレはヴィゲンだ！　よろしくなお前ら！」

　ラントルよりも頭一つ分背の低い少年が、偉そうに手を腰に当てながら自身の名を叫ぶ。腰に吊られているのは、彼の足よりも少し短い程度の長剣。鍔にはＣという文字が刻まれていた。そしてラントルの槍の柄の部分には、Ｂの文字が。

「俺はデリハルト。戦うのは得意じゃないけど、回復や補助は任せてくれ」
「あたしはダニエラ。十七歳の美少女双剣士よ」

　デリハルトとダニエラが、彼らに続いた。リンは一拍置いた後、口を開く。

「僕はリンです。どうぞよろしくお願いします」

　ペコリとアズゲリツ所属の二人に向かって頭を下げた。初対面の相手に礼儀を欠いてはならない。そして顔を上げると、ポカンと口を大きく開けたラントルと目が合う。

「あの、僕の顔に何かついてますか？」
「あ、いや。ついまじまじと見ちまってたか、悪い悪い。いやな、こいつと違って礼儀正しいなと思ってよ」

　苦笑しながら、ラントルが肘で隣にいるヴィゲンをつつく。いてっ、と小さな悲鳴が上がった。

「しかも――」

　言葉を不意に途切らせたと思ったら、ラントルはダニエラの前に立つ。そして彼女の右手を両手で包み込んだ。

「こんな綺麗なお嬢さんが一緒なんて……！　元気だけが無駄に有り余ってる馬鹿の面倒を押し付けられた心が洗われる……！」
「何だよー！　オレは馬鹿じゃないぞー！」

　彼の後ろで馬鹿呼ばわりされたヴィゲンが抗議の声を上げた。人のことを言えるわけではないが、ダニエラよりも少し高いだけの背丈と若干幼めの口調から、彼が十六歳以上とは思えない。しかし入団に年齢制限が定められている以上、彼もまたリンと同じ十六なのだろう。

「なら、存分にあたしで癒されるといいわ。美少女は人の目を楽しませるものだものね」

「お、ノリがいいなお嬢さん。早速だけど、ダニエラと呼んでもいいか？　俺のこともラントルでいいからさ」
「もちろん、いいわよ。そっちの子も、あたしのことは呼び捨てで構わないから」
「僕のことも、リンで構いません。恐らく一番年下でしょうし」

　ラントルの見た目からして、ダニエラと同い年か一つ年上かといったところだ。彼に対しては確実に年上であると言える。

「やけにちっちぇえヤツがいると思ったら、お前オレと同い年だったのか！」

　突如、ヴィゲンがリンの眼前へと飛び込んでくる。思わず一歩後退るが、爛々と輝く瞳はまっすぐリンを見つめていた。

「やったあ！　オレ、自分より背が低い同い年初めて見た！」

　彼は握り締めた両拳を、高々と頭上へ突き上げる。その行動は純粋に喜んでいるものであり、こちらを見下しているような雰囲気は一切ない。本当に、自分よりも背が低い相手がいたことを嬉しく思う以外ない、という反応だ。

「くぉらヴィゲン！　失礼だろうが！」
「ぶげ！」

　ラントルがヴィゲンの頭をボカリと叩き、潰れたような声が漏れた。

「ごめんな、リン。こいつは考えなしだから、いつも人に対して無神経なことを……」
「あ、いえ。僕の背が低いのは事実ですし。彼にも悪気はなさそうなので」

　見下すような気持ちが彼にあったならばリンも気分が悪くなっただろうが、ヴィゲンの言葉に含みは全くない。それにリンは、身長が低いことを別段気にしてはいないのだ。せいぜい高いところに手が届かないのが歯がゆいくらいで。

「ほーらデリハ！　ぼーっとしてないで、あんたも自分のこと呼び捨てでいいくらい言いなさいよ！」
「え？　あ、ああ、うん……」

　暫く無言のまま立っていたデリハルトの腕を、ダニエラが引っ張った。また何か考え事でもしていたのだろうか。

「俺のことも、デリハルトで。よろしく、ラントルにヴィゲン」
「ああ、こちらこそ」
「よろしくな！　ひょろい兄ちゃん！」
「ひょろ……！」

　ズガン、とデリハルトの頭に硬いモノが降ってきたかのような錯覚を覚えた。実際、ヴィゲンの言葉は深々とデリハルトの胸に刺さっただろう。肩をがくりと落とし、ずーんと影を背負う姿は落ち込んでいる以外のなにものでもない。

「こんの馬鹿野郎があ！　名乗ってくれたんだから、ちゃんと名前を言えド阿呆！」
「いてえ！　いてえってばラントル！」

　再びヴィゲンはラントルの鉄拳制裁を受ける。確かにデリハルトは背は高いが身体の線は細く、ひょろりとしているという形容そのままの姿だ。同じぐらいの背丈であるラントルと違い、肉付きもよくはない。

「デ、デリハルトさん！　あ、あなたは術師なんですから、武器を持って戦う人よりも細いのは当たり前ですって！」
「そーよそーよ。そんなの今更なことじゃない。なーに落ち込んでんのよ」

　リンがフォローを入れると、ダニエラがデリハルトの背中をバシバシと叩く。ダニエラとは反対の方向に視線を向けるデリハルトに、リンはハラハラと焦りが込み上げてきた。

「ほんっとうに申し訳ない、デリハルト！　うちの馬鹿のしつけが足りないばかりに……！
おら、お前も謝れヴィゲン！」
「いでででで！」

　ラントルはヴィゲンの頭をガシっと掴んで無理やり下げさせる。見てるだけでもその手に力がとてつもなく込められているのがわかり、ヴィゲンは謝罪を口にするどころではない。

「い、いや、別に謝ってもらうほどのことじゃないし。そ、それに彼痛がってるよ。止めてあげてくれ」
「……お前がそういうならいいけどよ」

　ヴィゲンの頭からラントルの手が離れ、解放される。彼は脱兎のごとくラントルから離れ――何故かリンの後ろへと回り込んだ。

「誰かの後ろに隠れるのなら、僕ではなくて、デリハルトさんのような背の高い人の方がいいんじゃないんですか？」
「何言ってんだよ！　スッポリ隠れちまったらそれはそれで悔しいじゃねえか！」
「……そういうものですか？」

　身を隠したい気持ちと、己の背丈が低いことによる悔しさを兼ね合わせた結果、リンの背後がいいと判断したらしい。身を隠すならば、姿が見えていては何の意味もないように思えるのだが。

「またお前は失礼なことを……」
「いえ、僕はそれ程背が低いことを気にしてはいませんので」
「え！　お前そんなちっちぇえのに、気にしてねえの!?」

　未だ大きく丸い瞳を、更に丸くさせたヴィゲンがリンの顔を覗き込んでくる。そしてその頭に再度、ゴツンと鈍い音が響いた。ラントルの拳骨だ。

「いくら相手が気にしてないと言っても、大声で叫ぶな！　お前だって自分より小さい小さいと連呼されたら嫌だろ！　自分が嫌なことを他人にすんじゃねえ！」
「うー……すまんリン」
「いえ……」

　アズゲリツに所属している者達が、何故ラントルをヴィゲンの相棒として選んだのかがわかった気がした。口は悪くとも、彼の言っていることは正しく面倒見がいい。ヴィゲンも頭を抑えて涙目になりながらも、反論をしていないのはそれがわかっているからだろう。いいコンビだなとリンは思った。

「はいはい、じゃれあいはそこまでにしましょ。まだセルシーの支部の人達と合流できてないんだからね」
「そういえばそうですね。彼らはどこにいるのでしょう」

　肝心の要請をしたセルシー支部の人とはまだ合流を果たしていない。リンは周りを見渡すが、それらしき人影は見当たらなかった。

「向こうも俺たちを探してるだろうし、五人連れ立って歩けば目立つだろうから、向こうが見つけてくれるんじゃないか？」
「それもそうだね。じゃあ暫くこの辺りをうろついてみようか」

　人気があまりない道に五人連れ立って歩く姿は、それは目立った。これならば確かに相手の方から見つけてくれるだろう。談笑しながら、街の中を歩く。

「なあ、リンは何で背が低いこと気にしてないんだ？　なんか気にならなくなるコツとかあるのか？」
「コツと言われましても……そういうヴィゲンさんは何故そこまで気にしているのですか？」

　道中、ラントルにバレないためか、こっそりと声のトーンを落としながらヴィゲンが話かけてくる。しかし、前方でデリハルトとダニエラに話しかけているラントルの耳がピクリと動いたのをリンは見た。彼の耳にしっかりと届いてしまっている。が、制止しようしてくる気配はない。何でもかでも、言動を厳しく制限するようなことはしないのだろう。

「えー、そんなの決まってんだろ。男だったら、やっぱり背は高い方がかっこいいじゃんか」
「……成る程」

　それを聞いてリンは、ヴィゲンとの意見の食い違いが何故起きたかを理解した。どうやらリンは、ヴィゲンに背が低いことを気にならなくなるコツというものを伝授できそうにない。
　リンにも、スラリとした高い背丈に憧れはある。だが、それは所詮憧れであり、絶対にその背丈になりたいという強い願望はない。何故ならリンの性別は女であり、女であるリンにはそこまで背丈に対するこだわりはないのだ。今の身長とて、女性としてなら極端に低いわけでもない。

（小柄には小柄の利点がある……と言っても彼は納得しないのだろうな）

　背が低ければ、物陰に姿を隠しやすかったり、背の高い相手よりも小回りが効く。小柄ならではの立ち回りというものがあるのだ。
　しかし彼が背丈を気にする大きな理由は、見た目に関すること。立ち回り方を気にしていたなら同じ小柄な人間として、いくらでも助言できただろう。が、外見的なことへの上手い助言などは持ち合わせていない。

（本当のことを言うべきか……否か）

　ヴィゲンが聞きたがっているのは『リンが低い身長を気にしない理由』だ。その答えなら、既にある。だが、それはきっと『初めて自分より背が低い同い年』という事実を消すことになるだろう。
　先ほどの言葉からして、ヴィゲンもラントルも、リンを少年と思って疑っていない。そしてヴィゲンが己より背の低いリンの存在を気にかけているにも関わらず、同じく彼より背の低いダニ

エラに対しては全く気にかけていなかった。ダニエラはリンと違い、一目で女性だとわかる見目をしている。それに年齢を口にしたことから、年上であるともわかっているだろう。
　なのにリンだけに背のことを指摘したのは、リンを男だと思っているから。ヴィゲンと同い年の『少年』が相手だったなら、確かに彼より背の低い者は滅多にいないだろう。現にガルデア支部の男性陣で一番背が低い者は、明らかにヴィゲンより背が高い。

「おーい、突然黙りこくってどうしたんだよ？」
「いえ……」

　今ここで明かすべきか否かを考えていたところ、全くの無言であったせいでヴィゲンが訝しげに目を細めていた。

（――黙っていても、後々ダニエラさん辺りが本当のことを言うか）

　宿屋でダニエラが面白がって告げたように。別に隠しているわけではないので、言うこと自体は別にいいのだが、その度に驚愕されるのは正直煩わしい。だから滅多なことがない限り、リンから性別を明かすことはなかった。自身が少年のように見えることは知っているし、少年のような格好をしているのだから、間違えられるのは当然だとも思っている。
　もしもこの場にダニエラやデリハルトがいなかったなら、リンは正しい性を明かすことを選んだりはしなかっただろう。しかしこうしてダニエラとデリハルトと行動を共にしている以上、彼らの口から訂正が入る可能性は高い。特にダニエラ。

「……驚かれるからもしれませんが、僕は――」
「あ、見て。あそこにいる三人組、そうじゃない？」

　意を決して口にした言葉を、ダニエラが遮った。リンを含めた四人の視線が、ダニエラが指差す方角へ集中する。
　少し離れた斜め前方に、のんびりと街道を横切っている三人組の男性がいる。手や腰のベルトなどにそれぞれ武器を所持していた。

「多分あの人達だろうな。おーい！」

　ラントルが三人組に向かって声を張り上げながら手を振った。すると三人組は徐にこちらを振り向く。彼らの歩みが止まった。

「もしかして、セルシー支部の人？　俺たちアズゲリツとガルデアから要請を受けたワイドリジョンの傭兵なんだけど」

「おう……そっちはもう人数揃ってたみたいだな」

　三人組の中のリーダー格と思われる金髪を逆立てた男を先頭にし、こちらに向かって歩いてくる。彼のベルトは長剣が吊られており、その後ろにいる体格のいい男の背中には大きな斧。そしてもう一人の細い体をした男は、手に杖を持っていた。それぞれ刻まれたランクはＢを示している。

「五人……俺たちを含めて八人……か」

　じとりと目を細めてこちらを見る様は、まるで値踏みされているかのようで、思わず口元を引き結ぶ。そしてリンとヴィゲンを見遣ると、いかにも落胆したと言わんばかりに大きく嘆息した。

「こんなガキ共を寄越すなんざ、何考えてんだガルデアとアズゲリツは」
「オレはガキじゃないぞ！　リンだって背は低いけど同じ十六だ！　馬鹿にするな！」
「……」

　見下された言葉に対し、ヴィゲンが眦をつり上げる。無言で応えたリンもまた、見た目で力量を一方的に測られたことが癪に障り、思わず相手を睨み返していた。

「しかもそのうちＣランクが三人……仕事を舐めているにもほどがないか？」
「はあ!?」
「おいちょっと待て。今のは聞き捨てならねえな」

　子供と思って舐められるのはそれでも想定の範囲内だ。だが、Ｃランクであることを、こうもあからさまに見下される筋合いなどない。リンとヴィゲンはまだ駆け出しであるし、デリハルトは攻撃系の魔術を苦手としているため、未だリンらと同じＣではある。だが、彼の使う補助や治癒系の魔術は貴重で頼もしいもの。
　彼は自分達のことを何も知らないのに、Ｃランクであるというだけで高圧的な態度を見せている。不愉快という言葉で済む問題ではない。

「お前だって初めはＣだっただろうが。ワイドリジョンに所属すれば、皆平等にＣから始まる。それぐらい知ってんだろ！」
「そうよ！　デリハだって攻撃魔術が苦手で昇格できないだけなんだから！　補助や治癒術使わせたら、そんじょそこらの術師なんて手も足もでないわよ！」

　ラントルとダニエラがリーダー格の男に食ってかかった。しかし、彼は意に返した風もなく、

細められた目つきは冷めたまま。

「ふん、こいつらが経験不足の足手纏いだってことに変わりはねえな」
「俺たちさぁ、弱いヤツらの尻拭いはゴメン被りたいっていうかぁ」
「そっちのＢランクのお二人さんとなら、別に文句はないんだけどよう」

　リーダー格の男だけでなく、もう二人も同じ考えのようであるらしい。諌めるでもなく、完全に同調している。ニヤニヤと細められた瞳は、明らかにこちらを嘲っていた。

「……僕の記憶が確かなら、要請の依頼書にランク制限の記載はされていなかったと思いましたが。Ｃランクが用済みだというのなら、初めからそちらでその旨を記載すべきだったのでは？」

　リンは自分でも声音が低くなっていることを自覚しながらも、淡々と言葉を紡ぐ。一番納得がいかないのはそこだ。リンはレニィから依頼書を見せてもらったが、そこにＢランク以上の者を派遣してほしいような、ランクを制限する記述はなかった。そしてレンゲーの街周辺にいる魔物はＣまたはＢランク。Ｂランクだけでなく、Ｃランクの者にも声がかかると容易に想像がつくはずだろう。依頼は基本、低いランクの者を優先されるのだから。

「リンの言う通りだ。俺も依頼書を確認したが、ランク制限の記載なんてなかったぜ。Ｂランク以上の人間に来てほしかったなら、ハナっからそう書いとけってんだ」

　つまり、Ｃランクの人間が来る可能性が高いことを、初めから承知しているはずなのだ。なのにここにきて、Ｃランクのリン達をいらないというのは、筋が通らない。

「……本来なら、この依頼は俺たち三人のみで受けるはずだった依頼だ」

　しかし、三人組はこちらの疑問点すら意に介していないようだった。むしろ、こちらがそう返すのを初めからわかっていたかのように、態度を崩さない。

「セルシーのまとめ役がさぁ、親切心かなんかしらねえけど、人数が多いに越したことはないだろって先に要請を出しちまったんだよなぁ」
「だからさー、俺たちにとっては三人いれば充分なんだよなー、うん。まあ、呼んじまったのはしょうがねえから、報酬は分けてやるけどよぉ。俺たちの邪魔だけはしないでほしいっていうか」
「うっわ、何その上から目線！　むっかつく！」
「Ｃランクだからって舐めくさりやがって！」

　ダニエラとヴィゲンがまるで噛み付くかのように、三人の男を睨みつけた。ヴィゲンは両の拳を握り締め、今にも殴りかからんとする勢いである。

「あんたらみたいなヤツらの手を借りるだなんて、冗談じゃないわ！　そっちが三人で充分だっていうなら、こっちは五人で充分よ！」
「そりゃあこっちも願ったりかなったりだ。足手纏いの面倒なんざみたくねえからな」
「ふん！　決まりね！」

　威勢のいい啖呵を切った後、ダニエラは腰に手を当てながら、怒気の孕んだ青銀色の瞳をこちらに向けた。視線だけでこれでいいかと尋ねてくる。それにリンはコクリと頷いた。いくら腕が立つといっても、協調性のない相手と組んでは上手く行くこともいかなくなるだろう。ダニエラの言葉に異議はない。

　話は纏まったと、彼らは背を向けて去っていった。ヴィゲンは彼らに向かい、舌をべーっと出すが、ラントルはそれを咎めることはしない。

「……八人が五人になってしまったけど、これで大丈夫、だよね？」
「大丈夫に決まってんでしょデリハ！　あたし達あの群れの中を横切ってこれたのよ！　問題ないわ！」
「俺らだって二人で強行突破してきたんだ。それよりも人数が増えてる。充分じゃねえか」
「だな！」

　アズゲリツの二人も強く同意する。複数で無数の魔物を退治する際、いかに協調性が大事となるか、同じく理解しているのだろう。

（なのに何故、あの人達はそれを理解してないんだ……？）

　駆け出しの自分達だって、できることはある。入団試験に合格したということは、最低限の戦闘力はあると同義なのだから。彼らもあの群れの中を横切ってきたならば、少しでも人数は多いに越したことはないことぐらい、わかるだろうに。

「リンー！　一度街の入り口に行くわよ！　早くきてー！」

「あ、はい。すいません」

　今は深く考えていても仕方がない。五人での戦い方を頭の中で描きながら、先を行く仲間達の

元へと急いだ。

　建物の物陰の奥に、街の外へと通じる門へと向かう五人組の姿がある。意気揚々と進んでいく姿に、やる気が満ち溢れていることが見てとれて、思わずニヤリと口の端がつりあがった。

「作戦大成功ってな」
「だな。見ろよ、あいつら滅茶苦茶やる気出してんじゃん」
「これで、俺らは楽が出来るってもんよ」

　ガルデアとアズゲリツから派遣された五人は、特に何事もなくレンゲーへと辿り着いた。それができる程度の実力の持ち主達なら、やる気を出させれば充分に成果を出してくれるだろう。

「様子を見つつ、俺たちも行動を開始するか」
「おう！」
「いよっしゃ！」

　既に五人組の姿が見えなくなったところで、彼らと同じ方向へと歩き出した。

　門は日のあるうちは常に開かれている状態であるが、外にうようよといる魔物が入ってくる気配はない。街にはそれぞれ結界装置（シルトアプラテス）と呼ばれるものが設置されているからだ。鉱魔石という魔力を有した特殊な石を燃料に動く、魔物の侵入を阻む結界を生み出す装置である。これがあるからこそ、人々は日々魔物に恐怖することなく生きることができるのだ。

「やあっぱりうじゃうじゃいるわねぇ」

　開かれた門から外を伺うダニエラが、苦虫を噛み潰したような顔をする。ここから一歩でも外へと出たら、魔物に気づかれて集団で襲ってくるだろう。いつもは猪突猛進なダニエラも、このときばかりは無闇に飛び出さず、慎重だった。

「……これだけ多いのならば、暫くは街を背にして戦った方がいいかもしれませんね」
「だな……街から離れるのは危険だ。ある程度数が減らせるまでは、危なくなったら街の中へ飛び込めるような位置にいたほうがいいな。いくらデリハルトが治癒系の術が得意とはいえ、できるだけ怪我は避けたいしな」
「一対一なら、あんな魔物に絶対まけねーんだけどなぁ」

　リンの提案に、アズゲリツの二人も同意する。いかんせん数が多すぎた。退路をしっかり確保していなければ、大怪我では済まされない事態となるだろう。

「なら、門の傍で戦うようにしましょうか。暫くは安全を第一に考えた方がよさそうですし。ーーデリハルトさん」
「え、え？　なに？」

　突然リンにふられ、デリハルトは思わずどもった。リンは少し目を丸くするが、特に何も言わず、本題を口にする。

「この位置からですと、どこまでが補助や治癒術の射程に入りますか？」
「ここから？　えーと……個人にかけるなら三十メートル、全体にかけるなら十メートルってところかな」

　個人にかけるのと全体にかけるのとでは、当然射程距離が変わる。個人ならばもう少し離れてもかけられるだろうが、流石に姿が見えなくなってしまえばかけようがない。使い手の技量によって射程距離は伸びるが、当然無限ではないのだ。

「なら、ここから十メートルまでの範囲で戦うでいいわね。その方がデリハが一度に補助掛け易いし」
「でもって三十メートル以上は離れるなってことか。ヴィゲン、深追いは絶対するなよ？」
「おーよ！　わかってるって！」
「……不安だ」
「なんでだよー！」

　胸を張って応えるヴィゲンに、ラントルは顔を顰めた。しかし両腕を上に掲げて不満を訴えるヴィゲンの頭にポンと手をおき、冗談だよと人の悪い笑みを見せる。口ではヴィゲンのことを馬鹿といいつつ、本気で嫌ってるわけではないのだろう。

「そうと決まれば、早速魔物退治にとりかかりましょ！　デリハ、ありったけの補助をお願い！」
「あ、ああ。わかった」

　早く早くとダニエラに急かされ、デリハルトは杖を構えて詠唱を開始する。平原を横切ったときにかけたものは既に解けてしまっているから、かけなおしが必要だ。今回は魔術を使うことはないだろうから、魔術の攻撃力を高める『賢者の才知（スマートブリリアンス）』はかけなくてもいいだろう。

「我等を震撼させし災いへの守護『衝撃の保護（アタックプロテクト）』！　……これでいいかな？」
「うおー！　すげえ！　なんか身体がいつもより軽い！　これが補助魔術ってヤツかぁ！」

　ヴィゲンが自分の身体を見回しながら、嬉々とした声をあげる。彼はリンと同じく入団したばかりの駆け出しのようであるし、補助魔術をかけてもらうのは初めてなのだろう。むしろ大抵の駆け出しは、入団時に補助系の術なんて覚えていない。真っ先に学ぶのは皆、攻撃することなのだから。戦うことに慣れるにつれ、同じ支部の仲間から教えてもらって習得していくのが通常の流れである。リンのように、入団前から魔術全般を学んでいる方が珍しい。

（そういえばダニエラに初めて補助術かけたときも、同じような反応してたなぁ）

　ダニエラとデリハルトは同い年であるが、入団時期はデリハルトの方が先である。そしてダニエラの初仕事にはデリハルトも参加することになり、そこで彼女に補助術をかけたときの反応は、今しがたのヴィゲンとほとんど同じだった。

『すっごーい、身体が軽いわ！　なんか強くなった気がする！　補助魔術ってすごいのね！』

　キラキラと輝いている瞳はあのときのような青銀色ではないが、デリハルトは懐かしさと同時に微笑ましい気持ちが沸いてくる。

「よーっし！　思う存分暴れてやるぜ！」
「よし、深追いしない程度にさっき溜まった鬱憤を魔物にぶつけてやれ！」
「おーよ！」
「あたしも！」

　アズゲリツの二人は颯爽と門の外へと飛び出していく。それに続いてダニエラも飛び出した。

「それじゃあ俺たちも行こうか、リン」
「え？　デリハルトさんはここにいてください。外に出たら危険です」
「え……？」

　彼らに続き、外に出ようとしたところをリンに引き止められる。彼女は理知的な瞳をまっすぐこちらに向けた。

「あなたは僕たちの要です。もしも怪我をしても、デリハルトさんがいればすぐに治癒できます。ですから、デリハルトさんには門の内側から、僕達を支援してほしいんです」
「あ、あー……そうか。うん」

　ちらりと門の外を見ると、魔物の群れが一斉にこちらへと近づいてきていた。レンゲー周辺に生息しているだろう、全種類の魔物が殺気を露に押し寄せている。先に外へ出ていた三人がそれぞれ武器を構えた。あの群れと戦うことを考えると、確実に乱戦となるだろう。そこへデリハルトがのこのこと出て行っては、邪魔になるだけでなく彼らに守って貰わなければならなくなる。つまり、ただの足手纏いだ。

「そう……だね。俺が外へ行ったら守ってもらわないといけなくなるし……」
「すいません。この人数だと、目の前の魔物を倒すことで精一杯なんです。ですが、ここから魔術を使ってくれると、僕たちは本当に助かります。ーーー人安全圏にいることを、後ろめたく思うことはありませんよ。皆さんきっと同じ気持ちだと思いますし」

　にこりと柔らかく微笑むリンに、デリハルトは大きく息を吐き出した。そうだ、自分は足手纏いだということに落ち込んでいる場合じゃない。人には向き不向きがあるのだ。デリハルトが一人だけ安全圏にいなければならないのも、確固とした理由がある。

「……そうだね。俺は援護に専念させてもらうよ」
「お願いします」

　リンはデリハルトに向かって軽く頭を下げると、門を潜りながら鞘から剣を抜き放つ。

（俺は武器を持って戦うことはできないけど……）

　杖を握る手に力が篭る。かけた補助魔術は暫く解けることはない。ならば場に応じて攻撃系の魔術を使った方がいいだろう。あまり得意ではないが、一撃で倒せるような威力は必要ない。魔物のリズムを崩し、仲間達が有利に戦える状況を作ればいいのだから。
　大群がこちらに押し寄せてきている。ここは少しでも分散させた方がいい。仲間達は門の外のすぐ近くにいるから、魔術に巻き込まれることもないだろう。

「荒ぶる氷雪、宙へと舞い散れ『雪の嵐（スノウストーム）』！」

　春も暖かな陽気の中に、凍える冷風が巻き起こる。先頭を走っていた魔物は突然の冷気に驚き、駆ける足が鈍くなった。

　攻撃系魔術は炎・地・水・氷・風・雷と六つの属性に別れている。魔力の質によってそれぞれ得意とする属性があった。デリハルトが得意なのは氷。元々氷属性の魔術は、威力よりも相手を凍らせて動きを封じたりする役割を持つ。だからこそ、氷属性の魔術とデリハルトの魔力の相性はよかったのだろう。似たような系統である、吹き飛ばすことを主な役割とする風属性の術もまた、氷属性と相性がいいためそこそこ使うことができる。同じく氷と相性のいい水属性は完全に攻撃的な術しかないため、全く使うことができないが。
　そして氷属性と相性の悪い地属性と雷属性もまた、初級の簡単な術さえ行使できない。最も相性が悪いとされる炎属性の魔術は論外だ。
　属性にはそれぞれ相性と呼ばれるものがあった。炎は地と雷と相性がよくて水と風が悪く、そして氷は最も合わない。地属性は炎と水と相性がよくて氷と雷が悪く、風が最も合わないというように。
　炎・地・水・氷・風・雷という六つの並び順は、そのまま相性表でもあった。隣り合う属性の相性はよく、離れるほど相性は悪くなるのだ。特に炎と氷、地と風、水と雷の組み合わせは最も相性が悪いと言われている。

「隙あり！」

　ダニエラが一番手前にいる魔物の懐目掛けて飛び込んでいく。前線にいるのは主にダイエタリーホースだった。すらりとした長い四肢を持つこの魔物は、足が速いのだ。そして同じく長く伸

びている生物全般の急所である首筋を、ダニエラは双つの短剣で切り裂いた。続けざまに身体を捻ってすぐ近くにいたもう一頭の頸部を切りつける。

「うおらあああ！」

　雄叫びをあげながら、ヴィゲンがまるで棒を振り回すように長剣を振るう。周りにいたダイエタリーホースの頸部が容赦なく殴打されていく。その隣でリンが怯んだダイエタリーホースの足を切り落としていった。絶命させるに至らずとも、足を奪えば完全に動きを封じることができるだろう。

「！　ダニエラ、後ろ！」

　正面の魔物の頸部を的確に切りつけていくダニエラの背後に、テーストホーンが鋭い角を向け、突進しようと近づいてきていた。デリハルトは慌てて魔術を詠唱しようとするが、ダニエラとテーストホーンの間に黒影が割り込んだ。

「女性の背後をとるなんざ、魔物だろうと許せねえ、な！」

　テーストホーンの眉間目掛け、槍の穂先が繰り出される。刃先が眉間に突き刺さると、テーストホーンは慄いた。その隙に今度は槍の柄が足元を払い、横転させられる。くるりと槍を回しながら高く掲げ、そして振り下ろされた穂先がテーストホーンの首を貫いた。

「ありがと、助かったわ」
「いいってことよ」

　短い謝辞を済ますと、二人はまた別々の魔物に向かっていく。

（……）

　デリハルトはダニエラとラントルのやり取りを、複雑な気持ちで見送った。ダニエラの無事は喜ぶべきことだが、それをしたのが自分ではなかったことを悔しく思う。そんなことを思っても仕方がないことだというのに。前線に立てないデリハルトよりも、同じ場所に立つ彼の方がダニエラを守ることは容易いのは当然のことだ。

「いで！」
「ヴィゲンさん！」

　ハッと二人の悲鳴でデリハルトの思考は中断された。彼らの方をみると、ヴィゲンが力なく剣を握りながら、片腕を抑えている。『衝撃の保護（アタックプロテクト）』をかけたといっても、全ての衝撃を緩和できるわけではない。遠目からではわかりにくいが、出血までは至っていないだろう。それでも、身体を痛めたならば無理はさせられない。

「聖なる光りよ我が手に集え、『回復（ヒール）』！」

　柔らかい光りがヴィゲンに降り注ぎ優しく包み込んでいく。光りが晴れると、ヴィゲンは意気揚々と腕を振り回した。その手には剣がしっかりと握られている。

「サンキュ！　デリハルト！　うらあああああ！」

　本調子を取り戻したヴィゲンは長剣を振り回しながら、魔物たちの横っ面をボカスカと叩いて回っていく。その戦い方では、長剣よりもハンマーのような殴ることを目的に作られた武器の方がいいのではないかと思えた。

（……俺に、落ち込んでる暇なんてない）

　安全圏にいるからこそ、仲間全員に気を配らねばならないのだ。怪我をしたら瞬時に治癒術を使い、先ほどのダニエラのように不意をつかれそうだったら攻撃術で援護する。安全圏にいることを後ろめたく思うことはない。先ほどのリンの言葉がすんなりとデリハルトの中に浸透していくのがわかった。

「凍てつきなさい『氷の塊（アイスカスター）』！」

　二頭同時にラントルを襲おうとしたセイボリーピッグの片方に向かって、魔術を唱えた。足が氷によって覆われ、セイボリーピッグの身動きがとれなくなる。

「！　ありがとな、デリハルト！」

　ラントルは先に襲ってくるセイボリーピッグを薙ぎ払ったあと、身動きがとれなくなった方に穂先を向ける。
　それを全て見届ける前に、今度はリンの背後をとろうとしたテーストホーンに向かって『氷の塊（アイスカスター）』を放った。氷属性の中で最も簡単なこの術ならば、連続で使用しても後々の疲労は少ない。それに、少しの足止めだけでも、効果は大きいのだ。

（四人が戦いに集中できるよう、援護する）

デリハルトは再び杖を構えた。

　気づけば周囲には、夥しい数の絶命した魔物の躯が転がっていた。このまま続けたら、足場を確保するのが難しくなってくるだろう。

「一度引き上げませんか!?　このままでは足場がなくなります！」
「だな！　一旦引くか！」
「了解！」

　リンが声を張り上げると、ラントルとダニエラから了承の声があがる。

「えー、オレまだ戦い足りねえよー」
「わがままいうなっつの！　さっさと街に戻るぞヴィゲン！」
「うえーい……」

　一人、不服そうな表情を浮かべるヴィゲンに苦笑しながら、リンはダニエラと共に門の下を潜った。

「皆お疲れ。大丈夫？」

　門の内側にいたデリハルトが、気遣わしげな表情で出迎えてくれる。

「デリハルトさん、援護ありがとうございました。おかげで戦いやすかったです」

　戦闘中、魔物の攻撃を受けてしまったときはすかさず回復してくれたし、『氷の塊（アイスカスター）』で動きを封じてもくれた。そのおかげで、あれだけの数の魔物が押し寄せてきても、応戦することができた。

「いや、それが俺の役目だからね。大きな怪我がないようで安心したよ」
「そーよそーよ。次もまた援護頼んじゃうんだから、きばっていきなさいよね！」
「もちろん」

　ダニエラがリンの肩に腕を回しながら、割り込んでくる。それに応えたデリハルトの笑みに屈託はない。己の役割の重要さに気づいてくれたのだろう。彼がいなければ、上手く立ち回れていた自信はなかった。

「とりあえず、この後どうするよ？　それと、魔物の遺骸は放置でいいのか？」

　ラントルが門の外を見ながら、僅かに眉根を寄せた。リンも外を見ると、魔物達は死んでいる別の種族の魔物の遺体を、それぞれどこかへ運ぼうとしているところだった。魔物は基本雑食だ。恐らく巣に持ち帰って餌にするのだろう。

「なあ。こいつらに死体くわれたらヤバイんじゃね？　また数増えちまうぜ」

　ヴィゲンの問いに、リンは無言で頷いた。魔物は餌があればあるほど、大量に増え続ける。リン達が倒した魔物の躯が彼らの糧となってしまうとなると、一旦は減らせてもまた増えてしまうだろう。堂々巡りだ。

「しょうがないわね。このダニエラさんが上級魔術で追い払ってあげるわ」
「待って、ダニエラ。一度追い払ったとしても、暫くしたらまた魔物はやってくるよ」
「……そうですね。それもあくまで、一時しのぎにしかなりません」

　ダニエラの提案を言外に却下すると、彼女は不服そうに頬を膨らませた。それをデリハルトがまあまあと宥めている。

「しっかし本当にどうするよ？　このままほっぽといたら、俺たちが魔物に餌やったような形になっちまうぜ」
「……遺体の始末ができないわけじゃないのですが……」

　ボソリと、小さく呟いた言葉に、一斉に視線がリンへと向けられた。ヴィゲンに至っては、爛々と眼差しが輝いている。

「なんだあるんじゃん！　何で早くいわねーんだよ、リン」
「いえその……効率が悪いといいますか……皆さんにも手伝ってもらわないといけないと言いますか……」
「水くせえな。この依頼を達成するまで、俺らは一蓮托生の仲間だ。配属が違うからって遠慮するこたねえよ。策があるなら言ってくれ」
「そうよね、うんうん。いいこというじゃない、ラントル」

　ラントルの言葉にダニエラが偉そうに頷いた。デリハルトは苦笑しながらも、何も言わずにリンを見遣る。彼もまた同意見なのだろう。そんな彼らの気持ちを無下にするわけにはいかない。リンを意を決して口を開いた。

「炎属性の中級術に『火葬の焔（クレメーションバーナー）』という術があるのですが、これを

使えば平原の草花を燃やすことなく、対象のみを焼き尽くすことができます」
「そういえば、リンは炎属性の魔術が得意なんだっけ？」
「正確には、炎だけなら下級以上も使えるというだけですが……」
「えー？　魔術使えるだけですげーだろ！　オレなんか、サッパリわかんねーからな！」
「俺も使えないから人のこと言えた義理じゃねえが、お前は真面目に魔術を習得する気はあるのか！」
「だってわかんねーもんはわかんねーだもんよぉー」
「……話が脱線してるよ」
「お、わり」

　ずれかけた話を、デリハルトが軌道修正してくれる。リンは苦笑しながら、言葉を続けた。

「一応僕も使えなくはないのですが、生来、あまり魔力が高くなくて……一度に使えるのは、せいぜい三回程度でしょうか」

　魔物の遺体が散らばってるのは、そこまで広い範囲ではない。が、たったの三回で全て焼き尽くすのはきっとムリだろう。隙間なく埋め尽くされているならまだしも、一応まだ足場にできるスペースが残っているのだから。

「ですから、三回で燃やしつくせるように、魔物の遺体を三箇所に纏めなければなりません……」

　リンが言い淀んだのはそれが理由だ。もう一度外に出て、今度は魔物を動かすという作業をしなければならないこと。その間、魔物が襲ってくることもあるだろうし、それに魔物一頭一頭、それなりの重さがある。重労働になるのは目に見えていた。

（僕にも上級術が使える魔力があればな……）

　上級術に要求される魔力は、凡そ中級術の十倍といわれている。その分威力も高いわけだが、生まれつき魔力の量は決まっているため、どうしようもない。

「なぁんだ、そんなことか！」

　ヴィゲンが偉そうに腰に手をあてながらニカリと笑う。

「オレはまだ暴れたりなかったんだ。燃えやすいようにあいつらを蹴飛ばすなりして同じ場所に集めりゃいいんだろ？」

「え、ええ、まあ……」

　あっさりと言い放つヴィゲンに、リンは思わずポカンとした。こうもあっさりと頷いてくれるなんて、思ってもいなかったのだ。

「まあ、あれを何とかしなけりゃ、この仕事が延々続くわけだしな……やるっきゃねえよ」
「しんどそうだけど、そうも言ってられないしねぇ」

　ラントルとダニエラも、浮かない顔ながらも同意を示してくれる。

「他にいい案があればよかったのですが……」
「ないものねだりしたってしょうがねえよ。だったらあるもんでなんとかするだけだ」
「だな！　よし、オレ早速行ってくる！」
「あ、ちょ……！」

　ヴィゲンが先走って外へと行ってしまう。ヴィゲンの存在に気づいた魔物たちが、再び殺気立ち、鈍い唸り声が響いてくる。

「あんの馬鹿……！」
「一人じゃ危ない……！　強き光り、堅固たる守護となりて魔の侵入を阻め『障壁の結界（ブロックシルト）』！」

　デリハルトを中心に、青白い光りがまるで大きな円を描くかのように広がっていった。先へ進んだヴィゲンを追い抜き、近づいてきていた魔物を弾くように追い払っていく。

「『障壁の結界（ブロックシルト）』……難しい術なのに、デリハルトさん使えたんですね」

　遺体が転がっているところを、青白く光る薄い膜のようなものがスッポリと覆っている。膜の外側では、魔物が突進しては膜に弾かれるということを繰り返していた。儚く頼りないように見えて、効果は抜群である。
　街に使われている結界装置（シルトアプラテス）は、この『障壁の結界（ブロックシルト）』を応用したもの。人間一人が行使した場合、場所と時間が限られてしまうため、永続的に街を覆えるほどの結界を生み出すために編み出された。今では習得の難しさもあって、会得している者は少ないと聞いている。

「消費が、激しいから……一日一回しか使えないけど、ね……」

　デリハルトががくりと膝をつく。しかし表情は穏やかで、疲れてはいるだろうが心配するほどではないようだった。

「ありがとうございます。これで魔物を気にせずに作業できますね」
「ならちゃっちゃとしちゃいましょ！　面倒なことは先に済ませるべきだわ」
「俺も、少し休んだら手伝うよ」

　門の石壁に寄りかかりながらデリハルトは腰をおろした。リンは軽く頭を下げてから、既に魔物を集め始めているヴィゲンのところへと向かう。

　やはり魔物一体一体が非常に重く、動かすだけでも一苦労だった。女性であるが故に、純粋な力に関してはあまりあるとはいえないリンは、同じく女性であるダニエラと二人で協力しながら、魔物を動かす。アズゲリツの二人は流石男性というべきか、大変そうではあったが己の力のみでも移動させることができていた。特にヴィゲンは自分で言っていた通り、力が有り余っていたのか、蹴ったり時には投げ飛ばしたりしながら、順調に一箇所に集めていく。

「あー……つっかれたぁ……！」

　ダニエラがペタリと後ろでをつきながら地べたに座り込む。
　漸く三つに纏められたときには、日が既に傾き始めていた。青く澄んでいた空が、次第に赤みを帯びていく。

「皆さん、ありがとうございました」
「なーに、これも仕事のうちだ」
「おうよ！　リンって、ほんとに遠慮しいだな！」
「お前もちったぁ見習え」
「ムリだな！」

　即答したヴィゲンの頭に、ラントルは無言で掌を乗せ、ぐっと指先に力を入れる。ヴィゲンから悲鳴があがった。

「……それでは燃やしますか」

　止める気力がなくなっていたリンは彼らを放置することにして、纏めた小山の一つに向かって剣を抜く。

「灼熱の炎、かのものを抱擁せよ『火葬の焔（クレメーションバーナー）』！」

　剣先から炎が迸り、遺体の山を覆っていく。剣先を下ろしたときには、全体が炎で炙られていた。

「これで一つ目……」

　一度大きく息を吐き出しながら、燃え盛る魔物の山を見る。轟々と音を立てて燃えているというのに、足場となっている草花は一切燃えてはいない。これは『火葬の焔（クレメーションバーナー）』のみの特殊な効果であり、他の炎属性の魔術では普通に草花も燃えてしまう。対象以外を焼かない炎というものは、こんな場合とても便利だ。

「うわー……なんかいい匂いすんなぁ。腹へってきた」
「きっとセイボリーピッグの匂いだよ。焼くといい匂いがするから、こんな名称がつけられたくらいだしね」

　ヴィゲンが頭をさすりながら、鼻をひくひくとさせる。場にそぐわない香ばしい匂いが、リンの鼻腔もくすぐった。長時間の戦闘に、魔物を移動させるという重労働もしたのだ。腹が空腹を訴えてきていてもおかしくはない。それに日も暮れてしまえば夕食の時間だ。

「今日の夕ご飯何かしら。楽しみだわぁ」
「そうだね」

　ダニエラがうっとりと両手を胸の前で組む。チェルトの作ったシチューはとても美味であったから、夕飯もまた美味しいものを作ってくれるだろう。彼女の傍に寄っていたデリハルトもまた同意している。

「よし……これで最後……」

　その間に二つ目の山に魔術をかけたリンは、三つ目の小山に足を向ける。身体が気だるさを帯びていっているのがわかるが、今は根を上げている場合ではない。休むのは、この後宿に帰ってからだ。

「なあリン、燃やすのちょっと待ってくれよ」
「はい？」

　三つ目の小山に剣先を向けたリンに、ヴィゲンが駆け寄ってくる。戦闘後の重労働の後、走る余裕があるのは彼だけだろう。スタミナだけなら、年上のラントルよりも上のようだ。

「このいい匂いがする豚、一頭持ってかえりてーんだ。今日のタメシにしてもらう！」
「ヴィゲン……持って帰るのはいいが、俺は運ぶの手伝わねーぞ……」
「だいじょーぶ！　俺が宿まで持ってく！」

　ヴィゲンは自信満々に胸を張った。元気が有り余っているようだし、自分で持っていくというのならば、リンに断る理由はない。

「わかりました。どうぞ」
「サンキュ！　どれが旨そうかな……」

　目をキラキラと輝かせながら、横たわっているセイボリーピッグを目で追っている。あっさりこれと決めてくれるかと思いきや、彼は顎にうーんと手を当てながら唸っていて、中々決まりそうにない。

「早くしろよ。リンが待ってるだろ」
「……どれも同じだと思いますよ？」
「じゃあこれにする！」

　魔物の肉の良し悪しが見た目でわかるはずがなく、ラントルと共に選ぶことを急かすと、彼は悩んでいたのが嘘のように、近くのセイボリーピッグを引っ張り上げた。

「あ、そういえばヴェルさんに、テーストホーンの角を幾つかとってきてほしいって頼まれてたんだっけ。すっかり忘れてたわ」

　ダニエラが今思い出したと、軽く掌を打った。彼女のいうヴェルさんとは、ガルデア支部に所属している女性、ヴェルザのことだ。彼女はデリハルトと同じく杖を得物とする術師であるが、ガルデア支部の中で一番料理が得意でもある。女性陣の中では最年長ということもあるのか、穏やかな空気を纏った家庭的な女性だ。食事については当番制ではあるものの、そのほとんどを彼女が手がけている。

「そんな大事なことを忘れるなよ……」
「思い出したからいいじゃない。あたしもついでに幾つか持って帰ろうかしらね」
「それは魔物の数が落ち着いてきたときでいいんじゃないんですか？　どうせ毎日いくらでもとれるものですし」

　これから魔物の数が落ち着くまで、自分達は毎日テーストホーンを含む魔物と対峙しなければ

ならない。機会はいくらでもあるのだから、持って帰るのは今でなくともいいだろう。

「そういやテーストホーンの角からとれるダシは旨いらしいな。これも幾つか持ってって夕飯の彩りにしてもらうか。これくらいなら重くはねえしな」
「お、いいなそれ！」
「やっぱりあたしも持ってくわ！　チェルトさんにあげたらきっと喜ぶもの。もっと美味しい料理を作ってくれるわ」

　ダニエラは嬉々として片方の剣を抜くと、テーストホーンの角を切り落としていく。

「そういやテーストホーンの角は、よその街だと結構高値で売れるらしいぜ。テーストホーンの生息域はこの平原一帯だけみてえだから、他の街じゃあ貴重なんだと」
「へえ。でも、こんなにたくさんいると逆にありがたみがないわねぇ。人によっては宝の山かもしれないけど」

（……）

　ダニエラの何気ない言葉に、胸中にあることが過ぎった。
　ワイドリジョンに入団するために訪れた街、コリアリィ。リンはそこで、異常繁殖した魔物と遭遇している。それは自然に起こったことではなく、ある腹黒い男が意図的に引き起こしたものだった。邪魔者を排除する、たったそれだけのことのために。

（この辺にしか棲息しない、高値で売れる角を持つ魔物……異常としか思えない数……いや、流石にそれは考えすぎ、か）

　疑念を払うように、リンは首を横に振った。もしもこれがあのときのように意図的に引き起こされたとしても、流石にここまで増やしすぎては手に負えなくなる。それに、増えたのはテーストホーンだけではないのだ。他の魔物まで増やしてしまってはリスクばかりが高くなるだけだろう。

「リン、どうかした？」
「いえ、何でもありません」

　今はこんなことを考えていても仕方がない。魔物達が増えた原因よりも、ひたすら減らす方が大事なのだから。このことを口にするときは、大分数が減ってきたときだろう。

「それにしても……こうしていろいろ持っていくなら、街の人に持っていって貰えばよかったか

もしれないね……」
「あ……」

　デリハルトの言葉に、ヴィゲン以外の三人はピタリと固まった。
　リンはぎこちない動きで纏められた魔物の遺骸を見る。それですら結構な数があり、運ぶだけでも一苦労だった。だが、街の人達にそれぞれ持っていってもらうならば、こうした手間は必要なかっただろう。

「デリハぁ、それもっと早く言ってよー」
「俺も今思いついたんだよ……」
「思いつかなくて、申しわけありません……」
「いや、全員が納得してやったわけだし、リンが悪いんじゃないだろ。それに、倒した魔物の所有権は倒したヤツにあるっていう暗黙の了解みたいなのあるし、思いつかなくてもしょうがねえって」

　四人は盛大に肩を落とした。早くにそのことを思いついていれば、皆に重労働を課さずともよかっただろう。いくら倒した魔物をどう処分するか、倒した本人にその権利がある風潮だとしても。ラントルは言外に気にするなと言ってくれたが、流石に申し訳なくて再度四人に謝罪を口にする。

「済んじゃったことだもの、もう謝らなくていいわ、リン。それよりも、残りはどうする？　今からでも街の人達に知らせた方がいいのかしら。あたしは正直今からじゃ面倒だから、やりたくないけど」

　そういいながら、ダニエラは手をひらひらと振る。リンは少し俯いて逡巡した後、顔を上げた。

「今日は燃やしてしまいましょうか。街の人達に還元するのは明日からにしましょう」
「うん、それがいいわ」
「そうしようぜ。明日から今日みたいな戦った後の処理をしなくていいってなら、それだけで気が楽になるってもんだ」
「なら、宿屋の人に街の人達に知らせてもらえるように頼もうか。俺たちが街を回って知らせるよりも、その方が早く街中に知れ渡るだろうし」
「燃やすなら早く燃やそうぜ！　オレ腹減ったから早く帰りてえ」
「お前はもっと空気を読め、ヴィゲン」

　賛同を得たリンは、抜いたままの剣先を遺体の塊に向けた。そして詠唱の後、あっという間に

炎に包まれる。くらりと一瞬頭が揺れるが、足を一歩後退させてことなきを得た。これで今日のところは、暫く魔術は使えないだろう。

「今日はこれで終わり、か。皆お疲れ様」
「おうお疲れ！　早く帰ろうぜランドル！」
「へーへー。悪いが先に戻るわ。また明日な、ダニエラ、リン、デリハルト」
「明日もよろしくね」
「……お疲れ様でした」

　終わりとなるやいなや、ランドルはヴィゲンに急かされ、そのままアズゲリツの二人は街の中へと戻っていく。

「リン、魔力を消費して疲れてるだろ？　火が消えるまで動けないから、その間座って休んでるといいよ」
「そうですね……そうします」

　デリハルトに促され、リンはその場に腰を下ろす。真紅に燃え上がる炎の熱を受けながら、完全に鎮火するまで見守っていた。

　物陰に隠れながら様子を伺っていると、残っていた三人が漸く街道を歩いていくのが見える。彼らの姿が見えなくなったところで物陰から出て、門の方を行く。
　そこには、自分達の望んでいたものがある。一面に広がる宝の群れが。興奮を隠し切れず、進む足は自然と早足になった。

「な、なんだこりゃ……」

　しかし、そこに自分達の望んでいたものはなかった。それどころか、何もない。来たときと同じような平原が広がっているだけ。いや、青白く光る膜のようなものが数メートル四方を円状に覆っていた。まるで隔絶されたかのように、この空間だけなにもなかった。

「あ、あいつら、働いてるように見せかけてサボってたのか？」
「いや、二人組みのチビの方がセイボリーピッグを担いでたぜ。三人組の中の女だって、テーストホーンの角を持ってたぞ。……あいつら、自分達の分以外は処分したのか」

　いくらなんでも、長時間経って狩ったのがほんの数頭だけとは思えない。彼らも彼らで、あの

夥しい数の魔物の群れを横切ってきたのだから、最低限の戦闘力はある。しかし、どうやって遺体を処分したのだろうか。埋められたような跡もない。

「……！　きっと『火葬の焔（クレメーションバーナー）』を使ったんだ！　この術なら、草を燃やさずに魔物だけ燃やしつくせる！」
「げ。そんな術あるのかよ……」

　術を主に使うハシルトが、何故何もない空間が広がっていたかの明確な理由を述べ、眉根を寄せた。

「あてが外れたな……放置してくれるもんだとばかり思ったが……」

　倒した魔物の処分は面倒なことこの上ない。売れる部位だけ取ったら放置が基本である。そうやって放っておけば、近辺に棲む魔物が餌にしてくれるのだから。

「くっそ、全然思い通り動いてくれねぇ連中だぜ……！　楽ができると思ったのによ」
「いやでもまて。『火葬の焔（クレメーションバーナー）』は中級術といえども、あの大量の魔物ほぼ全てに使うなんてことは流石にできねえ。全部燃やすなら、ある程度密接するように動かさないとムリだ。戦い終わった後にそんな重労働、何度もしてられるわけがねえ」
「なるほどな……なら、暫く様子見ってことだな」

　初めのうちは気力があるからこそ、そんな面倒なこともしようと思えるだろうが、日数を重ねれば、そんなことをしていられなくなるだろう。
　当初予定していた利益よりも大幅に下がってしまうことは痛いが、それはこちらが楽をする分の金額とでも思えばいい。前向きに考えることは大事だ。

「なら、今日はもうこんなところに用はねえな。宿に戻って一杯やろうぜ」
「おう」

　夕暮れ時になり、少なかった人気が更に少なくなったレンゲーの街並みを、三人は大股で闊歩しながら宿屋への道のりを進んだ。

「たっだいまー！」

　ダニエラが元気よく宿屋の扉を開けた。室内は既にランプの燭台に火が灯され、淡く照らしている。

「あ、お帰りなさいませ、お客様！」

　チェルトが座っていた椅子から立ち上がり、出迎えてくれた。そのテーブルには兄のマルクと、そしてもう一人。

「あれ？　俺達以外にもお客さんきたんだ」

　マルクの正面に座っていたのは、一人の中年の男だった。こちらに気づくと、人好きのするような笑顔を見せる。

「あ、いえあの人はお客さんじゃなくて……」
「私は彼らの父親ですよ、お客様」

　彼は椅子から立ち上がり、リン達に向けて軽く頭を下げる。背丈はマルクと同じくらいだが、がっしりとした体格の、人の良さそうな男性だった。しかし彼の片腕は現在、白い包帯でぐるぐると巻かれた上に、首から白い布を下げて固定されている。骨折しているのか。

「申しわけないですね、何もおかまいすることができなくて。こんな腕なものですからこいつらが部屋で休んでいろと聞かなくて」
「当たり前だろう、父さん。足は無事だからって動き回ってるけど、腕を動かそうとしたら治りが遅くなるからな」
「そうよ。仕事はあたし達に任せて、父さんは怪我の治療に専念してなさいよ」
「だからって一日中ぼうっとしてられるか。退屈なんだよ」

　彼は不機嫌そうに顔を顰めたが、目の奥は笑っている。きっとこれは、彼らにとってお決まりの流れなのだろう。そのやり取り自体を楽しんでいるようだった。

（腕を骨折……もしかして）

　リンは彼らから聞いた現状から、怪我をした経緯を推測する。そして口を開こうとしたとき、

それよりも先にすっとリンの横を誰かが通り過ぎた。

「すいません、よろしければ腕を見せてもらってもいいですか？　俺、治癒術使えるので、力になれるかもしれません」
「本当か！」

　デリハルトだった。腕の様子を見ながらうーんと唸ると、失礼しますと一言いってから杖を向けた。

「異常なる部位を我が目に映せ『透視（クライルボリアンス）』」

　詠唱の後、デリハルトの茶色の瞳が青白い光りの膜に覆われる。体内の異常を調べるための術、『透視（クライルボリアンス）』だ。医者のような治癒を専門とする者が主に覚えているのだが、それ以外の人間で習得しているものはあまりいないだろう。リンも魔力の低さを補うため、覚えられそうなものはひたすら習得したが、デリハルトの補助術のレパートリーの多さには敵わない。

「怪我をされてから数日経ってますね……これなら即効性の術は避けた方がいいな。……生命の根源、強く輝き助けとなれ『一助の気力（エイドエナジー）』」

　杖先から青い光りの珠が現れ、それは徐にチェルト達の父親の身体に向かい、吸い込まれていく。

「お、おお……」
「今のは身体の自然治癒力を高める術です。これであと五・六日ほど安静にしていればよくなると思います。――その間体力の消耗が激しくなって、疲れやすくなってしまいますが」
「いやいや、治る時間が早まっただけでもありがたい」
「そうですよ。疲れやすいのならむしろ好都合です。これで父を大人しくさせることができますから」
「そうだなチェルト。ほら父さん、さっさと部屋に戻った戻った」
「……ったく、わかったわかった。だから押すなよマルク」

　マルクが父親の肩を押して、店の奥へと連れて行く。父親は悪態をつきながらも、素直に足を進めていた。

「ありがとうございます、デリハルト様。そうだ、何かお礼をしないと……」
「え、いいですよ。そんなつもりでやったんじゃないし」

　デリハルトが腕を顔の前でぶんぶんと横に振る。彼は怪我をしている人を放っておけなかったのだろう。治せる術を持っているのだからできる限りのことをしたいと思う、とても優しい先輩だから。

「そんなわけには！　治癒術師（ヒーラー）さんに看てもらうことができなかったので、本当に助かりました。ありがとうございます！」

　治癒術は補助や攻撃系の魔術と違い、生まれもっての素質がなければ使うことができない。ガルデア支部の中でも行使できるのは、リンとデリハルト、そしてヴェルザの三人だけだ。リンにおいては軽い怪我程度しか治せないため、実用的ではない。素質があっても魔力の素養に長けていなければ、無用の長物となり得ることもある。
　人を治すことを生業としている医者の中でも、治癒術が使える者は極僅かしかいない。そして数少ない治癒術の使える医者を、人々は治癒術師（ヒーラー）と呼んでいた。

「……？　どうして治癒術師（ヒーラー）にかかれなかったのですか？　骨折は決して軽傷ではないのに」

　小さな村のような街ならともかく、国境付近にある交易が盛んな街には、必ず一人は治癒術師（ヒーラー）が招かれるもの。小さな怪我では看てもらえないこともあるだろうが、骨折はどう考えても重傷である。看てもらえないはずがない。

「それは……仕方がないんですよ。今、治癒術師（ヒーラー）さんは過労で寝込んでしまってるので……」
「え、治癒術師（ヒーラー）が寝込んだ？　この街そんなに怪我人大勢いたの？」

　治癒術師（ヒーラー）が寝込む程の怪我人の存在。リンはチェルトの父親が怪我した理由に核心を得た。

「街で募った魔物退治の勇士達……ですね。戦い慣れていない街の人達では、あの数を一度に相手にするのは難しいでしょう。怪我は必須です」
「あー……それは治癒術師（ヒーラー）も寝込むわけね」

　リン達の場合は、魔物の攻撃を受けてもその場でデリハルトが癒してくれたし、補助術で相手の攻撃を軽減していたことも大きい。
　だが、街の人達にはそれがないのだ。そんな中で我武者羅に戦えば、怪我をしないわけがなく。

「そうなんです。うちの父も魔物退治に名乗りをあげたはいいんですけど……あの有様で。でも、他の人達に比べたら、あれでも軽い方なんですよ」

　骨折を軽傷というのなら、さらに酷い怪我を負った人々は他にも大勢いるのだろう。そちらを優先して治癒していたのなら、命に別状はない骨折は後回しにされても文句はいえない。そして重傷だが命に別状はない者達に癒しの術をかける前に、治癒術師（ヒーラー）に限界が訪れてしまった。

「ですから、何かお礼をさせてくださいデリハルト様。あたしにできることであれば何でもいたしますので、ドーンと！」
「いや……そんなこと言われても……」

　チェルトが張り切った眼差しをキラキラと光らせ、胸を拳で叩きながらデリハルトの眼前に歩み寄って見上げる。彼女は小柄な方ではないが、それでもやはり長身のデリハルトには及ばない。
　そして肝心のデリハルト本人は完全に及び腰だ。マルクも昼間はあんな顔をしながら嬉々として接客を行っていたことを考えると、本当によく似た兄妹である。

「なら、その分宿代まけてもらう、ってのはどう？」

　いい案を思いついたとばかりに、ダニエラが人差し指を立てた。ダニエラの言葉に、チェルトの視線がデリハルトからダニエラへと移る。

「それいいですね！　了解いたしました。治療代分、お値段引かせていただきます」
「どうもすいません……」
「いえ、あたしが言い出したことですもの。あ、そろそろ食事のお時間でしたね。皆様、どうぞお好きなところへおかけください。すぐに夕食をお持ちいたします！」
「わーい、やったぁ！」

　チェルトが急いで厨房へと駆け込んでいく。ダニエラが嬉しそうに、近くの椅子へと颯爽と腰かけた。テーブルに肘をつき、頬を両手で覆いながらフフフンと鼻歌を歌っている。

「楽しそうですね、ダニエラさん」
「そりゃあそうよ。美味しいご飯が待ってるんだから。ウフフフフ、何が出てくるのかしら」
「……」

　ダニエラに続いてリンも椅子に座るが、デリハルトは左手を顎に手をあてて、何か深く考え込んでいる。一向に、座る様子がない。

「ちょっとデリハ、いつまで突っ立ってんのよ！　早く座りなさいよー」
「え？　あ、ごめん」

　ダニエラが唇を尖らせながら言うと、デリハルトは漸く己の思考から我に返ったようで、促されるままに椅子を引いて腰かけた。

「デリハルトさん。何をそんなに深く考え込んでいたのですか？」
「ああ、うん……チェルトさんの話を聞いてたら、他にも重傷を癒してもらってない人達が、たくさんいるんじゃないかなと思って」

　彼の懸念はきっと正しいだろう。腕の骨折すら看てもらえなかった状況に、治癒術師（ヒーラー）が倒れてしまったという事実。ワイドリジョンに魔物の討伐を依頼したのは、そういった背景も一因となっているはずだ。治癒術師（ヒーラー）が動けないのに、これ以上怪我人を増やすわけにはいくまい。

「確かにいるかもねー。デリハ、その人達の怪我治したいの？」
「気持ち的には、ね……」

　多くの怪我人がいるとわかっている状況で、それをどうにかできる術を自身が持っているのなら、動きたいだろう。もしリンが同じ立場なら、同じことを思ったかもしれない。

「でも、あたし達魔物退治に来てるのよ？　どれだけいるかわからない怪我人を治してたら、今度はデリハが倒れちゃうわ。そしたらあたし達の怪我は誰が癒してくれるのよ」
「うん。わかってる。街の人の怪我を治すことにかまけて、魔物退治の方を疎かにするつもりはないよ。……って、頭ではわかってるんだけどな」

　デリハルトは乾いた笑みを浮かべた。頭で理解はしていても、どうにかしたいという気持ちは抑えがきかず、湧いてくるのだろう。

「まあ、デリハらしいっていったら、らしい悩みねぇ。でも、治癒術師（ヒーラー）に看てもらえなくても、医者が何とかしてくれてると思うわよ。治癒術に比べて即効性はないけど」

　治癒術師（ヒーラー）に看てもらえなかった者達は、医者にしっかりと看てもらっただろう。包帯や薬などを受け取り、自然回復力を活かした治療をしているはず。だから先ほどデリハルト

はその場で治すことをせず、人体の持つ回復力を高める魔術を使った。自然治癒で治るのならば、それに越したことはない。

「治癒術に頼らないで治るのならば、その方がいいと思います。使い手の少ない治癒術に依存するようになるのはよくないと、姉さまも言ってました」

　リンの姉であるキキョウも、治癒術の素質があり、生活の糧をその治癒の術で稼いでいた。それ故、妹であるリン以外に無償で治癒術を使うことはなく、どんなに貧しい相手からでも、何かしら報酬を要求していた。理不尽な額を請求するのではなく、経済状況に合わせたものを。時には金銭の変わりに物品を要求したこともある。
　これは、怪我をしてもすぐに治してもらえるからいい、という意識が芽生えないようにするためでもあると、姉は言った。治癒術師（ヒーラー）も小さな怪我だと、治療を拒否することができる。小さな怪我を治すのに追われ、いざ命に関わる大怪我をした患者を診るときに、魔力が足りないでは困るのだ。それに、治すのにお金がかかるのならば、なるべく怪我をしないように注意を払い、不必要に怪我をすることもなくなる。治癒術はあくまで怪我を治す術であり、怪我の頻発を招く術であってはならない。

「それに、治癒術師（ヒーラー）が倒れたのが数日前なら、そろそろ体調が回復する頃だと思いますよ。そうしたらまた、街の人達の治療に取り掛かるのではないでしょうか」

　魔力を使い果たして倒れたのならば、酷使したのは魔力だけではない。いくら手馴れているとはいえ、疲れているときにまで治癒術を行使し続けたならば、精神を蝕み、人体に疲労が蓄積する。回復手段は休むしかなく、完全に体調が戻るまでには最低でも五日以上はかかるだろう。だが、それが数日前のことならば、そろそろ治癒術師（ヒーラー）の体調が元に戻る頃といえる。

「……それもそっか。ありがとう、リン」
「いえ」
「ちょっとー、あたしだって励ましてあげたじゃない。あたしにお礼はないわけぇ？」
「ダニエラも、ありがとう」
「ふっふーん。美少女は心も優しくなくちゃね」

　ダニエラは得意げに胸の前で腕を組む。自分からお礼の言葉を要求したにも関わらず、満足気だ。

「お待たせしましたー。どうぞお召し上がり下さい」

　香ばしい匂いと共に、チェルトが台車に料理を乗せてやってきた。ダニエラは待ってましたとばかりに青銀色の瞳を輝かせる。
　皿の上に敷き詰められた葉の上に、食べ易く切り分けられた肉が幾つも乗っている。野菜のたっぷり入った透明のスープが湯気を立てていた。

「セイボリーピッグの香草焼きと、テーストホーンの角でダシをとったスープです」
「美味しそう……！　いっただきまーす！」

　手を合わせるやいなや、ダニエラは即座にフォークを手に、料理をつつきはじめる。口の中へと運ぶと幸せそうに頬を綻ばせた。

「美味しい……この甘辛いソースが堪らないわ……」
「ウフフ、ありがとうございます」

　ダニエラの食べっぷりに、チェルトが嬉しそうに微笑んでいる。リンも切り分けられた肉を口に運び、口いっぱいに広がる香ばしい味に舌鼓をうった。

「ふう……ごちそうさまでした」

　気づけば皿の上は空になっていた。敷き詰められていた香草もまた、しゃきしゃきとした触感があって美味しかった。空腹も相俟って、あまり食べる方ではないリンの食も進んだのだろう。

「そういえばダニエラ、持って帰ってきたの渡さなくていいの？」
「あ、そうだったわ！　すっかり忘れてた！　チェルトさあああん！」
「はい？」

　厨房で空いた皿の片付けをしていたチェルトが、首を傾げつつも客席の方へとやってくる。ダニエラはテーブルの上に戦利品であるテーストホーンの角を置いた。

「これあげるわ。でもって、また明日も美味しいご飯を作ってちょうだい」
「え、いいんですか？　ありがとうございます。父の怪我を看てもらっただけでなく、テーストホーンの角まで頂いてしまって……」
「チェルトさん。そのことで少し話したいことがあるのですが、いいでしょうか？」
「なんでしょう？」

　リンは今日のできごとを話した。退治した魔物の処分について。今現在街の人々の食料源となっているのなら、街に還元した方がいいということを。

「よろしければチェルトさん達の方から、街の人達にこのことを伝えてもらってもいいでしょうか。僕達が街の人達に声をかけるよりも早く伝わると思いますので」
「そういうことなら喜んでお引き受けいたします。街の人達も喜ぶと思いますよ。食料確保のために、危険を冒す必要がなくなりますから」

　やはりいくら食料が外にたくさんいるといっても、確保するためには危険が伴うだろう。昼間は食料について問題ないと言っていたチェルトだったが、今の言葉を聞いて明らかに安堵の表情を浮かべている。

「お客様、お部屋の準備が整っておりますが、今日はもうお休みになりますか？」

　食事もひと段落終え、そろそろ泊まる部屋へと案内してもらおうと思っていると、タイミングよくマルクが現れた。

「お腹いっぱいになったし、今日はもうお湯に浸かって寝たいわぁ」
「そうだね。案内してもらってもいいかな」
「はい、それではご案内いたします！」

　席を立ち、こちらですと意気揚々と案内するマルクの背を追う。

（……できるだけ、早く元の生活を送れるようにしてあげたいな）

　先を歩くマルクの背を見ながら、親子三人が仲良く話していた姿が脳裏に過ぎる。今までずっと、家族仲良く宿を経営してきたのだろう。外の魔物の数が正常に戻れば、きっとここの宿にも客が戻ってくる。

（明日も、頑張ろう）

　リンは心の中で、拳を握り締めた。

　結界の外でありながら、そこには人が大勢押しかけてきていた。躊躇うことなく結界の外である門を飛び出し、思い思いに物色する。
　門から数メートル先まで、青白い光りが覆うように円を描いていた。その光りの膜が、結界と同じ役割を果たしているために、人々は安心して門の外へと飛び出せる。

（しっかし……いつ見ても嫌な光景だな）

　ラントルは腰に手を当てながら、眼前に広がる夥しい魔物の遺骸を見て嘆息する。魔物の異常繁殖による掃討は何度もこなしているが、それでも地面に広がる魔物の遺体の群れは、見ていて気持ちのいいものではない。例えこの大量の躯が、今この場にいる大勢の人間達の生活の糧となるとしても。

（にしても……今日で三日目か。まだまだ終わる気配ねえな）

　街周辺の異常繁殖した魔物の討伐は、入団したばかりの駆け出しが実力をつけるのに向いている。ある程度慣れた者がいれば立ち回りをカバーできるし、街の近くならばもしも重傷を負っても、すぐに傷を癒すことができるからだ。
　ラントルはちらりと横目で、門の近くで騒いでいる年少の少年達を見る。いや、正確に言うならば騒いでいるのは一人だけだ。同じアズゲリツの支部に所属している、後輩のヴィゲンである。

（なんで同い年でああも違うかねぇ……ヴィゲンも少しはリンみたいに落ち着きがありゃいいとは思ったが……）

　ころころと表情を変えながら五月蝿くしているヴィゲンと会話している間も、彼は特に表情を変えることなく淡々としている。変わるとしても多少相好が崩れる程度で、それも『苦笑』的なもの。表情や感情に乏しいわけではないだろうに、全く子供らしくない少年のことが少し気に掛かった。

「真面目そうな顔してどうしたの？　ヴィゲンが粗相しないか気になってる？」
「ダニエラ」

　今回五人の仲間達の紅一点である彼女が、悪戯っぽい表情を浮かべている。ラントルは、口元を引きつらせながら苦笑した。やはり自分は、ヴィゲンの保護者にしか見えないのだろうか。こちらとて好きでペアを組んだわけではないのに。

「まあそこが気にならねえっつったら嘘にはなるがな。今はヴィゲンのことよりも……リンのことなんだけどよ」
「リン？」

　ダニエラは青銀色の瞳を丸くする。軽く顎の下に手をあて、うーんと唸った。

「あの子がラントルに迷惑かけたとは思えないけど？」
「や、その逆だ。……あいつ、入団したときからああなのか？　ヴィゲンがまだまだガキっぽさが抜けてねえってのもあるが、それを抜きにしても全然子供らしくねえと思ってな」

　ラントルはリンの口から、疲れたとか空腹だとか、面倒くさいなどの弱気なことを一切聞いていない。ヴィゲンはしょっちゅう空腹を訴えてくるのにだ。
　そして名乗ったときに呼び捨てでも構わないと言ったにも関わらず、彼はヴィゲンに対しても敬称を忘れず、常に敬語だ。身長差はあれど、歳は二つしか違わないのだから、そんな少年に礼儀正しくされて少しむず痒い。
　戦闘中も、前に突き進んでいきがちなヴィゲンのフォローをよくしてくれていた。前に出すぎる度に声をかけ、ヴィゲンを後ろへと戻ることを促してくれる。普段それはラントルの役目なのだが、リンがそれをしてくれるおかげで、ラントルは魔物を倒すことに集中できた。そしてヴィゲンだけでなく、ラントルやダニエラの隙をつこうとしてくる魔物の視線を逸らしたり、自分の意見を積極的に言ったり。

「……俺が十六のとき、自分のことで手一杯で、周りを見る余裕なんてなかった。でもあいつは、仲間へのフォローを優先しているような気がする。早熟なのか元々そんな性格なのか……」

　ヴィゲンと比べなくとも、リンは子供らしくない少年と言えるだろう。ヴィゲン以上に小柄な背丈に、少女のような可愛らしい顔立ちをしているのも相俟って、余計にらしくないと感じているのかもしれない。見た目だけなら、十台前半にしか見えない少年だ。

「同じ所属のヴィゲンだけじゃなくて、リンのことも気にかけてるなんて、ラントルってばいい人ねぇ。お人よしって言われない？」
「……ああ、よーく言われるぜ」

　からかい混じりのダニエラの言葉に、ラントルは顔を歪ませた。ダニエラはそれを楽しそうに見つめてくる。見た目は綺麗だが、彼女は人をからかうのが好きらしいと気づいたのが昨日のこと。

「ウフフフフ。リンのことまで心配してくれてありがとうね。確かにあの子、入団したときからあんな感じよ。頼まれごとは率先してやってるし、わがままなんて聞いたことないわ。一つ年下なのに、あたしよりしっかりしてるとも思ってる。でも――」

　ダニエラは不意に言葉を途切り、ニ、と口の端をつり上げた。

「あれでも歳相応なところ、結構あったりするのよ。特にある人の前だと顔真っ赤にして挙動不審になって、見ていて可愛くてとっても面白いの」

　それはつまり、その「ある人」にリンが恋心を抱いているということなのだろう。ラントルは、落ち着いた少年が挙動不審に陥っている姿を想像してみる。

「それは……面白いな」
「ええ、面白いのよ。残念ながら、その人が今いるのガルデアだけど」
「なら見られねえってことか。そりゃ残念」

　冷静な少年は、一体どんな人物に恋をしたというのだろう。非常に気になるが、この場にいないというのなら仕方がない。

（真っ赤になって挙動不審になるって、よっぽどの美人か可愛い系ってことだよな。一度見てみてえな）

　リンの恋路を楽しんでいるダニエラからして、相手はダニエラではないということになる。自分が対象になっているのならば、こうして楽しんでいるはずがない。
　そしてダニエラはどちらかといえば『可愛い』というよりも『綺麗』と評する容姿である。彼女が対象ではないのなら、それ以上の美人かもしくはタイプが違うかのどちらかであろう。

「まあ、とりあえず安心した。あいつもちゃんと子供らしいとこ、あるんだな」
「まあね。とてもからかいがいがある子よ。ウフフ、おかげであたしは毎日が楽しいわ」
「……手加減はしてやれよ？」

　ダニエラにからかい倒される様を想像し、流石に少し可哀そうになる。リンの性格からして、色恋沙汰は得意ではなく、むしろ苦手な方だろう。できれば初心な少年の恋路は、温かく見守ってやりたい。

「てーか、俺と話してていいのか？　デリハルトのヤツが複雑そうな表情でこっち見てっけど」
「え、ほんと？」

　先ほどから感じていた一つの視線。その先にいるのは門を背にして座り込んでいるデリハルト。『障壁の結界（ブロックシルト）』を使った反動のため、ああして一人休息をとっている。
　その視線はダニエラがラントルに話しかけてきた辺りから感じていた。今はこちらを向いてはいないが、十中八九デリハルトだと断言してしまってもいいだろう。彼は間違いなくダニエラに恋情を抱いている。自己紹介の際にダニエラの手をとったとき、焦燥交じりの瞳でこちらを見ていたのが記憶に新しい。

「労いの言葉でもかけてやったらいいんじゃねえか？」
「そうね、そうするわ。本当にラントルってばいい人ね」

　クスクスと可愛らしく笑いながら、ダニエラは最後に余計な一言をつける。思わず苦虫を噛み潰したような顔になってしまったのは、自覚があるからだろう。彼女は手を振ってデリハルトの所へ駆けていった。

（はあ……この世話焼きな性格、どうにかならねえもんかね）

　いいなと思った相手でも、想い人が他にいた場合そちらを応援したくなってしまう。そんな性格故に、ラントルに恋人が出来たことは一度もなかった。いつもいつも『いい人』で終わってしまっている。

「おーい、ラントルー！」
（でもって、怪力だけが自慢の問題児の世話も押し付けられちまったしな……）

　リンと話していたヴィゲンが、大きく手を振りながらラントルの元へとやってくる。子供らしさが抜けない故か、素直で無邪気なところは可愛い弟分だと思えなくもない。が、それもいきすぎれば、ただの落ち着きのない無神経な子供。気は乗らないが面倒を任されたのだから、きちんと躾なければならないだろう。

「どうした、ヴィゲン」
「なあ、ラントルは今日テーストホーンの角、とったか？」
「角？　いいや。街に還元するのが先だろ。俺らの取り分は後回しだ。まだまだ魔物は残ってるしな」

　テーストホーンの角は、様々な街で高く売れるだろう。だが、テーストホーンはまだまだ外に大量にいるのだ。今から欲を張る必要はない。大分数が減ってきた頃合に幾つか採取できれば充分だ。持ち帰るにしても限度がある。

「なんだー、それじゃあラントルも持ってねーのかぁ」
「んだよ。誰か欲しがってたのか？」
「宿屋のおっちゃんがなー。昨日はとれなかったけど、今日はとれるって思ってたみたいでさ。でも今日もまたとれなくてがっかりしてんだ。角は調味料としてちょーほーしてるから、あればあるほどいいんだってよ」
「なるほどな……」

　今この場には、多くの人々が押し寄せてきている。が、それでも街に住んでいる人全員ではない。街中全ての人々に還元するには、まだまだ足りないだろう。昨日も、残ったのは使われないところのみだ。

「まあ世話になってる宿だし、明日はおっちゃんの分だけ先にとらせてもらうか」
「おう！　そうしようぜ！」

　ニカリと屈託なく笑うヴィゲンの頭に、のそっと肘を置いた。頭一つ分ほど離れた身長差のおかげで、ヴィゲンの頭は肘を乗せるのにちょうどいい位置にある。

「おも！　ラントル重いぞ！　縮むじゃねえか！」
「大丈夫だろ、縮むほどねえんだから」
「言ったなこのやろう！　いつか絶対ラントルよりでっかくなってやるんだからな！」
「おー、一体何年先のことだろうなぁ」

　頭の上に乗せた肘に体重をかけると、威勢よくヴィゲンが吼える。歳よりも幼い反応ではあるが、そこに妙に安心している自分がいた。やはり背が低いせいで実年齢よりも下に見てしまっているせいかもしれない。行儀よく躾けたいとは思うが、子供らしさを失わせたいわけではないのだ。

「ま、今日の分の仕事も終いだ。また明日もきばってこうぜ」

　頭に乗せていた肘をどかし、ヴィゲンの眼前に握った拳をつきつける。

「おうよ！」

　ヴィゲンも同じく拳を握り、こつんとラントルの拳に合わせる。身長差はあれど、拳の大きさに然程の差異はない。きっといつかヴィゲンも大きく成長するだろう。調子に乗るだろうから絶対口にはしないが。

（でかい図体に中身が伴うようにしてやらねえとな）

心の中で静かに誓ったラントルは、その掌をヴィゲンの頭に乗せ、ぐりぐりと力を込めた。

「うーん、いい天気ぃ」

　ダニエラは両腕を頭上へぐっと伸ばし、大きく広げながら腰の位置へと戻す。

「休みにした日がこんなに晴れるなんて、運がよかったなぁ」
「そうねぇ」

　隣にいるデリハルトが、しみじみと呟いた。ダニエラもそれに同意する。
　今日は連日戦ってばかりだった自分達に儲けた、休みの日。到着したその日から魔物と戦ってばかりでは、気力は減る一方になってしまう。適度に休むことも大事だとダニエラが提案し、仲間全員の同意を得た。
　毎日必死に数を減らしたおかげか、街の周辺に魔物がうろつくことはなくなった。まだ完全に元通りとはいえないが、来たときのように広範囲に密集しているという事態もなくなっている。一段落はついたといってもいいだろう。それ故今日休むことに異を唱えるものはいなかった。生真面目なリンでさえも納得している。

「後は平原や森の中にある魔物の巣を潰すだけね。ざっと二、三日ってところかしら？」
「長く見積もっても、四日もあれば終わると思う。長かったなぁ……」

　レンゲーに到着してから、既に一週間が経過していた。人数にもよるが、大体魔物の異常繁殖の討伐にかかる日数は三日か四日だ。一週間以上もかかることはあまりない。それだけレンゲー周辺の魔物の増え方は尋常ではなかったが、それも漸く終わりが見えようとしている。

「それにしても、リンはヴィゲン達とどこへ行ったのかしら？　朝早くから宿にやってきて連れてかれて行ったけど」

　レンゲーの街並みを歩く二人の傍に、リンの姿はない。前日にヴィゲンの方から遊ぶ約束をしたらしく、寝ぼけ眼を擦るリンの腕を掴み、どこかへと行ってしまった。保護者としてラントルも傍についているし、二人共自衛できる強さはあるため心配は微塵もしてはいないのだが。

「あーつまんない。せっかくシグさんのことでからかってあげようと思ってたのに」
「……それを察してたから、リンも文句を言わずにヴィゲンについていったのかもね」

　彼女は普段落ち着き払っているが、想い人であるシグルドの話題を出すと態度が急変する。少年みたいな女の子が、その時ばかりは可愛い女の子に変わるのだ。色恋に初心な後輩の姿はとて

も可愛くて面白く、何度見ても見飽きることがない。

「弄るのも程ほどにしないと、嫌われても知らないぞ？」
「だぁいじょうぶよー。リンはそう簡単に人を嫌ったりしない子だから」

　リンが嫌うのは、人を簡単に傷つけるような悪人に限られる。多少の苦手意識は持たれるかもしれないが、嫌われることはないだろう。それにダニエラとてからかっているだけではない。初心なせいで恋路に消極的なリンのために、具体的なアピール方法を提示したりもしているのだ。
　レンゲーへの道中、リンにダニエラの服を勧めてみたのもその一つ。リンはいつも動き易さを重視した男物の服しか着ていない。せっかく可愛い顔をしているのだから、女らしい服を着ればいいのにとダニエラは常々思っているのだ。そして胸にサラシを巻いているのも勿体無い。スタイルの良さは、女の武器である。いくら鈍感で脳筋といえども、シグルドも男なのだ。小さいよりも大きい方がいいと思っていても不思議ではない。

「一番の問題は、シグさんがリンのことどう思ってるかよねぇ」
「可愛がってる……のは確かだと思うけど」
「それが女の子として可愛いからなのか、妹みたいだからなのかがわからないのよねぇ」

　シグルドはよくリンの頭を撫でたり、何かと気にかけたりしているが、それがどこからくる感情なのかが全く読めないでいた。色恋に鈍感なせいか、リンに触れるときなど下心が一切見えず、かといって何とも思っていないのなら、気にかけたりはしない。少なくとも、ダニエラはシグルドの方から触れられたことは一度もないし、顔を合わせる度に気にかけているような言葉をもらったこともなかった。

「デリハもわからないの？　同じ男でしょ？」
「俺はシグルドさんじゃないし、そんなのシグルドさんしかわからないだろ」
「それはそうだけど、こう、男としての感的なもの、感じない？」
「俺にそんなもの求めないでくれよ……ロードさんじゃあるまいし」

　デリハルトは口元を歪めながら嘆息した。確かにデリハルトもあまり色恋に得意とはいえないのだから、そんな期待を向けるのは酷か。

「うーん、帰ったらロードさんに聞いて……あ」
「どうかした？」
「あそこ。チェルトさんがいるわ」

　現在ダニエラ達の進路方向から、見慣れた女性が歩いてくるのが見える。ただそれだけならば

、軽く挨拶をしてすれ違えばよかった。だが彼女の手には、無視することができない物々しいものが握られている。

「チェルトさーん」
「あら、ダニエラ様。デリハルト様も」

　声をかけながら傍に寄ると、彼女はにっこりと笑みをみせてくれる。そのせいで余計に手に持っているものが場違いに見えた。

「ねえ、その長剣どうしたの？　っていうか、そんな物騒なもの持ってどこ行くの？」

　チェルトが持っているのは、ずしりと重そうな長剣だった。古びた雰囲気を持つ鞘からして、新たに買ったものではないだろう。それに、チェルトは料理人だ。剣の心得があるとは思えない。

「先ほど医者から、父の骨折が完治したとのお墨付きをもらったので、その快気祝いに好物のハーブを使った料理を作ろうと思いまして。今から採取しに行くんです」
「ああ、そういえばあれから一週間経ったもんね」

　デリハルトが骨折部位の自然治癒力を高めたため、通常ならもう二週間ほど安静が必要なところ、一週間で完治したらしい。デリハルトの宣言通りだ。

「治ったんですね、よかった……って、まさかチェルトさん、一人で外に行くつもりですか!?」
「え、そうですけど……？」

　チェルトの父の怪我の完治を聞き、デリハルトは胸を撫で下ろしたが、彼女の言葉から聞き捨てならない単語を思いだして目を剥いた。そしてそれを当然のように受け答えするチェルトに、ダニエラも流石に心配になる。

「チェルトさん、外に行くのはまだ危ないわよ。大分数は減らしたけど、まだ巣を潰してないから、街から離れれば魔物に囲まれてしまうわ」
「ダニエラの言うとおりです。外は危険ですよ」
「危険は承知してたんですけど……魔物と出会ったら剣を振り回せば大丈夫かなと」
「無謀すぎますよチェルトさん……」

　一応彼女なりに、魔物と遭遇したときのことを考えていたらしいが、両腕で抱えるように長剣を持つ姿からして、剣に慣れているとは到底思えない。レンゲー周辺の魔物はそれほど強いわけ

ではないが、剣を振り回すだけで逃げる程弱くもないのだ。そんな魔物に囲まれてしまったら、きっと骨折では済まない事態となってしまう。

「野菜とかは畑で育ててるって言ってたけど、そのハーブは育ててないの？」
「ええ……平原にたくさん群生しているので、わざわざ畑で育てる必要がなくて……」

　魔物が異常繁殖する前ならば、一人で街の外に出たとしても魔物と遭遇することなく簡単に採取できたという。こんな事態にさえならなければ、確かに畑で育てる必要はない。

「……そのハーブって、平原にたくさん生えているのね？」
「ええ、そうです」
「なら、あたしが変わりに採ってきてあげるわ！　あたしなら魔物に対抗できるし、それほど街から離れないなら一人でも大丈夫よ！」

　戦う力のないチェルトが外に行くから危険なのであって、戦闘能力のあるダニエラならば、それほど危険なことではない。平原にたくさん生えているというのであれば、特に労することなく戻ってこられるだろう。

「ダ、ダニエラ!?」
「お気持ちは嬉しいですが、父の怪我を治していただいたのに、そこまでしてもらうのは……」
「あたしが好きで行きたいだけだから気にしないで！　それに、あたしもその料理食べてみたいし！」
「それが本音か……」

　デリハルトががくりと肩を落とす。美味しい食事は毎日を楽しく生きるのに必要なものだ。そのためとならば多少の危険など、どうということはない。

「そのハーブの特徴教えてよ。あたしがとってくるから」
「あ、ありがとうございます……。えっと小さな白い花びらと長い茎が特徴で……」
「ふむふむ」

　それだけ聞けば情報としては十分だ。きっとすぐに見つかるだろう。

「ーー待ってくれダニエラ。やっぱり駄目だ。危険すぎる」
「えー？　ちょっと街の外行くだけじゃない。大袈裟ねぇデリハったら」

「大袈裟な問題じゃないよ。考えてもみてくれよ、数日前まで街の周辺にまで魔物がうろついて

いたんだ。魔物は雑食だから、食べられそうなものは何でも食べてしまう。――人が食用として使っていたハーブなんて、いい餌だ。既に食い尽くされているかもしれない」
「あ……その考えはなかったです……」
「むう……」

　デリハルトの言うとおり、あれだけ魔物が闊歩していたのなら、周辺の草花は魔物の食料として喰われているだろう。実際、平原に花が咲いている様子はなかったように思う。魔物と戦うのに集中していたため、じっくり見たわけではないが。

「だから外に出ても見つからない可能性は高いよ。――君のことだから、見つからなければどんどん街から離れたところまで探しに行くだろう？」
「……さーすがデリハ。お見通しじゃないの」

　入団してからというもの、ダニエラは主にデリハルトと組んで依頼をこなしてきた。そんなデリハルトには、ダニエラの思考回路や行動パターンが読めているのだろう。

「申し訳ないですがチェルトさん、そのハーブは採取できない可能性の方が圧倒的に高いです」
「そう……ですね。今も生えているかわからないものを、危険を冒してまで取りに行っていただくわけにもいきませんし」
「えー！　やめちゃうの？」

　レンゲー滞在中、ずっとチェルトの作った料理を食べていたが、どれも絶品だった。そのハーブを使った料理も、とても美味しいに決まっている。それを逃すなんてことがあっていいのか。いやない、

「やっぱりあたし行くわ！　美味しいご飯のためだもの、それに比べたら少しばかりの危険なんて！」
「え!?」
「俺の話聞いてた!?　ハーブが生えてる可能性は低いって……！」
「ゼロじゃないでしょ？　探せばきっと、どこかにまだ生えてるはずよ！」
「生えてなかったらどうするんだよ!?」
「そんなの、探してもいないのにわからないじゃない。憶測で勝手に決め付けて判断するのはよくないわよ、デリハ」

　もしかしたら、案外すんなり見つかるという可能性だってあるのだ。それなのに最初から見つからないと決め付けて諦めるなんて勿体無い。探してからでも決して遅くはないだろう。

「ーー駄目だ、ダニエラ。探索中に魔物に囲まれたら、君だって危険なんだ」
「そうですよダニエラ様！　あたしの私用で、大事なお客様に怪我をさせてしまうわけには……！」
「ちゃあんと周りを確認するから大丈夫よぉ。囲まれる前に逃げるし」

　以前のように、見渡すところ一杯に魔物がうろついてはいない。少なくとも、街周辺では見かけなくなった。連日同族が倒され続ければ、それほど知能が高くはない魔物とて警戒するのは当然といえる。いくらダニエラ一人とはいえども、多くの同族を屠った人間であると認識されているだろうし、それほど近寄ってはこないだろう。それに、素早さには自信がある。いざというときは全速力で逃げるだけだ。

「ちゃんと周りを確認するって、君は一つのことに集中したら、他のことが見えなくなるくせに何を言っているんだ。探すのに夢中で気づいたら囲まれてるじゃ遅いんだぞ！」
「なによ！　あたしだって周りくらいちゃんと見てますぅー」
「いーや見てない！　少なくとも俺と組んだときはまっすぐ前しか見てないじゃないか！　危険の察知は全部俺に任せてるだろう！」

　断言されて、ダニエラは眉根を寄せる。
　術師であるが故に接近戦が不得手なデリハルトは、魔物の気配に敏感で周りをよく見ている。だから二人でいるときは、デリハルトに魔物の接近の察知を任せきっているのだ。
　しかしデリハルトと組んで依頼をこなすことが多いダニエラだが、一人で依頼を受けたことがないわけではない。その際の街から街への移動は、しっかりと細心の注意を払っている。己の身を守れるのは己だけであり、助けてくれる人などいないのだから。ダニエラは周囲を見ることができないのではない、デリハルトといるときはしていないだけだ。

「それがデリハの役目だからでしょ！　二人のときはそうでも、一人のときはしっかり見てるわよ！」

　口から飛び出た言葉は、詰るような声音だった。普段のダニエラならば、ケラケラと笑いながら、からかうような口調で言っただろうに。何故かこのときは、一方的に叱ってくるデリハルトに対し、不満が沸々と湧き上がってくる。

（何よ、デリハのくせにデリハのくせに！）

　それは恐らく、最近のデリハルトに不審な行動が多かったからだろう。何か考え事をしているかのように黙っていたり、どこか様子がおかしかったり。何か悩みがあるなら相談すればいいものを。そして未だに、そのことについてダニエラに相談してくるような素振りはなく。

（ペアのあたしにも話せない悩み事って何なのよバカデリハ！）

　ダニエラがワイドリジョンに入団してから、大半の仕事をデリハルトと二人でこなしてきた。月日からすると一年ほど経ったくらいだろうか。あまり長いとは言えないつきあいだが、短くも無い。デリハルトがダニエラの行動パターンを把握しているように、ダニエラだってデリハルトのことをよく知っている。

「――だけど、万が一ということもあるだろ！」

　よく知っているはずなのに、今はデリハルトのことがよくわからない。いつもなら、ダニエラの無茶な提案も、苦笑しつつも仕方がないなと、ある程度は認めてくれるのに。断固としてそれを許す姿勢のないデリハルトに、思わず拳を握り締めた。

「危険だとわかりきってることを、わざわざ率先してしないでくれ！　君も少しはリンを見習って考えることを――」
「――どうせあたしは、あの子みたいにしっかりしてないわよ！」

　ダニエラよりも一つ年下の、でもあまり子供らしくない性格の少女。リンとダニエラ、どちらがしっかりしているか問われたら、大体がリンだと答えるだろう。ダニエラ自身もリンの方だと即答できる。
　だからデリハルトも呆れているのだろうか。ろくに考えもせず、向こう見ずなことばかりしていると。

「危険なんてギルドの仕事にはつきものじゃない！　確かにリンに比べたら考えが甘いとこあるかもしれないけど、自信があるからこそ、そう言ってるの！　見くびらないで！」
「俺はダニエラのことを見くびってるわけじゃない！」
「じゃあなんっでそんなに危険だ危険だ言ってんのよ！　あたしがあっさり魔物に囲まれるようなヘマやらかすと思ってるからでしょうが！」
「違う！」

　売り言葉に買い言葉。おろおろとするチェルトを後目に、ダニエラとデリハルトは街中だというのにも関わらず声を張り上げる。

「俺はただ、ダニエラが――」
「あー、もういいわよ！　あたしはデリハが何と言おうと、行くったら行くんだからね！」
「ダニエラ！　待て！」

　デリハルトの静止を聞くことなく、ダニエラは走り去る。距離をとった後、一度だけ振り向き、べーとデリハルトに向けて舌を出した。

（絶対ハーブを見つけて、ぎゃふんと言わせるんだから……！）

　振り下ろされる刃をステップを踏むように横へ動いて避ける。ブンという空振りする音が、耳元に響いた。宙を裂くしかなくなった剣先は、勢いのついたまま地面を虚しく叩く。
　隙だらけとなった剣の持ち主の懐へすぐさま飛び込み、己の剣を抜いて喉下へと突きつけた。

「僕の勝ちです」
「くっそおおおお……また負けた！」

　リンは剣を鞘へと戻すと、両手足を投げながらどすんとその場に座り込んだヴィゲンに視線を移す。

「やはりまだ無駄な動きが多いですね。普通の魔物ならともかく、素早い相手に攻撃を当てるには振りが大き過ぎます。背後から不意をつくならまだしも、前方からそれでは僕でなくても簡単に避けられてしまいますよ」
「うぐぐぐ……」

　ヴィゲンは口を窄めると、膝を抱えながらごろんと地面に背中を預けた。そしてリンとは反対の方向を向いてしまう。

「助言してもらってんだ、拗ねんなよヴィゲン」
「拗ねてねーし！」
「あはは……」

　どう見ても拗ねているとしか思えないヴィゲンに、ラントルが茶々をいれた。リンは苦笑するしかない。

　ここは街中にある広場だ。木で出来た二人から三人が座れそうなベンチが置かれ、綺麗に整えられた木や季節の花が植えられている。
　昨日ヴィゲンに手合わせを願われ、断る理由もなく了承し、今に至る。まさか早朝から連れ出され、延々と手合わせをさせられるとは思わなかったが。

（うーん……彼に剣は合わないな、やっぱり）

　ヴィゲンの動きの一つ一つが大降りで、隙が多い。その分当たれば相当なダメージになるだろうが、どんなに威力があろうとも、当たらなければ意味がない。それ以前に、そんな使い方では『剣』である意味もない。

「ヴィゲンさん、得物をハンマーのような槌系のものに変えたらいかがです？」

　斬るのではなく、叩く使い方をするなら、剣ではなく槌の方が合っている。素早い相手には当たり難くとも、魔物にならば大きなダメージとなるだろう。傭兵が戦う相手は人よりも魔物が主なのだから問題ない。

「あー……それな。俺らも言ったことあるんだけどな……」
「ぜってー嫌だ！　槌なんてかっこ悪いじゃねえか！　剣の方が断然かっこいい！」

　ヴィゲンががばりと起き上がり、くわっと目と口を大きく開く。ラントルが大仰に溜め息をついた。

「こんな調子だ。槌はかっこ悪いから嫌なんだと」
「なるほど……」

　武器を持った際の見た目を大変気にしているというのならば、こちらから五月蝿く言ったところで、聞き入れてはくれないだろう。見た目にあまり頓着のないリンにはよくわからない心理だ。

「どうしても剣がいいとおっしゃるのであれば、戦い方を変えた方がいいと思いますよ。刃の所を活かしてこそ剣です」
「うー……だからリンと手合わせしたいっつったんじゃんか。ラントルは剣じゃねえし」
「槍で悪かったな」

　ヴィゲンも、己の戦い方が剣に合っていないことを自覚しているらしい。リンは座り込んでいるヴィゲンの横へ行き、同じようにしゃがみ込む。

「構えはいいんですけど、戦っている最中に剣の平らな部分を下に向けてしまうのがよくないかと。頭の中でそれを意識するだけでも大分違うと思います」
「意識……意識なぁ……」

　口元を歪めながら、ヴィゲンがげんなりとした顔をする。考えて動くことはどうやら苦手らしい。だからこそ、リンは武器を槌に変えることを薦めたのだ。その方が手っ取り早く己の力量を上げることができるだろう。

「槌が嫌なら考えることを、考えることが嫌なら槌を薦めます。選ぶのはヴィゲンさんです」

「うぐぐ……」

　まるで究極の選択を迫られているかのように、ヴィゲンが呻いた。そして再びバタリと地面に倒れてしまう。

「……意外と容赦ねぇな、リン」
「え？」
「いやなんでも。おうヴィゲン、寝てないで起きろ。そろそろ飯の時間だ」

　リンは立ち上がり、空を仰ぎ見る。既に日は高いところへと昇り、さんさんと日差しを注いでいる。雲はほとんどなく、日差しを遮ることはない。早朝からずっと手合わせしてきたせいで、時間の感覚をすっかり忘れてしまっていた。もうそんな時間だったのだ。

「メシ！」

　がばりとヴィゲンが勢いよく起き上がった。しょぼんとしていた表情はそこになく、青く丸い瞳を爛々と輝かせている。

　三人は広場を後にし、昼食を摂るための食堂を探すことにした。街中は来たばかりのときよりも、確実に人の波が増えている。大半を減らすことに成功しているため、漸くディーラーも来られなくはない程までになったのだろう。
　しかしまだ完全には終わっていない。レンゲー周辺では姿が見えなくなっても、森の中にはまだ巣が残っているだろうから。それを潰さなければまた幾らでも増えてしまう可能性は残されており、安心はできない。

「あ、あれ旨そう！　あれにしようぜ！」
「お？　っておいこら待て！」

　ヴィゲンが一人走った先にあるのは、食べ物を販売している屋台だった。薄皮の生地の上に食べ易く千切られた野菜と、香ばしく焼かれた肉を乗せて包みこんだもの。ヴィゲンは早速自分の分を屋台の主に注文しており、完成するのを今か今かと待ちわびている。

「ったくあいつは……」
「僕もあれでいいですよ。特にこれがいいとかはありませんので」

　ヴィゲンが頼んだ品が出来あがると、入れ替わるようにリンとラントルがそれぞれ注文する。料金を払おうと財布を出そうとしたところ、ラントルが先にリンの前に出た。

「ほいよ二人分」
「ラントルさん⁉　自分の分くらい自分で……！」
「こいつに付き合ってくれた礼だよ。素直に甘えとけ」

　ポンと頭を撫でられ、会計を先に済まされてしまう。リンは目を瞑って大きく深呼吸したのち、ラントルを見上げた。

「……ありがとうございます」
「おう」

　向けた笑顔はぎこちなくなかっただろうか。リンの分の支払いまでしてくれたことに引け目は感じても、厚意を無駄にすることはしたくない。

「あ、リンだけずりい！　ラントル、俺も俺も！」
「お前の面倒を見てくれた駄賃みたいなもんだ。もっと食いたきゃ自分で払え」

　あっという間に全て平らげてしまったヴィゲンがラントルに強請るが、ラントルは冷静に切り捨てる。ガーンとショックを受けているヴィゲンを後目に、出来上がったものをラントルから受け取った。ピリリとした香辛料と、触感のいい野菜と生地の相性がよく美味しい。香ばしい肉も、いいアクセントになっている。

「リンだけ、ずるい……ずるい……」

　しかしヴィゲンが羨望の眼差しを一心に向けるため、居心地は悪かった。そんなヴィゲンを見てラントルは一つ嘆息すると、器用に片手で財布からコインを取り出し、ヴィゲンの前につきつけた。

「わかったからこれで買え。これ以上はださねえからな」
「！　サンキュ！」

　パアアとわかりやすくヴィゲンの機嫌が急上昇した。嬉々として屋台へ駆けていく。

「悪かったな、うちのガキが」
「い、いえ……こちらこそご馳走になってしまって……」
「それは気にすんな。俺が勝手にしたことだからな」
「はい……ありがとうございます」

　再びラントルに礼を言ってから、リンは食事を再開した。生地は薄くとも、野菜や肉が意外とぎっしり詰まっているため、一つだけでも相当な量がある。

「はあー！　食った食った！」

　ヴィゲンがペロリと満足げに二つ目を完食する頃には、リンとラントルも食べ終わっていた。生地を包んでいた袋を備え付けのゴミ箱に捨て、広場へと戻るために来た道を歩む。

「よーっし、広場についたらまた勝ーーあ」
「お？　どうした？」
「あそこ、多分デリハルトだ」

　不意に言葉を途切らせたヴィゲンが指差す方向を見遣ると、確かにそこにデリハルトがいた。膝に手を置きながら身体を屈めている姿は、まるで走ったせいで疲れているかのよう。それに近くにダニエラの姿が見えないことも気になった。彼らは何もなくても行動を共にすることが多いというのに。一体彼はそこで何をしているのか。

「デリハルトさん！」
「ーーリン、それにラントルとヴィゲンも……」

　デリハルトの元へと駆け寄り、彼の背中を軽くさする。

「ダニエラが……ダニエラが外へ行ったっきり帰ってこないんだ」
「え……？」
「おいおい……一人で外に行ったってのか？　一体何しに行ったんだよ」
「実は……」

　デリハルトはこれまでのことを説明してくれた。チェルトの父が好物だというハーブを採りに行くのを買って出て、危険だからと止めるデリハルトを振り切り、どこかへと行ってしまったと。

「見失った後も、街中を探したんだけどいなくて……一度宿に戻ってみたけど、まだ帰っていないんだ」

　つまり、外に出てから未だに戻っていないということになる。長い時間、一人で外にいるのは危険極まりない。

「きっと、そのハーブが見つからなくて探しているのでしょうね……」
「デリハルトの言った様子だと、見つけるまで意地でも戻ってこねえんじゃねえか……？」
「ダニエラさんはサッパリとした気性の持ち主なのに……珍しいな」

　ダニエラと出合ってから長い月日を共にしたわけではないが、人となりを知る時間はある。彼女は嫌なことがあっても、相手に非がなかったり反省していたりするならば、引きずることなくあっけらかんとしているような女性だ。デリハルトとの口論も珍しいことではなく、それも少し経てば何事もなかったかのようにあっさりとしている。そんなダニエラが、意地を張ってまで危険を冒そうとしているなんて。

「もう昼の時間なのに帰っていないなんて……心配ですね」
「……！　そうだ……それを言えばよかったんだ……」
「デ、デリハルトさん!?」
「おっと」

　ボソリと呟いたデリハルトは、額に手を当てながら力なく項垂れる。ふらりと身体が傾き、倒れそうになったところをラントルが支えた。ふらふらと覚束ない身体を、ゆっくりと据わらせる。

「ごめん。ありがとう」
「気にすんな。走り回って疲れてんだろ？」

　デリハルトは顔を上げるが、歪んだ口元は穏やかな表情からかけ離れている。疲れとダニエラの安否が気になって仕方がないのだろう。

「危険だからじゃなくて……ダニエラのことが心配だからって言っていたら、彼女は考え直してくれたかな……？」
「デリハルトさん……」

　二人の間でどのようなことがあったかまではわからない。しかし今は後悔しているときではないはずだ。

「なあ、オレ達もダニエラを探しに行った方がいいんじゃねーか？　あの姉ちゃんもなかなかつええけど、一人だけだとやっぱ危ないだろ？」
「だな、ヴィゲン。デリハルト、俺達もダニエラを探すのに協力するぜ」
「……ありがとう」

　デリハルトは徐に立ち上がる。まだ少しふらふらしているが、大丈夫だろうか。

「ダニエラは多分まだ外にいる。早く……見つけないと……」
「そうですね……でも、どこから外へと行ってしまったのでしょうか……」

　レンゲーには、外へと続いている門が四つある。一つはリン達がやってきた、チェスタジア方面に繋がる東側。一つはネフニーへと続いている北側。一つはオリフィール王都であるセルシーに繋がっている西側。そしてもう一つ別の街に繋がっている南側だ。出口を見誤れば、大きなタイムロスとなるだろう。

「デリハルトさん、ダニエラさんが走って行った方角は？」
「えっと……確か西側に向かっていったと思う。チェルトさんと会ったのも、西の門の近くだったし」
「ならそこだな。ああ見えて結構単純な性格してるし、一番近いところから外に行ったと考えていいだろ」
「よっしゃ、西だな！」

　可能性として一番高いのは西だろう。違う可能性もゼロではないが、ここで迷ったところで意味はない。

「俺も……俺も連れて行ってほしい」

　デリハルトがまだ疲れが見える顔で、しかし強い意志の宿った瞳でラントルを見据える。普通に考えたら、今まで走り回って体力が消耗しているデリハルトを連れていくのは大変なことだ。そしてそれを決めるのは、この場で最年長であるラントルになる。

「足手纏いになるのはわかってる……だけど、ダニエラが心配なんだ」

　デリハルトはダニエラとよくペアを組んで依頼を受けていたと聞いている。だからこそ、相棒的な間柄にある彼女のことを、心から心配しているのだろう。リンはちらりとラントルを仰ぎ見た。

「ついて来たきゃついてくればいいさ。でも、ダニエラを探すのが最優先だ。お前のペースに合わせることはできねえぞ？　ついてこられなかったら置いていく」
「それでいいよ。――ありがとう」

　リンはほっと胸を撫で下ろした。デリハルトに向かって微笑むと、彼もまた穏やかに笑ってくれた。漸くいつものデリハルトを見られた気がする。

「よーし、決まりだな！　行こうぜ西門！」

　ヴィゲンが拳を頭上に突き上げ、足早に西へと駆けて行く。リンもまた彼に続き、高い日差しが注ぐレンゲーの街を駆け抜けた。

　どさりと倒れるダイエタリーホースが完全に絶命しているのを確認し、ふうと息を吐く。すぐさま周囲を警戒し、他に魔物がいないか見渡した。

「あーもう。……ほんとにどこにも咲いてないし、ハーブ……！」

　双つの剣を鞘へと収め、ダニエラはぶつくさと愚痴を零しながらその場を離れた。足元を注意深く伺いながら移動するが、チェルトの言っていた白い花のついた長い茎の植物は全く見当たらない。

「デリハの言った通りだったのが腹立つー……」

　街を飛び出したときはまだそこまで日が高くはなかったのにも関わらず、既に太陽は真上に移動していた。数時間が経過してしまったことを意味している。

「んもー……お腹は減ったしハーブは見つからないし！　さいっあく！」

　鬱憤を晴らすかのように叫ぶと、近くに止まっていた小さな昆虫型の魔物が、慌てふためきながら薄羽を広げて飛んでいく。鬱屈をぶつけられそうな魔物の姿もなく、ダニエラは行き場のない思いを地面を蹴り飛ばすことで晴らした。それでも気分はスッキリしない。

「……森の方まで行けばあるかしら……？」

　しかしそこは多くの魔物の棲みかとなっているだろう。ダニエラ達が数日がかりで魔物を狩ったおかげで、街周辺は平穏を取り戻したが、森の中には警戒して出てこない魔物がたくさんいる。つまり、魔物の巣窟だ。

「危なくなったら逃げればいいんだし……行きますか！」

　もしも魔物に集団で襲い掛かられたとしても、きちんと逃げられる方向を確認さえしておけば逃げることができる。ようは囲まれなければいいのだ。
　一度決めてしまえば行動に移すのは早かった。軽快な足取りでセルシー方面に続いている森へと向かう。

「魔物は……出てこないっと」

　太陽の光りを吸収せんとばかりに上に上にと葉を広げている樹木の下は、真昼だというのに薄暗かった。

「ハーブ……ハーブはっと……お？」

　少し奥へと行ったところに、小さな白い花弁のついた植物がある。走りよって間近で凝視し、それが長い茎をもっていることを確認した。

「あった……見つけたわ！」

　ダニエラは嬉々として根元の方からハーブを手折り、腰に巻きつけているベルト状のポーチの中へとそっとしまった。

「一輪だけ……じゃ足りないわよねぇ。他にはないのかしら」

　一度にどれくらいの量を使うかはわからないが、たった一輪では足りないことくらいわかる。少なくとも、後もう二、三輪はほしいところだ。

「ここに咲いてたんだもの、他のところにもあるわよね。よーっし……！」

　漸く上がった成果に気分が上昇したダニエラは、木々が生い茂る森深くまで足を伸ばす。周囲の警戒とともに、ハーブが咲いてないか見落とさないよう注意深く進む。

「むむう……全然見当たらない」

　しかし奥へ行けども行けども、目当てのハーブがないどころか、足元の草花すらまばらに咲いている程度だった。デリハルトの言うとおり、異常繁殖した魔物たちにあらかた食べられてしまったのだろう。上がった士気がみるみるうちに萎んでいく。

「……一輪見つかったんだし、面目は立つわよね」

　勝手に飛び出した手前、見つけなければ戻る気にはなれなかったが、たった一輪であれど見つかったのだ。充分デリハルトに見せ付けられる成果といえる。

「うん、ないかもしれないって言ってたんだから、一輪見つかっただけでも充分よね。お腹も空いたし、戻るとしますか」

　ダニエラはくるりと踵を返した。できるだけ早く戻った方がいいだろう。きっとチェルトは一人で外へと行ったダニエラを心配してくれている。

（デリハはともかく、チェルトさんに心配かけちゃうのはよくないわよね）

　少し足早になっているのを意識しながら、ダニエラは来た道を戻り始めた。鬱蒼とした森の中に確固たる道などあってないようなものだが、まっすぐ進んできたのだから同じように真っ直ぐ進めば戻れるだろう。
　後少しで平原へと出られるというときだった、ザッザッと音が聞こえたのは。

「！」

　ダニエラはすぐさま双剣を抜き放ち、身構える。しかし音は変わらず定期的に聞こえるにも関わらず、魔物が飛び出してくる気配はない。

「あら……？」

　拍子抜けしたダニエラは、それでも剣を鞘へ収めることはせず、音の方へと近づいていく。草木が深い方へと続く先を、かきわけながら進んだ。

（え……？）

　そして音の発生源を見つけたダニエラは、困惑気に首を傾げた。
　そこにいたのは魔物ではなかった。どことなく見たことのあるような顔をした三人の男が、得物である武器を使って器用に穴を掘っているではないか。一体何故こんなところでそんなことをしているのだろう。
　ダニエラはキッと男達を見据えた。街から離れたこんな人気のないところでこそこそしているなんて、何かよからぬことを企んでいるからに違いない。

「こんなところで何してんのよ！」
「！」
「な……！」
「誰だ！」

　声をあげながら草叢(くさむら）を飛び出すと、三人の男の視線が一斉にダニエラへと向けられる。
　杖を持ったひょろりと背の高い男と、斧を持ったがたいのいい男。そして長剣を持った中肉中

背の男。どこか既視感のある三人組に、ダニエラはあ、と声をあげた。

「あんた達、セルシーの……！」

　レンゲーに到着した日、Ｃランクに用はないと言って別行動をすることになった、気に食わない三人組だった。あの日以降顔をあわせることもなかったため、改めて彼らの顔を見るまで、すっかり頭から抜け落ちていた。

「誰かと思えばＢランクのお嬢さんじゃねえか。そっちこそ、こんな森の奥に一人で何をしてやがるんだ？」
「宿屋のお姉さんのために、ハーブを採りに来てたのよ」

　長剣を持っている男が、ふてぶてしい笑みを見せてくる。その表情に顔を顰めながらダニエラは応えると、片方の剣先を彼らに向けた。

「あたしはちゃんと応えたわよ。だからそっちもきちんと説明してくれるんでしょうねぇ？」

　今はこの刃先を彼らに向かって振り翳すつもりはない。だが、返答次第では実力行使も止むを得ないだろう。悪巧みをしているのならば、放っておくわけにはいくものか。
　杖を持っている男と斧を持つ男は、焦り交じりに長剣を持つ男の方に視線を送っている。どうやらこの男が三人の中でのリーダー格らしい。しかし二人が焦っているにも関わらず、この男は慌てる素振りすらなかった。

「おいおいお嬢さん。いくらなんでも刃物をこっちに向けるこたぁないだろ。ガルデアの連中は礼儀を教えてくれねえのかい？」
「あたしみたいな可憐な美少女は、こうでもしないと見くびられちゃうのよねぇ。ーーで、どうなのよ。あたしの質問に応えてくれるのかしら？」

　青銀色の瞳に剣呑が帯びていくのが自分でもわかった。既に確信を得ている。彼らはここで人には言えないようなことをしていると。
　ちらりと彼らの足元を見遣ると、穴の近くに大きな袋が置かれていた。それはぱっくりと大きく口を開いていて、中に何が入っているかがよくわかる。円錐状になった塊がごろごろと無造作に入れられていた。あれは、テーストホーンの角だ。

「テーストホーンの角？　何でわざわざ隠すようなことしてーーってまさか」

　テーストホーンはこの地一帯を棲家にしている魔物であり、ここに大量の角があること自体は

別に不自然ではない。彼らもまた彼らで魔物を狩っていただろうから、その際に集めたのだと考えれば。
　しかしテーストホーンの角が入った袋の傍にある、掘り途中である穴。どう考えても、この膨れ上がった袋を隠すために掘ったとしか思えない。そして己の力でテーストホーンの角を得たのなら、こうして埋める必要などないはずだ。後ろめたいことをして得たものだから、彼らは一時的に隠そうとしている。

　同時に思い出したのは、街に魔物の部位を還元した際に、テーストホーンの角がやたらと早く無くなってしまっていたこと。そのときは価値のある角だから皆欲しがるものだと思っていた。だが、もしやこれは――

「あんた達、街の人達に紛れて角ばっか盗ってったわね！　どうりで角ばっかり先になくなるはずよ！」

　そうだとすると辻褄が合う。それに先ほどダニエラがなかなか彼らのことを思い出せなかったのと同じように、初日に少しだけ顔を合わせただけの彼らが街の人々に紛れ込んでいても、気づくことなど出来なかっただろう。

「魔物退治をあたし達に押し付けて、自分達はのうのうとしてたわけ!?　信っじらんない！」

　彼らが真面目に魔物退治に励んでいたとしたら、こんなことをしでかすわけがない。倒した魔物の所有権は倒した本人にあるという風潮だ。己の成果なのだと堂々としていればいいのだから。

「――だったら何だ？　お嬢さん一人でどうしようっていうんだい？　こっちは三人だぜ」
「……」

　返された言葉に、今度はダニエラが沈黙する番になった。彼らがよからぬことを企んでいたなら、それを止めようと思って飛び出したのであって、どうやって止めるか何て考えてはいなかったのだ。

「そ、そうだぜ！　俺たち三人を相手に、勝てると思ってんのか？」
「そうだそうだ！」

　先ほどまでおどおどしていた二人も、数の優位を思い出した途端、態度が一変した。偉そうに胸を張り、勝ち誇った顔をする。

「さっきまでおどおどビクビクしてたのが嘘みたい」
「んだとこのアマ！」
「やんのかコラァ！」

　少し挑発しただけで、相手は簡単に乗ってきた。図星を差されたという後ろめたさもあるのだろう。人数的には不利でも、冷静さを欠いているなら勝機はある。
　体格のいい男が、斧を薙ぐように振りかざして接近してくるが、それを軽く後ろに跳ねて躱した。ダニエラの眼前に斧の刃先がひゅんと通り過ぎる。

「弾けろ水流『水の弾（ウォーターバレット）』！」
「！」

　杖を持った男が詠唱をすると、ダニエラに向かって円状の水の塊が勢いよく飛んでくる。ダニエラは横へと飛んで紙一重でそれを躱した。背後で、ビシャンという水が弾けた音がする。木にぶつかったのだろう。

（まずは術師を何とかした方がいいわね）

　間近に接近してきていたリーダー格の男の長剣の剣戟を、双つの剣で受ける。強がってはみたものの、三対一は、どう考えても不利だ。勝つためには、一人一人倒していくしかない。

「よっ！」
「おわ！」

　ダニエラは腕から力を抜いて刃先を横にずらすと、こちらに杖を向けている男の元へとまっすぐ走った。

「おわわっ！　は、跳ねろ水かーー」
「てええええい！」

　詠唱を完全に唱え終わる前に、ダニエラは剣を振って杖を弾き飛ばす。宙をくるくると舞った杖は、近くにある木の、上の方にある枝葉にひっかかった。

「そりゃ！」
「うぐっ！」
「ハシルト！」

　術師を無力化したあと、鳩尾に向かって蹴りを叩き込んだ。男は腹を抱えて蹲る。これでまずは一人目だ。

「こんの野郎……！」
「情けない男達ね！」

　斧を振りかざされるが、それもまた軽い身のこなしで避ける。斧の一撃は重いため、ダニエラの細腕では受け止めることこそできないが、大振りな分、避けることは容易い。
　交互に振りかざされる長剣と斧。ダニエラは攻撃を避けつつ隙を伺うが、一人戦闘不能にされたことで警戒されたのか、つこうとするたびに邪魔が入って阻止される。
　お互いに決定打を与えられないまま、攻防は続いていた。

「ハッ！　強気の割りに防戦一方だな！」
「二人がかりで美少女一人圧倒できない、冴えない男に言われたくないわね！」

　ダニエラは一度距離をとり、乱れかけている呼吸を整える。

（このままじゃ埒があかないわねぇ）

　もしも何とかこの二人を倒せたとしても、ダニエラ自身もかなり消耗してしまうだろう。二人の男も、武器を構えながら息を整えていた。

（あ……こいつら倒した後のこと考えてなかった。……まあ倒した後考えればいっか）

　今更のようにそんなことを思いながらも、ダニエラは再び剣先を向ける。

　ーーヒュウ。

　風が吹いた。草花と枝葉が擦れ合い、ざわざわと音を立てる。同時に、周囲にピリピリとした緊張が走った。

「な、何か急に空気が……？」
「どうなってんだ……？」

　雰囲気の変化に気づいたのは同時だったらしい。三人の意識は相手にではなく、周囲の状況へと移行する。

「うわあ！」

　悲鳴をあげたのは、ダニエラが先に倒した術師の男だった。確かハシルトという名前で呼ばれていただろうか。彼の方を見ると、腹部を押さえながら、わなわなと腰を抜かしている。

「ハシルト、どうした!?」
「ザーガス、ゲント……俺たち、囲まれて……！」

　周囲の草叢が、がさがさと音を立て始めた。同時に低い唸り声も聞こえてくる。その数は一頭や二頭ではない。

「うげえ……！」

　ダニエラは呻いた。
　草叢から姿を現したのは、魔物の群れ。殺気立つ魔物が四方八方に存在し、完全に包囲されている。ここは、人間同士で争っている場合ではない。

「一時休戦しない？　こいつら何とかしないと、四人揃ってお陀仏よ」
「チッ……仕方ねえ」

　悪巧みを働いていた彼らと組むのは気が引けるが、この群れの中を一人で突破することなど不可能だ。手段を選ぶ余裕などない。

　得物を持たないハシルトの傍まで駆け寄り、彼らに向かって背中を向けた。魔物の包囲網は徐々に狭まってきている。こういうときは、強力な魔術で吹き飛ばすのが効果的だろう。ちらりと腰が抜けているハシルトを見遣った。

「おい、お前さんあの木に登ってハシルトの杖をとってきてくれねえか？　あんたが一番身軽そうだ」
「……そうね。それがいいわね」

　魔術は杖のような、媒介がなければ行使することができない。だから杖を持たないハシルトは無力も同然だ。だからこそ彼を気絶させることなく放置していたのだが、囲まれている状況で足手纏いがいるというのはよろしくない。
　彼の杖が刺さっている木の上を見上げる。ここから然程離れてはいないが、魔物が接近しつつある。そこへと走れば、それにつられて魔物も動き出すだろう。それでも躊躇ってはいられない。もう暫くしたら、そこを魔物に陣取られてしまう。

「うおら！　魔物ども！　こっちだ！」

　リーダー格の男が長剣を振り上げると、魔物達の視線が彼に集まる。その隙をついてダニエラは剣を鞘に収めながら飛び出した。数頭の魔物がそれに気づくが、彼に気をとられた分の時間は充分なものだった。あっというまに杖のある木の元へ辿り着き、跳躍して木の上へと登る。

「あったあった」

　うまい具合に枝葉の上に乗りかかっている杖を掴む。降りようと下を見るが、そこには既に数体の魔物が木の上を見上げ、ダニエラを睨みつけていた。これでは降りられそうにない。

「しょうがないわねぇ……投げるわよ！　受け取りなさい！」

　葉と葉の隙間を縫って、三人がいるであろう方角に杖を投げる。少しして沸いた喜色の声により、ちゃんと届いたのだとわかった。

「ありがたく受け取ったぜ、お嬢さん」
「お礼はいいから、さっさと木の下の魔物を何とかしてちょうだい！」

　魔物は木に登れないため安全ではあるが、身動きがとれない状態だ。できれば早く降りられる状況を作ってほしい。

「ハシルト、ぶちかましてやれ！」
「おうよ！　広がり立つは蒼の紋様、破断せよ『水の波紋（アクアリップル）』！」

　ダニエラは枝を掻き分け視界を明るくすると、魔物の足元に水溜りが広がっていくのが見える。そして水溜りの水面から突如勢いよく水柱が立ち上がり、魔物の足を切り落としていく。

「――杖さえ取りもどせりゃこっちのもんだ」
「！」

　嘲りを含んだ声音に、ダニエラは目尻をつり上げた。『水の波紋（アクアリップル）』の魔術は、ダニエラのいる木の下まで届いていない。

「ちょっと！　待ちなさいよ！」

　彼らはダニエラの静止の声もどこ吹く風で、自分達の周りにいる魔物だけを薙ぎ払いながら、ダニエラのいる場所から次第に遠ざかっていく。

「ちょっと！」

　声を張り上げても、彼らはこちらを顧みてなどくれなかった。遠ざかる姿はそのうち影さえ見えなくなってしまう。

「……あんの、性悪どもおおおおおおおおおおお！」

　沸々と憤りが湧き上がり、ダニエラはありったけの力を込めて叫んだ。

「見ろ！　あと少しだ！」

　突進してくる魔物の攻撃を避けた後、頭部目掛けて剣を振り下ろした。
　今まで通った道を振り返ると、点々と魔物の遺体が転がっている。倒しては進み、倒しては進みを繰り返していたが、それも漸く終わりが見えてきた。追ってきている魔物の数が、初めのころよりも大分減ってきている。

「うるぁあああ！」

　ザーガスが最後の一頭であるテーストホーンの頭蓋を叩き割る。どさりと絶命する姿を目に焼き付けてから、漸く一息つくことができた。

「あー……散々な目にあった」
「それもこれも、あの女のせいだ……！　袋一つ、そのまま置いてきちまったし……」
「……まあ仕方ねえ」

　魔物に囲まれた際、逃げるのに必死で大量に集めたテーストホーンの角が入った袋を放置してきてしまった。それだけが唯一の気がかりである。

　魔物の討伐をガルデアとアズゲリツから来た五人に体よく押し付けることに成功し、彼らが倒した魔物の部位を集める街の人々に紛れ、テーストホーンの角を集めに集めた。
　テーストホーンの角は他の街で高く売れる。テーストホーンの強さ自体も大したことはなく、ちょっとした金儲けにはうってつけの魔物だろう。だが、無意味に魔物を乱獲することは法で厳しく禁じられており、国ごとに規定は違えど、密猟の罰は決して軽いものではない。
　正直なところ、そんな規定などくそくらえだと思うが、堂々とそんなことをすれば確実にギルドを除名させられてしまう。

　ワイドリジョンは金さえ積まれれば後ろ暗い仕事も引き受けると言われているが、そんな重大な仕事を任されるのはＡランク以上の実力者だけであり、多くの団員はごく普通の、法に則った依頼を受けるのが主流である。下手に犯罪に手を出せば、捕まってしまうこともあり得るのだ。そこからワイドリジョン全体を脅かす問題へと発展する可能性がある。それを回避するために、支部の上司は自分達を庇うことなく、法務機関に躊躇いなく突き出すだろう。ワイドリジョンのことを快く思っていない組織の存在も、一つや二つではない。つつかれる前に粗は絞り出すものだ。
　世界的に法整備が進んだ近年では、後暗い依頼自体を一切受けないとする支部もあると聞く。

先ほど自分達の邪魔をした青銀色の髪をした少女も、きっとそういう綺麗事を掲げている支部の出なのだろう。そうでなければ自分達の行いに対して、わざわざ首を突っ込んでくるわけがない。

　だから、金儲けをするためにテーストホーンの角を得ることはできなかった。一時の金を稼ぐためだけに法を犯し、ギルドを除名されてしまっては元も子もない。ギルドを除名されたらランクを外さなければならなくなり、更に仕事も自らの足であくせく探さなければならなくなってしまう。それだけは避けたかった。
　それに、セルシー支部は昔と変わらず富豪からの後暗い仕事を数多くこなしている。それらの依頼で出る報酬は、テーストホーンの角を売りさばくよりも圧倒的に高い。わざわざこんな面倒なことをしなくても、一生困らないほどの金が手に入るのだ。誰もがその高みへ上り詰めたいと思うのは当然だろう。
　しかし自分達は未だＢランク止まりであり、Ａランクへの道へは厳しい。多くの団員が存在するセルシー支部内でも、Ａランク以上の実力者はほんの一握りしか存在しなかった。

　そこであることを思いつく。乱獲できないのであれば、乱獲しても文句が言われないようにすればいいのだと。
　冬の季節は終わりを告げ、エサである植物が生い茂り出す春。必然的に魔物の量が増えるこの時期にならば、増えに増えても『異常繁殖』として片付けられる。事実、魔物の異常繁殖による討伐の依頼は、春の時期が一番多く、セルシー支部の大半の団員は別の討伐依頼を受けて出払うのだ。そして街の方から依頼が舞い込めば、異常に増えた魔物の討伐という正当な理由が生まれる。
　許可なく魔物の数を増やすことも、法で禁じられてはいる。だが足のつきやすい乱獲と違い、人目を避けて平原の魔物にエサをやれば、誰にも知られず数を増やすことができる。そしてテーストホーンだけを増やすのではなく、全体的に数を増やせば、人的要因があるとは思わないだろう。ようはバレなければいいのだ。
　多少の紆余曲折はあれど、ことは順調に進んでいた。増えに増えた魔物に困窮したレンゲーの街は、セルシー支部に依頼し自分達がそれを受けた。上手く焚きつけてガルデアとアズゲリツからやってきた者達に掃討を押し付け、テーストホーンの角の回収に専念もした。

　問題はその後、角を集めに集めれば、元々それほど小さくはない角は大荷物となる。暫くは世話になっている宿屋の中へ隠していたが、帰る際には持ち出さなくてはならない。しかし大量に入った角を持ち出す際、他支部の連中や街の人間に見咎められる可能性が高い。自分達が集め過ぎたせいで、角がとれなかったと嘆いている人々を何人も見た。そんなにたくさんあるのだからと、譲ってくれと言い寄られたら面倒なことこのうえない。

　大分魔物が減った今ならば、少人数で外の探索ができる。ならば朝早い時間に全ての角を外へ

と持ち出し、魔物の掃討が完了するまで隠しておけばいいのではないか。
　昨夜思いついたこの考えに賛同を得て、今日の朝実行した。人の少ない朝も早い時間、大量の角を運び出す。量は多く、同じ場所に全てを隠すのは難しいと判断したため、別の袋に幾つか分けて、それを目印になるようなところに穴を掘って埋めることにした。
　漸く最後の一つを埋めようとしたときだった、あの女が現れたのは。

「埋めることはできなかったが、流石の魔物もテーストホーンの角を食うことはしないだろうから、そのままにしておくぞ。数日もすりゃあ、あの女もくたばるだろ」

　都合よく置き去りにしてきた少女の姿を思い浮かべ、ニヤリと口の端がつりあがる。杖を取りに行くことを頼んだときから、彼女を助ける気などさらさらなかった。ただ、ハシルトの杖を取り戻したかっただけ。それにハシルトの杖が木の上へ弾き飛ばした張本人が取り戻すのは、当然の流れだろう。
　あそこにはまだ夥しい魔物が残っている。地上に降りて魔物に殺されるか、もしくは木の上にいたまま餓死するか、彼女の運命はどちらにせよ変わりがない。自分達のしていたことに対する口封じも出来た以上、あの少女のことを気にかける必要はないのだ。

「なら大丈夫か――あ」

　ザーガスが突然言葉を途切らせ、顔を強張らせた。

「うげ！　あいつらガルデアとアズゲリツの……」

　ハシルトが呻く。ザーガスの視線の先にいたのは、背の高い二人と小柄な二人という凸凹な四人組み。あの印象的な組み合わせは見間違いようがなく、要請を受けてやってきた他支部の四人だ。

「まさか……あの女を捜して……？」
「ど、どうするよゲント……！」
「落ち着け二人共。俺達は魔物の群れを退治しに行ってきたところだ。他支部に所属している女なんざ見ちゃいねえ……だろ？」

　彼女の姿を見てないかと問われても、知らぬ存ぜぬを通せばいい。彼らに自分達が彼女と会ったことなど、知りようがないのだから。ここはコソコソとしているよりも、堂々と構えている方が怪しまれないだろう。

「おい、お前ら！」

（来たな……）

　体格のいい赤茶色の髪をしている槍を背負った男が、こちらに駆け寄ってくる。

「んあ？　何だてめぇらか。俺らに何の用だよ」

　声を掛けられて初めて気づいたと言わんばかりの言葉を返す。彼は一度顔を思い切り顰めながらも、一度頭を振る。

「なあ、この近くでダニエラ……青銀色の髪をした女の子見なかったか？　顔合わせしたとき、お前らに啖呵切ってた子なんだけどよ」

　全く想像通りの展開に、心の中でニヤリと笑う。しかし顔にはおくびにも出さず、ゲントは軽く後ろにいる二人を見遣った。

「おい、あの女のこと見たか？」
「いいや」
「見てねーなぁ」
「だとよ」
「……そうか」

　男は落胆を隠そうともせず後ろを振り返り、仲間に向かって首を振った。これでもう自分達に用などないだろう。手をひらひらと振って彼らの横を通り過ぎようとする。

「お前ら、それほんとだろうなぁ!?　嘘だったら承知しねえぞ！」
「ああ？」

　背の低い子供が、青い瞳をつり上げながらこちらを睨みつけてくる。Ｃランクの子供に下の目線からどんなに睨まれようが怖くはないが、行く手を阻むかのように立ち塞がれるのは癪に障る。

「ヴィ、ヴィゲン……！　すいません」

　ひょろりとした茶髪の男が慌てたように頭を下げてくる。杖を持っているところからして、ハシルトと同じ術師だろう。この男もまたＣランクで、取るに足らない相手だ。苛立ち混じりに舌打ちするが、彼は怯えた様子など微塵も見せずにこちらを見据える。

「俺たちはいなくなった彼女のことが心配で……もし差し障りがなければ、あなた達が何をしていたか教えてもらってもいいでしょうか？」
「ハぁ？　何で俺らがわざわざ言わないといけないわけぇ？」
「そんな義理ねぇだろー。探したきゃ自分達でーー」
「まあ待てお前ら」

　高圧的な態度でやり過ごそうとする仲間を制する。怯んだ様子のない術師には、いくら脅しをかけても無駄だろう。それならば、先ほど決めた『設定』を話した方がすんなりと引くものだ。

「差し支えも何も、外に出てやるこたぁーつに決まってんだろ。ーー魔物退治だ」
「本当だろうなそれ！」
「ヴィゲン、落ち着け」

　槍使いの男が、ヴィゲンと呼んだ子供をどうどうと宥めている。心の中でチッと内心舌打ちした。

「さっきからつっかかりやがって……お前はどうやら俺たちを嘘つきにしたくて堪らないらしいな」
「お前らみたいに、ランクで見下してくるようなヤツの言うことなんか、信用できっかよ！」
「落ち着いて下さい、ヴィゲンさん」

　ずっと黙っていた一番小さな子供がすっと前に出た。ヴィゲンと呼ばれた子供を止めに入る。

「嘘は言っていないと思いますよ。彼らから水属性の魔力の残滓を感じます。一戦交えた後なのは確かです」
「むぐぐ……」

　少年の言葉に思わず目を丸くした。ハシルトの方を見遣り、目線だけで同じことが出来るかと問いかけると、彼はぶんぶんと顔を横に振る。それどころか、彼の仲間達すらも小さな少年を凝視していた。本当にそんなことができるのかと。
　口から出任せにしては、ピタリとハシルトの使った魔術の属性を言い当てている。それも、さも同然といった口ぶりだ。
　しかしこれで彼らは自分達が嘘をついていないと認めたことになる。出来るだけ早く、この場はさっさと切り抜けたい。

「さて、そっちのガキは納得してくれたみたいだが……俺ら、今から遅くなった昼飯を食いに行くところなんだがな」

「お、おお。引き止めて悪かったな」
「……ありがとうございました」

　長身二人が短く礼を言ったところで、彼らに背を向ける。

「すいません、一つお聞きしてもよろしいでしょうか。手間はとらせませんので」
「あぁ？」

　漸く解放されると思いきや、今度は一番小さな子供に引き止められる。思わずドスの効いた不機嫌な声が出たが、子供がそれに怯えた様子はない。紫色の瞳は僅かに揺らぐことなく、真っ直ぐこちらを見据えている。

「あなた方の誰かに、風属性の魔術を使える方はいらっしゃいますか？」
「はあ？」

　全く要領を得ない内容に、三人で顔を見合わせる。この子供は一体何をしたいのだろう。

「いねえよ。ハシルトが使えんのは、水の他に地と氷だけだし、俺とザーガスは魔術自体使えねえ」
「ありがとうございます」

　意図が読めないが、特に問題ないだろうと正直に答えてやる。これで解放されるかと思いきや、子供の視線はこちらから一向に外されない。

「それでは最後にもう一つ。――あなた方からその使えないはずの風属性の魔力の残滓を感じるのですが、それは何故ですか？」
「！」

　ギラリと紫色の瞳が光った気がした。同時に先の質問は、こちらの言質をとるためのものだったと知る。

「リン！　それが本当だったら、風の魔術を使ったのってダニエラなんじゃ……！」
「で、でたらめ言うなよクソガキ！」

　茶髪の術師の言葉に、慌てたようにハシルトが怒鳴りつけた。そしてハッとする。彼がもしも本当に魔力の残滓というものを感じとれたとしても、風属性の残滓など感じ取れるわけがない。何故ならあの女は、自分達と相対した際魔術を使っていないのだから。

「そうだ！　第一あの女、俺たちに魔術なんて使って――」
「馬鹿！　ザーガス！」

　子供の真意に気づいたときには時既に遅い。咄嗟に口を抑えたザーガスに、苛立ちが募った。

「やっぱりお前ら、ウソついてたじゃねえか！」
「その様子だと、一戦やらかした相手ってのはダニエラらしいな。なあ、セルシーの連中よぉ！」

　長剣を持った子供と槍使いの男が眦をつり上げ、いきり立つ。

「……！」

　術師の男もまた、茶色の瞳に剣呑が宿り、杖を構えながらこちらを睨みつけた。

「……っのクソガキ！　ハメやがったな……！」

　こちらの怒りの矛先を、この状況を作り出した小さな子供に向けるが、彼は涼しい顔をしたまま、徐に細身の剣を抜いた。

「本当のことを言っているようにも思えなかったので、カマをかけさせてもらいました。どうやら当たりのようですね」

　いけしゃあしゃあと放たれた言葉に、激しい憤りが沸きあがる。そして彼女のことを知られたからには、このまま彼らを放置するわけにはいかない。
　背中に背負っている剣の柄を掴み、勢いよく引き抜いた。それに合わせ、ザーガスとハシルトも武器を構える。向こうも槍使いと長剣を持った子供も得物を握り、刃先をこちらに向けた。

「覚悟しやがれ！」

　一番体格のいい槍使いに狙いを定めるが、眼前に飛び出してきたのは長剣を持った小柄な子供だった。カキンと金属同士が擦れあう音が響く。

「援護するぜぇ！　広がり立つは――」
「我等を襲う禍々しき力への守護『魔障の保護（マジックプロテクト）』！」

　ハシルトが詠唱しきるより先に、青白い薄いまくが自分達三人を除いた四人を包み込む。その後詠唱を終えたハシルトの魔術が発動し、彼らの足元から水柱が立ち上るが、それはただ服が濡れただけで終わってしまった。『魔障の保護（マジックプロテクト）』によってダメージがほとんど軽減されたのだ。

「うらぁ！」
「ひぃい！」

　槍使いの男が、いつの間にかハシルトに狙いを定め、柄を大きくぐるりと振り回した。ハシルトは情けない悲鳴を上げながら逃げ惑う。

「余所見してんじゃねーぞ！」
「！」

　気が散ったせいか、拮抗を保っていた鍔迫り合いが重みを増し、後ろ足に掛かる力が増える。頭一つ分も小さいというのに、何と言う馬鹿力なのだろう。

「憤怒の激情、力となりて我等に纏え『怒れる強力（アンガーストレインジ）』！」

　まるでダメ押しと言わんばかりに、少し離れたところから術師の青年が補助魔術を紡ぎ出す。こちらもハシルトに掛けてもらいたいところだが、彼は今全力で槍使いの男から逃げ回っており、詠唱を唱えるどころではない。

「避けんじゃねぇよクソガキ！」
「怪我は出来るだけ避けるものですから」

　ザーガスは一番小柄な少年と相対していた。彼の細腕ではザーガスの力に適うわけがないので、一度だけ当たりさえすれば、一気に戦闘不能にまで追い込めるだろう。しかしそのことごとくを避けられ続けている。
　数だけでいえば三対四。こちらが不利だ。しかしランクだけを見れば決して倒せない力の差ではない。こちらは三人共Ｂランクなのに対して、向こうはＣが三人、Ｂランクは槍使いの男だけだ。

（先に術師を何とかするか……！）

　術師以外の三人がこちらを迎撃しているため、相手の術師は好きに術を使える状態にある。実力が同等の場合、術師が機能している方が断然有利を掴めるのだ。

「うおぉ!?」

　押していた剣から力を抜いて横に避けると、少年は前方へバランスを崩す。その背中を渾身の力を込めて蹴り飛ばし、後方で治癒術を詠唱している術師の下へと走った。

「このやろ……待ちやがれ……！」

　背後から子供が叫ぶ声が聞こえるが、待てと言われて素直に待つ馬鹿などいはしない。

「！」

　こちらに気づいた術師が詠唱を中断する。慌てたせいか身体が強張り、無防備にも棒立ちしたまま立ち竦んでいる。ニヤリと口の端をつり上げながら剣を振り上げた。

「凍てつきなさい『氷の塊（アイスカスター）』！」

　突如聞こえた魔術の詠唱。それは眼前の術士が発動したものではない。頬にひやりとした空気が触れたと思った刹那、振り上げた腕がギシリと音を立てて動かなくなった。

「なんだ……！」

　見れば腕から肩にかけて、太陽に照らされて光る透明な氷が覆っている。口元を歪め、大きく舌打ちをした。先ほどの魔術はこちらに向かって放たれたものか。声がした方向を睨むと、黒髪の少年がこちらに剣先を向けていた。カマをかけられたことといい、ことごとく邪魔をしてくる忌々しい小僧だ。しかし――

「隙だらけだぜ、クソガキ！」
「っ！」

　ゲントに向かって魔術を放ったせいで、大きな隙が生まれた。にたりと嗤うザーガスが振り下ろした斧は、少年の胸部を切り裂き鮮血が舞う。しかし直前で後ろに飛び跳ねられたため、気絶するまでには至っていない。

「くっ……ぅ！」

　澄ましていた顔に宿った苦悶の表情に、口の端がつりあがるのを感じた。ダメージを抑えられ

はしたものの、一矢報いることはできただろう。

「リン！」
「来ては駄目です！」

　斬撃を受けた場所に手を当てながら蹲る少年に、術師の青年が駆け寄ろうとする。しかし少年は凛とした声音でそれを制した。そんな健気な少年に、大柄な人間の影が差す。

「まずは一人めえ！」

　ザーガスが嬉々として少年に向かって斧を振り上げた。決して軽傷ではない怪我を負った少年の動きは確実に鈍る。そして一人倒せば相手が得ていた数の有利は失われ、こちらが優勢となるだろう。

「させるかあああああ！」

　斧を振り降ろそうとしたその刹那、ザーガスの背後にいつの間にか長剣を持った子供が迫っていた。大きく飛び跳ね、長剣の平の部分を背後が完全にお留守となっていたザーガスの後頭部へと振り下ろす。

「ーーっ！」

　声にならない悲鳴が上がり、ザーガスの身体はふらふらと覚束ない足取りで二、三歩動いたあと、バタリと横へ倒れた。

「ザーガス！」
「いよっしゃあああ！」

　大きく拳を握った少年は、高々と空へと突き上げる。

（こっちだって結構力込めて蹴ったんだぞ……!?　なのにけろっとしてやがる……！）

　ゲントの蹴りは、綺麗に深く背中を直撃したはず。なのに少年がぴんぴんしているということは、彼にとって大したダメージにはならなかったということ。何という打たれ強さだ。

「うぎゃ！」

　少し離れた場所から聞こえてきたのはハシルトの悲鳴。そちらを向けば、俯せに倒れているハシルトと、その背中に槍の柄を突きたてている青年の姿。

「こっちも終わったぜ。後はお前一人だな」
「ちぃ……っ！」

　優勢を感じたのも束の間、あっという間にザーガスとハシルトは倒され、ゲント独りとなってしまった。暫くしたら融けるとはいえ、利き腕が凍らされて封じられてしまった以上、ゲントに太刀打ちする術はない。

（あぁ……くそ！　何もかも上手くいきやしねえ！）

　四対一。例え利き腕が使える状態であっても、有利な状況ではない。ゲントは苦虫を噛み潰したような顔をしながら、得物の長剣を手から離した。

（っ……！）

　まるで熱を発しているかのような痛みが、胸部から発している。剣を鞘へ収め、胸元を手で押さえると、グローブは真っ赤に染まってしまった。咄嗟に避けたため致命傷ではないし、耐えられない痛みでもないが、血が零れるのは最小限に止めたい。怪我は治せても流れてしまった血はそう簡単に元には戻らないのだから。
　唯一の救いは、首から下げている首飾りに刃先が掠らなかったことだろう。紫色のガラス玉が日の光を浴びてきらりと光った。

「リン！　大丈夫か!?　今治すから！」

　斧使いをヴィゲンが倒したことにより、デリハルトがリンの元へと駆けつけてくれる。杖を掲げ、詠唱を唱えた。

「聖なる光りよ我が手に集え、『回復（ヒール）』！」

　清浄な淡い光りがリンの身体を包み、胸部の痛みがすっと引いていく。破れてしまった服を巻くって傷を確かめるが、そこには既に傷跡すらなかった。流石デリハルトの治癒術である。

「ありがとうございます、デリハルトさーー」

　デリハルトにお礼を言おうと顔を上げるが、思わず言葉が途中で途切れた。デリハルトはリンから視線を完全に外しているどころか、背を向けている。

「どうかしました？」
「リン……自分の今の格好を振り返ってくれ……」

　力なく呟くデリハルトに、リンは首を傾げた。そして言われた通り、自身の身体を見下ろしてーー何故デリハルトが突然背後を向いているのか得心がいった。
　斧使いによって振るわれた刃先は、リンの胸部の服と、通常胸を覆っているサラシまでもを切り裂いてしまっている。そのせいで出血したのだが、それはつまり、普段胸を覆っているサラシが完全に緩んでしまったことを意味している。おまけに上の服も破れてしまっているため、胸部が一部分露になってしまっている状態だ。

「リン、さっきの見たか⁉　俺があのでっかいヤツを倒したんだぜ！　やっぱり強さは背丈じゃ決まらねーー」

　嬉しそうに長剣をぶんぶんと振り回しながらやってきたヴィゲンが、リンの姿を視界に留めると、突然ピタリと固まった。瞳だけでなく、口までポカリと大きく開き、こちらを凝視している。

「おま……！　何で胸膨らんでんだ⁉　腫れたのか⁉」
「……腫れてませんよ。元々です」

　露になっているところを腕で押さえても、サラシが緩んでしまった状態では、服の上からでも胸のラインがはっきりとわかってしまう。その丸みは、男性だったら絶対にありえないもの。

「リン……お前女だったのか……？」
「生物学上は、一応」

　ラントルも翠の瞳を見開き、驚愕している。彼らはリンを少年だと信じて疑っていなかっただろうから、二人にとっては驚愕の事実だろう。

「まぁ女の子みたいな顔してるなとは思ったが……本当に女の子だったなら、納得だわな」
「えええええええ⁉　どうみたって男だったじゃんか！　それに、どうやって今までそんなでかいモン隠してたんだよ！」

「……斧の直撃を受けたときに、サラシまで破られまして」

　おかげでいつも感じている圧迫感はないが、それはそれで違和感を感じる。それに、こうして手で破けた所を隠していては剣を振るうことができない。

「う、うう、うううう……」

　ヴィゲンががっくりと肩を落とす。悲哀に満ちた呻き声に、どうしてそこまで落胆するのだろうかと訝しげに思う。

「は、初めて俺より低いヤツ見つけたとおも、思ったのに……！　結局俺が一番チビスケかよおおおおおう！」
「ああ……そこですか」

　彼は背の低さをやたら気にしていた。女性ならば、彼より背が低いことは決して珍しくはないが、男性だとそうはいかない。いつもの明るさはどこへやら、どんよりと曇った雰囲気を纏い、足を抱えて蹲ってしまう。

「まあ、ヴィゲンのことは一先ず置いておくか」

　落ち込んでいるヴィゲンを後目に、ラントルは唯一気絶させなかったリーダー格の男の方へと向き合う。

「ダニエラはどこだ。お前らと一戦やらかしたんだろ？」
「……へっ、応える義理はねえな」
「――この野郎っ！」

　長剣を使っていた男は、瞳を細め、明らかにこちらを見下した笑みを見せる。せめてもの意趣返しといったところだろうか。彼からダニエラの場所を聞き出すためには、気絶させるわけにはいかない。それを理解しているからこその、あの態度だろう。自分が口を開かなければ情報を得ることができないという優越感。あの態度では、教えてくれるかどうかも怪しい。

（ダニエラさんの近くで水系の魔術を使ったなら、何とか……）

　瞼を閉じ、心を落ち着けて集中する。幼い頃姉に鍛えられ身につけた魔力の残滓を感じる術が、人探しに役立つとは思わなかった。本当に姉から教わったことは、何かしら役立つものばかりだと実感する。

（……みつけた。水属性の魔力の流れ）

　後はこの流れを辿って行けばいいだろう。ダニエラのいる場所へと辿り着くかは一か八かのようなものだが、しゃべる気のない男が口を割るのを待つよりずっといい。

「デリハルトさん、そこの術師の人が使った魔力の残滓の軌跡がわかりました。これを追ってみましょう」
「そ、そんなこともできるんだ……」
「はい」

　デリハルトを見上げると、彼は僅かに顔を逸らしながらも、リンの言葉にコクリと頷く。今ここでダニエラのことを一番心配しているのは彼だ。確証がなくとも、ダニエラへの手掛りとなるならば、それに掛けたいのだろう。

「なら、リンとデリハルト、お前ら二人でダニエラのところまで行ってもらってもいいか？　ヴィゲンがこんな状態なのと、こいつらを野放しにしとくわけにはいかねえからな」

　ラントルが片手で指し示した先は、膝を抱えたまま蹲っているヴィゲンの姿。普段落ち込まない分、落ち込むとなるととことん落ち込んでしまうらしい。こういう場合、自然と回復するまで放置しておくのがいいそうだ。
　そしてセルシー支部所属の三人。そのうち二人は気絶しており、放置しておけば魔物が寄ってくるだろう。流石に魔物のエサにさせるのは気が引ける。

　リンはそっと長剣使いの男を見遣る。彼は黙り込んだまま、静かにこちらを睨んでいた。その姿から、先ほどの余裕は感じない。
　もしもダニエラと戦った際に魔術を使っていないのなら、リンは全く別方向へとデリハルトを誘導してしまうことになる。だが、忌々しげにこちらを睨んでいるということは、そうされては困るから、と解釈できるかもしれない。その表情が演技でなければ。

「リン、これ持ってけ」
「はい？」

　ラントルは自身のジャケットを脱ぎ、リンに手渡す。少し重みのあるジャケットは、袖は長く、裾が広い。

「それ着て前を隠すといい。本当はサイズの合わない俺のよりも、ヴィゲンのヤツのを貸してや

りたいが……」
「いいえ、充分です。お気遣いありがとうございます」

　差し出されたジャケットに腕を通すが、案の定、袖から手がでない。まずは袖を捲くり、手が出るようにした後、ボタンを留めて前を隠す。裾は腿の半分を覆うほどの長さだが、これで両手が自由に使えるし、動きを制限されることもない。

「けっ……今更行ったところで、もうおせぇよ。あんだけの魔物に囲まれて、生きてるわけがねえ」

　こちらを睨むだけだった長剣使いの男が再び口を開いた。しかも、決して聞き流すことなどできない言葉を吐く。リンは瞳が鋭くなるのを自覚しながら、男の方を振り向いた。

「てめえ……まさかダニエラを囮にして逃げてきたのか!?」
「あん？　そうだと言ったらなんだよ。俺たちが生き残るためだ。しかたがねえ」
「お前……！」

　穏やかなデリハルトでさえ険しい顔をしながら、長剣使いの男を睨みつけている。すると、男の顔に余裕の笑みが戻った。その表情を見てハッとする。

（時間稼ぎか……！）

　ここで長剣使いの男を詰り続ければ、それはこの男の思う壺だ。もし男の言っていることが本当ならば、ダニエラは今危機に陥っている可能性が高い。ならば、リン達がしなければいけないことは、最初から決まっている。

「――それなら、尚更早く行かなければなりません。デリハルトさん、その男はラントルさんに任せて、僕達はダニエラさんを探しましょう」
「あ、ああ……そうだね」
「だな。こいつなんかに関わってる場合じゃねえ」

　リンは一度ラントルに軽く頭を下げてから、魔力の残滓を感じる方角を向いた。それは平原を抜けた先にある、森の方へと続いている。

「行きましょう。こっちです！」
「ああ」

デリハルトを先導しながら、リンは鬱蒼と広がる森を目指した。

「ああもう……いい加減諦めなさいよねぇ……！」

　眼下に群がる魔物の群れに、ダニエラは苛立ちを露に大きく嘆息した。しかし、どんなに嘆いても、木の下で蠢いている魔物が減る気配はない。

（これじゃあいつまで経っても帰れないじゃないの……）

　木の上へと登る術を持たない魔物に、ダニエラを仕留めることはできない。だから諦めて巣に帰るまでここで待っていようと思っていたのに、魔物は諦めるどころか逆に次第に増えていく有様だった。

（うわー……皆こっち見てるし……魔物もお腹空いてるのかしら？）

　魔物がダニエラを諦めない理由の一つとして、空腹ではないかと想定している。ハーブを探している間、森の中に目ぼしい草花はなく、どこにでもあるような雑草くらいしか生えていなかった。数が増えたはいいが、魔物全体の腹が満たされるエサが、もうあまり残ってないのだろう。

　ダニエラ達が討伐した魔物の遺体は、レンゲーの街に還元した後、残りは全て焼き尽くし、骨も残さないようにした。
　その結果、生き残った魔物は草花で飢えを凌ぐしかなく、漸く見つけた食いでのありそうな得物に躍起になっている。どの魔物も、目つきがギラギラと鈍く光っており、穏やかさからは程遠い。地面に降り立った途端、魔物は一斉にダニエラを襲うだろう。

「あーもう、お腹減ってんのはあんた達だけじゃないのよ！」

　魔物が空腹だというのであれば、ダニエラもまた空腹だ。昼前からずっとハーブを探し続け、そして今はもう昼から大分時間が過ぎ去っている。魔物に取り囲まれた危機的状況だというのにも関わらず、腹はぐうと空腹を訴えていた。

（……心配してるわよね、流石に）

　脳裏に過ぎるのは、喧嘩別れしてしまったデリハルト。ほぼ一方的に打ち切って飛び出したのはダニエラだが、昼を過ぎても帰らないことに対しては、心配してくれているという確信がある。

　デリハルトは穏やかで人当たりがいい人間だ。治癒術を使える術師でもあるせいか、誰かが怪我をしたと聞くと、真っ先に反応を示す。彼が怒るときはほとんどなく、怒りを露にするといえば、怪我をしたのに無茶な行動をしたりするときくらいだろうか。それも結局は心配してくれているのだ。

　今思えば、あのときデリハルトは、無茶を仕出かそうとするダニエラのことを心配したから、怒ったのだろう。いくらあのときは頭に血が上っていたとはいえ、少し考えればわかることだ。彼は人を見下すような人間ではない。ダニエラはワイドリジョンに入団してからずっと、デリハルトと組んで依頼をこなしていたのだから、それを知っている。あのときそう考えられなかった大きな原因は、きっと――

（どうしてデリハはあたしのこと頼ってくれないのかしら……？）

　ダニエラはデリハルトのことを頼りにしている。彼の治癒術があるからこそ、力づくの行動がとれたり、周囲の警戒を任せられる。デリハルトと組むときは安心感があり、戦う力のないデリハルトの分まで頑張ろうと思えるのだ。
　しかし、デリハルトはダニエラと組むことをどう思っているのかはわからない。思い返すと、ダニエラはデリハルトに頼られたことが全くといっていいほどなかった。ダニエラが魔物に突っ込んでいくのを、いつもフォローしてもらってばかり。
　デリハルトの助けにならなかったわけではないと思うが、頼りにしてるよという言葉を貰ったことは一度もない。

（……リンなら、デリハに頼りにされるのかしら）

　歳の割りにしっかりとした後輩。あまり後先考えずに動くダニエラと違い、彼女は確かな考えを持ってから行動に移すタイプだろう。彼女の示した提案をそのまま採用したことも記憶に新しい。ダニエラは思わず口元を引き結んだ。
　依頼で誰かと組む際は、依頼内容や手が空いている人間がその場その場で組む場合が多く、最終決定は支部の責任者に一任される。基本的に誰が相手でも自身の力を最大限発揮する努力をするべきだが、それでもやはり相性というものがあった。

　ガルデア支部にはデリハルト以外にもう二人、術師がいる。どちらもＡランクの実力者で、五年ほど前に設立されたばかりのガルデア支部に責任者のレニィと共に異動してきた、古参メンバーでもある。
　その一人がヴェルザだ。彼女とは一度だけ依頼を共にしたことがある。攻撃系の術と補助系の術をバランスよく扱える彼女と一緒の依頼は、ダニエラ一人では歯が立たないような魔物相手でもあっさりと蹴散らすことが出来、すんなりと終わらせることができた。

　しかし始終順調だったにも関わらず、ダニエラはどこかしっくり感じていない自分に気づいていた。依頼内容を達成したのにうーんと首を傾げるダニエラを心配したヴェルザに、正直に思っていることをそのまま口にしたら彼女はこんなことを言った。

「ダニエラにとっては、デリハルトが一番相性がいいのよ、きっと」

　いくら頼りになる相手がペアであっても、一番しっくりとくるのはデリハルト。その言葉はストンと胸中に落ち着き、素直に納得した。ダニエラが力を最も発揮できるときは、デリハルトと組んでいるときなのだと。

（あたしはそうでも……デリハもそうとは限らないもんね……）

　ダニエラにとって一番組みやすい相手がデリハルトでも、デリハルトが一番組みやすい相手がダニエラとは限らない。同い年であるが故の気安さで今までずっと組み続けてくれたが、ダニエラよりもリンと組んだ方がしっくりくるというのであれば、今後デリハルトがダニエラと組む機会は減るだろう。

（……それじゃあデリハと一緒にいられないじゃない）

　デリハルトと組んだときに何故一番力を発揮できるのか、その答えにダニエラは大分前から辿り着いていた。
　彼に頼りにされれば、一緒にいられる。でも、そうでないなら別の誰かを選ぶ権利がデリハルトにはある。それに文句を言うことは筋違いだ。
　ダニエラは木の上の枝に座り込み、幹に凭れる。さらりと青銀色の髪が頬を撫でた。

（帰ったら謝らなきゃ……）

　心配をかけたこと、勝手に飛び出したことをきちんと謝罪しよう。そうすればきっと穏やかに微笑みながら許してくれる。デリハルトは優しい人だから。

（それにはまず……こいつらをどうにかしないとダメね）

　木の下に群がっている魔物。そこかしこから聞こえる唸り声。相当な数が集まってきている。これらを蹴散らすのは容易ではない。

（そうだ。木の上で詠唱して、発動と同時に飛び降りればいいじゃない）

襲われる心配のない木の上ならば、詠唱に集中できる。そして上級魔術である『緑風の大渦（トルネード）』ならば、一気に蹴散らせるだろう。

「そうと決まれば早速……！」

ダニエラは枝の上に立ち上がり、左の方の剣を引き抜いて地面の方に向けた。

「駆け巡る優しき風、その姿を――」

――ヂイイィィィィ！

詠唱の途中、木の下にいる魔物が突然騒ぎ始めた。魔物の視線がダニエラから逸れる。あまりにも唐突に魔物の様子が変わってしまったため、思わず詠唱が止まってしまった。一体何があったのかと枝を支えに下の様子を伺おうとすれば、チリリとした小さな火花がダニエラの鼻先を掠めた。

「火……？」

間違いなくそれは火だ。しかしこんな火の気のないところで自然に発火したとは思えない。雷が落ちてきたわけでもない。ならば考えられることはただ一つ。

「……ラ！　……エラ！」
「デリハ!?」

僅かに聞こえてきた人の声に、ダニエラは確信を得た。デリハルトとリンだ。帰りが遅くなったダニエラを心配し、こんなところにまで探しに来てくれたのだろう。さっきの火は、きっとリンが炎系の魔術を使ったに違いない。

「ダニエラ！　いるのか!?」
「あたしはこっち！　木の上にいるわ！　魔物が下をうろついているせいで降りられないのよ！」
「今そちらに向かいます！」

探しに来てくれたことを嬉しく思うのと同時に、彼らもまたこの大量な魔物を相手にしている状況になってしまうことを思い、思わず顔を歪めた。助けに入らねばと下を見下ろすが、火に驚いて逃げる魔物と、反対に立ち向かっていく魔物が入り乱れている。これでは下りた途端突き飛ばされるのがオチだ。最悪の場合、踏み潰される可能性もある。

（どうすればいいのよ……！）

　リンが一度魔術を使えたのは、きっと魔物の意識がダニエラに向いていたからだ。こんなに密集しているところでは、当然魔術は使えない。今魔術を使えるのはダニエラだけだ。しかし上級術の『緑風の大渦（トルネード）』では、二人を巻き込んでしまう可能性がある。

（そうだ、『突風の槍（ブラストスピア）』があるじゃない！）

　前方位を吹き飛ばす魔術、『突風の槍（ブラストスピア）』。これを真下に放てば二人に当たる心配はないし、下にいる魔物を吹き飛ばすことができる。
　ダニエラは剣先を再び真下の地面へと向けた。

「吹き荒ぶ風よ、障害を突き飛ばせ『突風の槍（ブラストスピア）』！」

　剣先から突風が生まれ、地面に衝突した。木の下をウロウロしていた魔物は近距離から受けた突風に足をとられて横転し、ごろごろと転がっていく。木の下にポッカリと空間が生まれた。

「よおっし！」

　ダニエラはすぐさま木の上から飛び降り、着地する。すぐに周囲の様子を伺うと、平原に繋がる方角にもまた、一部分穴が開いているところが見える。そこには二人の人間がいて、その周囲に浮いている幾多の短剣のせいで、魔物は迂闊に手を出せないでいるようだった。

（『刀剣の盾（ダガーシールド）』……あたしも今度覚えようかしら）

　そんなことを思いながら、二人のいるところへと駆け出し、大きく跳躍した。群れている魔物の背中を蹴り飛ばしながら先へと進む。矛先がダニエラから逸れたおかげで、群れの中を移動するのはさほど大変なことではなかった。

「デリハ！　リン！」
「ダニエラ！」
「ダニエラさん！」

　二人の傍に飛び込み、彼らに背中を向けて双剣を構えた。

「ごめん、心配かけたわ」

「……無事でよかったよ、ダニエラ」

　今はこれ以上の言葉はいらない。ダニエラはピリリとした空気を肌で感じた。先ほどまで離れた位置にいたため、魔物達はどちらを狙おうか迷うなりしていたが、それが一箇所に集まったのだ。その分狙いを定められやすくなる。

「――来ます！」

　四方八方から、魔物が突進してきた。ダニエラは目の前のテーストホーンの眼球を狙って短剣を横に薙ぐ。視力を奪われたテーストホーンは前足を高く上げて跳ねると、前後左右に暴れ周り、他の魔物の行く手を遮ってくれる。下手に倒すよりも、こうして魔物を混乱させ、足止め要因にした方が今は都合がいい。

「大分減らしたと思いましたが……まだこんなにいたんです、ね！」

　ちらりと背後にいるリンの様子を伺うと、彼女もまたダニエラと同じく、セイボリーピッグの眼球を切りつけていた。近くの魔物から、手際よく斬りつけている。背後の心配をする必要は全くない。

「荒ぶる氷雪、宙へと舞い散れ『雪の乱流（スノウストーム）』！」

　冷気が肌を撫でた。美しい粉雪がダニエラの周囲を舞い散り、魔物に襲い掛かる。見た目は綺麗だが、雪に触れた魔物はビクリと硬直し、動かなくなってしまう。その隙をついてダイエタリーホースの頸部を切り裂いた。鮮血が舞うため、素早く回避しながら次なる標的に目を移す。

「……やっぱりキリがないな」
「そうね……」

　囲まれはしているものの、足止めを優先しているため今のところ危機には陥ってはいない。しかしいかんせん数が多すぎる。今はよくとも、いずれは消耗して動けなくなってしまうだろう。そうなってしまったらおしまいだ。接近しつつあったテーストホーンの眼球を切りつけながら、いつまでならもつだろうかと頭の中で検討を始める。

「ダニエラさん、デリハルトさん。一か八かの賭けのようなものですが……聞いてもらえますか？」
「何かあるの？　リン」

　いつまでも防戦一方なのはよくないことくらい、ダニエラとてわかる。だが、変わりとなる策がサッパリ浮かばないため、一か八かでも何かあるなら聞いてみたい。

「上級術の『緑風の大渦（トルネード）』と『氷雪の轟嵐（ブリザード）』を同時に放つんです。『氷雪の轟嵐（ブリザード）』が上手く風に乗れば、遠くにいる魔物にまで届いて一網打尽にできると思います」
「合わせ技か……！」

　『緑風の大渦（トルネード）』はダニエラが、『氷雪の轟嵐（ブリザード）』はデリハルトが使うことができる。二つの上級術をあわせたら、それは壮絶な威力となるだろう。

「で、でも、それだと詠唱してる間、リンが大変じゃない！」

　詠唱している間は攻撃へと転じることは難しい。下級や中級ならば何とかなっても、集中力を必要とする上級術では無理だ。攻撃を避けることぐらいはできるかもしれないが、出来る限り詠唱に集中したい。こうして会話をしながら戦うのとは、わけが違うのだ。
　そうなると、詠唱が終わるまでこの大量の魔物を、リン一人で相手にすることになる。それほど長い時間ではないが、詠唱は僅かでも乱れたら初めからやり直しだ。リンがもし負傷したら、ダニエラは詠唱に戻れない自信がある。

「リン、中級術なら使えるんでしょ？　なら、あたしが詠唱中の二人を守るわ。炎は中級術でも威力高いの多いし、いけるわよ」

　それに加えこの森の中ならば、魔物は余計に火に敏感になるだろう。燃えるモノが周囲に多ければ危機を感じて慌てるはず。

「いいえ、炎はダメです。氷とは対極の位置にある相性の悪さですから……同時に放っては術を相殺してしまいます」
「あ……そういえばそうだったわね……」

　攻撃系の魔術の属性に存在する相性。炎・地・水・氷・風・雷の並び順が示すように、炎と氷は最悪の相性だ。得意としている属性と相性の悪い属性の術は、習得することも困難を極める。下級の術なら満遍なく覚えているリンも、自身が得意とする炎と相性の悪い氷属性の魔術は、一番簡単な『氷の塊（アイスカスター）』しか覚えていないらしい。

「でも、風と氷ならば話は別です。炎と違って相性がいいので上手くいく確立は高いと思います。ですからここは、ダニエラさんでないと駄目なんです」

「……」

　不覚にも、相性がいいという理由に心が揺れた。リンが言ったのはあくまで属性的な意味であり、それ以上の意味などないというのに。

「――なら、上級術を使うより先に、中級術で魔物を吹き飛ばしておいた方がいいね」
「デリハ!?」
「そうしていただけると大変助かります」
「リンまで……二人ともやる気満々じゃないの」

　デリハルトも、リンが危険だからと反対するかと思っていたのに。二人がやる気ならば、ダニエラもそれに乗らなければならないではないか。

「やろう、ダニエラ。この魔物達をどうにかするにはそれしかない。リンのためにも、一度で成功させるんだ。――俺たちならきっとできるよ」
「デリハ……」

　向けられた茶色の眼差しにあるのは、いつも通りの穏やかな光。そしてまっすぐ魔物を見る目は完全に腹を括った決意が漲っていた。
　ダニエラは一度剣を握りなおし、軽く息を吐く。眼前にいる魔物の眼球を斬り付けたあと、即頭部を柄で殴りつけて転倒させる。

「――やってやろうじゃない！　ご希望通り、派手にぶちかますわよ！」
「ああ」

　漸く普段の調子を取り戻せたような気がする。このような無鉄砲な計画を立てるのは、本来ダニエラの役目であったはずだ。
　ダニエラはちらりとリンの方を見遣った。いつも冷静でよく考えて行動する子だと思ったが、彼女もまたこうした無茶なことをすることもあるのだと、少し驚いている。

（やると決めたんだから、絶対に成功させてやるわ！）

　信頼してくれたなら、それに応えるべく奮闘するべきもの。詠唱中のフォローに回るリンのことは心配だが、それを買って出てくれた彼女の気持ちを汲む。

「それじゃあやるわよ！　デリハ、よろしく！」
「ああ。――吹き荒ぶ風よ、障害を突き飛ばせ『突風の槍（ブラストスピア）』！」

　激しい突風が、デリハルトの前方にいた魔物を吹き飛ばす。これで周囲の魔物の数は限定された。ダニエラは大きく息を吸い込み、剣先に意識を集中させる。

「駆け巡る優しき風――」
「酷寒からなる白き世界――」

　デリハルトと同時に、ダニエラは上級術の詠唱を始めた。眼前に隙だらけとなったダニエラを襲うべく、セイボリーピッグが迫るが、『刀剣の盾（ダガーシールド）』を纏ったリンがダニエラの前に立ちはだかり、剣先を眼球へと突き刺す。
　彼女はすぐさま剣を抜き放ち、今度はデリハルトの方へと駆け出して行く。リンのためにも、このまま詠唱を途切らせるわけにはいかない。

「その姿を烈刃へと変え、全てを薙ぎ払え」
「悪しきモノを凍結し、終焉へと導け」

　再びダニエラに迫っていたテーストホーンの突進を、細身の剣でリンは受け止める。表情に苦悶が走るが、纏っている魔力の剣がテーストホーンに突き刺さり、怯んだ。

「『緑風の大渦（トルネード）』！」
「『氷雪の轟嵐（ブリザード）』！」

　詠唱が終わるのは、ほぼ同時だった。ダニエラ達を中心に、凄まじい疾風と、白銀の吹雪が魔物に襲い掛かる。特に傍にいた魔物はその直撃を受け、大きく森の奥へと吹き飛ばされた。それだけでなく凍える冷気が追撃し、ぶるぶると身震いしたのち、固まって微動だにしなくなっていく。

　術が収まった頃には、周囲は白で埋めつくされていた。生い茂っていた木々はなぎ倒されたのち、真っ白な雪で覆われ、魔物もまた、固まったまま動き出す気配がない。

「成功した……みたいね？」
「だね……」

　達成感よりも、全身に感じたのは疲労感。ダニエラはその場に両手をつき、ふうと体内の息を吐き出す。
　暫く魔物の群れの中にいたせいか、緊張感から解放されて身体から力が抜けたのだ。

「お疲れ様です、二人共」
「ありがと。リンもお疲れ様」

　ゆっくりと身体を起こしながら立ち上がると、ダニエラは思わず目を丸くした。リンが明らかに丈の合っていないジャケットを着ていることに気付いたから。朝見たときはこんな格好をしていなかったはずなのに。

「どうしたのその格好？」
「ああ……これは実は……」
「俺たちここまで来る途中に、セルシー支部のヤツらと一戦交えたんだ」
「！」

　ダニエラが木の上で立ち往生する原因となった三人組。厭らしく口の端をつり上げた笑みを思い出し、むかむかとした苛立ちが沸きあがった。

「あいつら……二人共怪我はないの？」
「俺はなかったけど……」
「デリハルトさんに治してもらったので、大丈夫です。そのときに服が破けてしまったので、ラントルさんに上着をお借りしました」
「なるほどね」

　三人組に対して沸いた苛立ちも、逆に倒して無力化したという話を聞いてすっきりとする。Ｃランク三人を舐めてかかった報いだ。

「うんうん、油断大敵ってヤツね」

　ワイドリジョンが定めたランクは、あくまで魔物を相手にした場合のもの。人間相手でも該当しないわけではないが、必ずしも当てはまるとは限らない。それを考慮せずに油断していれば、負けるのは当然だ。

「じゃあ後は戻るだけーー」

　機嫌が直ったダニエラは、早速森から出ようとするが、ピーンとあることを思いついた。くるりとリンの方を向き、にっこりと笑みを見せる。デリハルトが小さく「あー……」と呆れたように呟いたのは聞こえないフリだ。

「リーン！　街についたら、服買いに行きましょうよ。ずっとラントルからジャケット借りっぱ

なしなのもあれでしょ？」
「あ、はい。そうですね」

　素直に頷くリンに、ダニエラはにんまりと口の端をつり上げた。

「せっかくだし、このあたしがリンの新しい服を見繕ってあげるわ！」
「え……？」
「誰が見ても男の子だなんて思わせない、可愛い服選んであげる！　シグさんも思わず可愛いって思うような……ね！」
「っ!?」

　ボン、とリンの顔が真っ赤に染まりあがった。望んでいた通りの反応に、気分は高揚する。

「い、いえ、け、結構です！　自分で選びますから！」
「あら、それじゃあいつもと同じようなのしか選ばないじゃない。ものはためしで、フリフリしたのとかフワフワしたのとか、着てみたらどう？　シグさんそういうの好きかもよ？」
「っ……その、誰の好みだとか、そういう問題ではなくて……！」
「大丈夫、女の子らしい格好でもリンが懸念してる動き易い服装はたくさんあるわ。あたしが着てるようなのとかね。動き易く、かつリンに似合う可愛い服を選んであげるから、心配無用よ。絶対シグさんに似合ってるよって言わせてみせるわ。このダニエラさんにまっかせなさい！」
「ーーっ！」

　次から次へと捲し立てると、リンの顔は耳まで赤く染まっていく。先ほどまでの冷静な雰囲気は微塵もなく、あわあわと慌てる姿はとても可愛く、面白い。

「ーーっ、ぼ、僕、先にラントルさん達の所へ戻ります！」

　羞恥に耐えられなくなったのか、リンは突如踵を返して平原の方角へと走り去っていく。ダニエラはにまにまとした顔のまま、それを見送った。

「やっぱり可愛いわねぇ、リンったら」
「……ほどほどにしなよ？」
「引き際くらいわかってるわよー」

　少年らしいと思うことは多々あれど、先ほどのリンを見て少年だと思う者はいないだろう。後は格好さえ少女らしくすればいいのだ。

「ウフフ……どんな服を選んであげようかしーークシュ！」

　街へと戻ったときのことを巡らせていると、ブルリと全身を寒気が襲う。それもそのはず、周りは季節外れの雪景色で、ダニエラの服装は肩や足が出た、露出の多いもの。冷えるのは当然である。

「ここにいたら風邪を引くね……俺たちも戻ろうか」
「……」

　ダニエラは手で肩を摩りながら、じっとデリハルトを見据える。
　今までは、デリハルトがダニエラの傍にいることは当たり前となっていた。でも、これから先もそうであるとは限らない。リン以外にも後輩は増えていくだろうし、依頼を受けた先の街などで、特別な人を見つけてしまうことだってある。

（……一歩を踏み出すのは怖いけど）

　ずっと傍にいて欲しいと思うのならば、このままではだめだ。デリハルトにはずっとダニエラの傍にいてもらいたい。依頼を受けていないときでも、一緒に。

「ダニエラ……？」

　突然無言になったダニエラを心配してか、デリハルトが少し目を細めながら、ダニエラを見下ろしている。ダニエラは無言のまま一歩を踏み出し、両腕をデリハルトに向けて伸ばした。

「ダ、ダニエラ!?」

　頭上から聞こえる狼狽したデリハルトの声。いきなりぎゅうっと抱きつかれれば、誰だって驚くだろう。

「うん、温かいわ」
「ダニエラ!?　い、一体どうし……」
「温かいから、暫くこうしててもいい？」

　顔を上げてこちらを見下ろしているデリハルトの表情を見ると、彼の顔はリンにも負けないほど、真っ赤に染まっていた。ダニエラはじっと茶色の瞳を見つめる。

「ーーそれは、えっと……」

　うろたえていたデリハルトも、じっと見つめ続けることによって、ダニエラが真に言わんとしていることを悟ったらしい。一度軽く目を伏せたあと開いた茶色の双眸に、熱が篭ったのを感じた。

「……君は、俺でいいの？」
「デリハがいいの！　女の子の方から言わせる気!?」
「ご、ごめん……」

　煮え切らない台詞に、くわっと噛み付くと同時に、胸中はどきどきと高鳴りを覚える。そんな言葉が出てくるということは、期待してもいいということだろうか。

「……」

　デリハルトは無言のまま、ダニエラの背中にそっと腕を回してくれた。長い腕が、しっかりとダニエラを包み込んでいる。

「……少しの間なら、彼らも待っていてくれる……と思う」
「……うん！」

　それが彼なりの答えなのだとわかったとき、ダニエラはぎゅっと抱きつく腕に力を込めた。

　雲ひとつない澄み渡る青い空。注がれる日差しは強く、まだ春だというのに初夏の香りを感じさせる。
　大きな荷物を持ったディーラーが往来を行き来し、街の住人や訪れた旅人の目を楽しませている。

「活気が戻りましたね」
「そりゃそうよ。あたし達が頑張って魔物退治したんだから」

　隣を歩くダニエラが上機嫌で腕を組んでいる。デリハルトも苦笑しつつも、賑わっている街中を見る目はとても穏やかだ。
　リン達は無事に依頼を達成した。森の中にあった魔物の棲家を虱潰しに殲滅していき、魔物の数を正常な数へと戻す。
　一朝一夕で終わらせられることではなかったが、街の外にいるだけで魔物の群れに襲撃されるという事態よりかは遙かにましである。こちらから先に攻撃を仕掛けることも相俟って、比較的日数も掛からずに終わらせることができた。これでもうレンゲー周辺で魔物の群れに襲われるということはなくなるだろう。

「街が元に戻ったのはいいんだけどよー、あいつら放置したまんまだけどいいのか？　またどっかで悪さするかもしれねーぞ？」

　ヴィゲンがいうあいつらとは、セルシー支部から派遣された三人の傭兵のことだろう。彼らは自分達の支部が受けた依頼なのにも関わらず、魔物の討伐を放棄し、街の人々に還元するためのテーストホーンの角を独占していたのだ。実際街の人達から、魔物から部位を採取しようとした際、彼らの顔を見たという証言を幾つか得ている。

「レンゲーの街の責任者の人にもそのこと伝えたし、支部に戻った後もその三人のことでセルシーに苦情を言えば、確実に除隊されんだろ。私欲のために仕事を放棄したんだ、当然の報いってな」

　当然のごとく、仕事終了による報酬はセルシーには渡さないとレンゲーの街の責任者は強い口調で言っていた。元々金さえ払えばどんな仕事でも請けるという理念は、後暗い仕事も請け負うというマイナスイメージでもあるために、派遣される傭兵にとって、依頼の完遂は必須だ。実力不足による失敗だったらまだしも、自ら放棄したとあっては築いてきた信頼を地に落とす行為に等しい。二度と依頼を頼まれなくなったとしても、当然といえる。

「Ａランク以上の実力者でもない限り、ワイドリジョンを除隊してランクを外すことになったら、仕事を見つけるのも一苦労だろうなぁ……」

　武器につけられるランクは、素人である一般人でも一目である程度の実力が測れるという役目も担っている。このランクの傭兵ならば、これくらいの魔物なら倒せるだろうという予測が立つのだ。ワイドリジョンでは自身のランクより上のランクを偽装することは、厳罰の対象となっている。それ故武器に刻まれるランクは、素人でも傭兵の強さを識別できる目安として浸透しているのだ。

　だからこそ、その印のない人間は一般の人々にとって実力を測ることができない、不安要素となる。ワイドリジョンを除隊すれば、当然ランクは剥奪となり、無印の得物を持たなければならない。ワイドリジョンに居れば勝手に入ってくる依頼を自ら探さなければいけない上に、個人個人と一から信頼関係を築いていかなければならなくなる。ワイドリジョンという後ろ盾のない状態で冒険者として身を立てることは、相当厳しいだろう。大抵の冒険者がワイドリジョンに所属するのは、それが大きな理由だ。

「でもさ、絶対あいつらだろ？　魔物の数を異常に増やした奴らって！」

　ヴィゲンがぐっと拳を握りながら、丸い瞳に剣呑を走らせた。

「……それはあくまでただの推測ですよ。証拠はありませんし、本当にただの異常繁殖である可能性もあります」

　淡々とヴィゲンを納得させるように言った言葉は、本当はリン自身を言い聞かせるもの。
　ダニエラからあの三人がテーストホーンの角を独占していたと聞いたとき、頭に過ぎったのは一度は振り払った疑念だった。異常なほどに増えた魔物。もしかしたら、誰かが人為的に増やしたのではないのかと。
　一度そう思ってしまったら、そうとしか思えなくなった。だが確証はどこにもないという事実に、歯がゆくなる。あの三人を問い詰めたところで、証拠を出せというに決まっている。そしてそれを立証できる術はない。

　レンゲーの街の人達が、彼らが魔物を増やしていることに気づいていたならば、その場でひと悶着があったはずだ。だが、街の周辺にまで魔物がたくさん現れるようにるまで、彼らは気付かなかった。魔物を増やしている人間の存在になど、更に気付けるとは思えない。

「ま、確かにそれが立証できたら大罪よねぇ。確実に終身刑だわ。チェスタジアではだけど」

　法律はそれぞれの国ごと違ったものがあるが、世界共通で禁じられている事項も幾つかある。意図的に指定された以外の魔物を増殖させることは、その一つに該当されていた。しかしその罰の大きさは国ごとに設定されており、チェスタジアでは一生牢獄へと繋がれる大罪となる。オリフィールの法のことにはリンも詳しくないため、どれだけの重さかはわからない。

「ネフニーでも終身刑だな。オリフィールも似たようなものじゃねえか？」
「あーあ、リンがもっと早くそのこと言ってくれたら、オレ絶対あいつら逃がさなかったのによー」
「それは諦めろ。まあ、牢にぶちこむことはできなくても、あいつら二度とレンゲーに来ることできねえし、もし来たら街の人達の袋叩きに合うだろうな」

　セルシー支部の三人は、既にレンゲーにはいない。捕まえた彼らを引き連れて責任者に顛末を説明した後、レンゲーの街から永久追放処分を受けた。それだけで済んでしまったのは、明らかになっているのが依頼を放棄をし、私欲を満たそうとしたところのみだからである。

　リンが魔物の異常繁殖に彼らが関わっているのではないかと口に出したのは、あの三人が既に追放された後のこと。ポツリと零してしまったのを、ヴィゲンに聞かれてしまったのだ。声を窄めることをしないヴィゲンが大きな声でそれに驚き、あっという間にその疑惑は街中に広がってしまった。
　軽率なことを言ってしまったとリンは少し後悔をしている。その疑惑のせいで、ワイドリジョンへの不審が募ってしまった可能性もあるのだ。
　そのことでヴィゲンを責めることはできない。リンがうっかり漏らさなければよかっただけなのだから。

「なに複雑そうな顔してんのよ！」
「うわ！」

　ダニエラが突然リンの肩に腕を回し、重心が前方にと傾いた。転ぶことこそなかったが、不意をつかれたために足が多少もつれる。

「噂が広まっちゃった後も、ちゃんと報酬払ってくれるって約束してもらったじゃない。まあ確かに睨んでくる街の人達もいるけど、チェルトさん達みたいにあたし達のこと信じてくれた人達だっているわ。あたし達は何にも悪いことなんてしてないんだから、堂々としてればいいのよ」

　噂が広まってしまった後も、世話になっている宿屋のチェルトとマルクの態度は変わらなかった。いつもの明るい笑顔で出迎えてくれた。リン達のことを快く思わない街の人たちに何か言

われても、彼らはリン達を大事な客だと言って庇ってもくれた。
　彼らの父に惜しむことなく治癒術を行使したこと、ダニエラがたった一輪のハーブを危険を顧みず採ってきてくれたことなどを理由に、むしろ感謝していると言ってくれた。宿を引き払った今日まで、増え始めた他の客と同じように接してくれた。

　ワイドリジョンは世界各国に支部を設けている、巨大なギルド組織だ。その中には当然悪いことを考える人間もいれば、ガルデア支部の皆のように、優しい人達もいる。ヴィゲンやラントルも善良な人間だ。
　噂を真に受けてワイドリジョン全体を敵視する人もいれば、個人の問題としてリン達のことを信じてくれる人もいる。ダニエラの言う通りだ。受け取り方は人の数だけあるのだから、それを一々気にする必要はない。己に非がないのなら尚更だ。堂々としていればいい。

「ありがとうございます、ダニエラさん」
「うんうん、気にしないで。お礼なら今度一緒に服屋に――」
「それは遠慮します」

　服屋に連れ込もうという目論みをキッパリと断ってから、するりとダニエラの腕から抜け出す。
　セルシー支部の三人との戦闘で破けてしまった服を新調するために、三人を突き出した後服屋を見て回った。嬉々として、女の子らしいふわふわひらひらしたものを着せようとするダニエラを何度も遮り、あまり代わり映えのない無難なものを選ぶことに成功した。だが、ダニエラはそれがお気に召さないらしく、ガルデアに戻ったらまた一緒に服屋へ行こうと何度も誘われる。彼女はどうしてそんなに、リンに女の子らしい服を着せたがるのだろうか。

「さて、名残惜しいがそろそろお別れだな」

　大通りの分かれ道までやってくると、ラントルがリン達とは別の進路方向を指差す。
　昨日仕事を完全に終えた五人は、今日の昼食を共にすることを約束していた。ダニエラが目をつけていた食堂へ入り、そこで腹を満たした後、それぞれの岐路につく。

「短い間だったけど楽しかったぜ！」
「こっちも楽しかったわ。ありがとね」
「また一緒に依頼をすることになったらよろしく」
「二人共、お元気で」
「ああ、またな」

　ラントルとヴィゲン、二人と過ごした数日間はとても楽しかった。同い年と親しい会話をした

ことがなかったリンにとって、ヴィゲンとの出会いは貴重とも言える。彼の方から何度か敬語でなくていいと言われたが、慣れていないせいか結局敬語を崩すことはできなかった。それだけは申し訳なく思う。

「俺たちも行こうか」
「そうね」

　デリハルトに促され、アズゲリツの二人の背中から視線を外した。ガルデアのあるチェスタジア方面の東側の門を目指す。

「帰ったらガルデアで少しのんびりしたいわねえ。今までずっと戦い三昧だったわけだし」
「流石に長期依頼の後だから、帰ってすぐまた依頼、ってことはないだろうけど」
「そうよねえ。あ、リン、ガルデアに帰ったら一緒に服屋さんに――」
「行きません」
「むむう……！」

　何度目かになる誘いをにべもなく断ると、ダニエラはぷっくりと頬を膨らませた。そしてリンが冷たい、と言いながらデリハルトの腕にしがみつく。デリハルトはそれに対してからかうからだよ、と冷静に返した。ダニエラはまた頬を膨らませるが、デリハルトの腕に抱きついたまま、離れようとはしない。

（そういえば、恋人同士になられたんだったっけ）

　一人で外へと行ってしまったダニエラを探しに行った騒動の夜、宿屋の部屋でダニエラが嬉しそうな顔をしながら、リンに教えてくれた。デリハルトと気持ちが通じ合ったと。
　実はデリハルトはダニエラに一目惚れしていたとか、これからもずっと二人で依頼をこなしていくとか、デリハルトを守るのは自分の役目だということを長々と語る。リンは嬉しそうなダニエラに水を差したくはなかったため、相槌をうちながら大人しくダニエラの話に耳を傾けた。最後におめでとうの言葉を添えるのも忘れず。

　二人が想いあっていたことには気づかなかったが、成就してよかったと心から思う。お互いが想い合うというのは、素晴らしいことだ。義兄と姉を見ていたからよくわかる。

「あ」

　ダニエラが突然足を止める。必然とデリハルトも足を止めることになり、リンも訝しげにダニエラの方を見遣った。

「どうかしたんですか？」
「ほら、あそこあそこ」

　ダニエラはするりとデリハルトから腕を離し、ある一点を指差した。その先に存在する人に気づいたデリハルトもまた、あ、と小さく呟く。

「あの人は……」

　リンは身体が緊張で強張っていくのを感じた。どうしてあの人がこんなところにいるのだろう。しかし茜色の長い髪を低い位置で結っている長身の男性のことを、見間違えるはずがない。

「シグさんだわ」
「――！」

　ダニエラの口から紡がれた名前に、心臓がどくどくと大きな音を立て始める。立ち止まって彼を注視していた自分達は目立ったのか、シグルドがこちらに気づき、軽く手を振った。

「よ！　元気そうだな」
「シグさんも変わらず元気そうねえ」

　お互いが自然と歩み寄ると、シグルドはいつもの快活な笑みを見せてくれる。ぎぎぎとぎこちなる身体を何とか動かし、ダニエラの斜め後ろに立つ。
　人としての基本として、挨拶を交わさなければ。しかし何を言えばいいだろう。こんにちはか、それとも一週間以上も会っていなかったことを考えたらお久しぶりですの方がいいだろうか。ぐるぐると頭が回り、肝心の第一声が出てこない。

「リンも元気そうだな」
「――！　は、はい！　元気です！」

　勢いよく応えてから、何だその返しはと内心つっこみを入れる。声をかけてくれたのだから、そこは普通に挨拶を返すところであろうに。
　ポンと頭に軽い感触。いつのまにかシグルドはリンの目の前にいて、大きな手をリンの頭の上に乗せている。カッと頬が紅潮していくのを感じた。

「随分時間が掛かってたからさ、心配してたんだ。元気そうでよかったよ」
「あ……あ、ありがとうございます」

　リンはシグルドに向かって頭を下げた。心配してくれたことを嬉しく思ったのと、赤く染まった顔を隠すために。そのせいで頭を上げた後も、俯いた顔を上げることができない。

「シグルドさん、レンゲーには何か用事でも？」
「そうよね。何もなしにこんなところまでくるわけないし」

　デリハルトの問いかけにダニエラが首を傾げた。しかしその口元はニヤニヤとつりあがっていて、明らかに楽しげだということがわかる。そして今のリンには、自分が楽しまれていることに気づく余裕などない。

「ん？　依頼を受けたんだよ。テーストホーンの角が欲しいっていうヤツをな」
「へー。でも、それＳランクのシグさんが受けるような依頼じゃないじゃない。ドロシーとか他の人たち何してんのよ」

　テーストホーンはＢランクに指定されている魔物である。Ｓランクであるシグルドが受ける依頼としては、明らかに役不足だ。ガルデアにも、ダニエラ以外にＢランクの人間は当然いる。調合を得意としているドロシーもまた、Ｂランクである。

「皆他にやることあるらしくてなぁ。リン達のこと気になってるなら、ついでに行ってくればいいってロードに言われてさ」
「なるほどね。ーー流石ロードさん、乙女の味方」

　ダニエラが小さく何かを呟くと、くるりとリンの方を向いた。きょとんとしていると、彼女はにっこりと満面の笑みを向ける。同時にぞわりと背筋に悪寒が走った。嫌な予感がする。

「ーーねえシグさん、テーストホーンの角はもう集まったの？」
「ああ。それは来る途中でとっくに集めた。レンゲーには昼食を食べに来たんだけど、三人はもう食ったのか？」
「先ほど済ませたばかりですねー。これからガルデアに向かって出発するところです」
「そうか。入れ違いにならなくてよかったよ」

　デリハルトの言葉に、シグルドは軽快に笑った。今日帰る予定だったことを思うと、こうしてシグルドと出会えたことは運がいいだろう。様子を見に来てくれたシグルドに無駄足を踏ませてしまうことにならなくて、本当によかった。

「そういえばシグさんってレンゲーには何度か来た事あるんだっけ？」

「ん？　まあ、あるにはあるぞ。国跨いでるから、しょっちゅうってわけじゃあないけどな」
「それなら――」

　ダニエラが突然リンの腕を掴み、ぐいと引っ張られる。リンの腕に一度絡みついたと思ったら、再びシグルドの眼前へと押しやられた。

「リンを案内してあげてよ。この子、一日あった休日をアズゲリツの人達との鍛錬で潰しちゃって、全然レンゲーの街を見て回ってないみたいだから」
「ダ、ダニエラさん!?」

　彼女が突飛なことを言い出すのはいつものことだが、これはあまりにも突然すぎる。
　確かにリンは儲けられた休日を、ヴィゲンとの手合わせに付き合うことに当て、レンゲーの街を見て回るということはしなかった。別段街中に用があるわけでもなかったし、何より観光に来たわけではないのだから、見て回る必要もないと思っていただけ。

「か、観光目的で来たんじゃないんですよ!?　そ、それに帰って義兄さまに報告をしなくては……！」
「――報告なら、俺とダニエラでやっておくよ。リンも、少しくらいは遊んでもいいんじゃないかな」
「デ、デリハルトさん……！」

　ダニエラだけならともかく、まさかデリハルトまで便乗してくるとは思わなかった。いつもなら、からかってくるダニエラを諌めてくれるのに。穏やかにニコニコと笑う表情から、とても生温かいものを感じた。

「そうよそうよ。それに、シグさんと一緒なら帰りも安心だしね！」

　バチッと可愛らしくウインクをするダニエラに、先ほどの満面の笑みはこれを狙っていたのだと漸く理解する。

「で、ですがそれではシグルドさんにご迷惑が……！」
「俺は構わないけど」
「だって、リン。よかったわね」
「……！」

　ダニエラがいい笑顔でグッと親指を立てる。リンは口をパクパクと動かすだけで、言葉が生まれない。

「街を見て回ってないってことは、ケーキ屋にも行ってないんだろ？　美味いところ知ってるから、一緒に行くか？」
「ケーキ……！」

　ケーキという言葉に自然と胸が躍った。甘い物を好むリンにとって、ケーキは大好物と言っても過言ではない。特にクリームがたっぷりと使われたものを好むが、フルーツたっぷりのタルとも好きだし柔らかいシフォンケーキもいい。アイスが添えられたパウンドケーキだって美味しい。ケーキと名づく菓子類ならば、何でもいける。

「リンも行く気になったみたいだし、決まりね」
「！」

　ケーキに胸を躍らせてしまったせいで、完全に行くことが決まってしまったらしい。恐る恐るシグルドの方を見上げると、彼は優しげにニコリと笑ってくれた。ここはもう腹を括るしかないだろう。

「お、お願いします……」
「それじゃあ俺たち先に帰りますから」
「リンをお願いね、シグさん」
「ああ」

　デリハルトとダニエラは軽く手を振ると、東の門へと続く道に沿って二人並んで歩いていく。

「あ、ケーキ屋なんだけど、先に昼飯食ってからでいいか？　腹減っててさ」
「そ、それはもちろん！」
「じゃあ俺達も行くか」
「――はい」

　シグルドに促されたリンは、身体にぐっと力を入れてシグルドの隣に並ぶ。

（し、暫く二人きりなんて……！）

　街は賑やかな音で溢れているにも関わらず、ドキンドキンとけたたましく鳴る心臓がとても煩い。今からガルデアに戻るまで、ずっとシグルドと一緒にいられることは嬉しいと思うが、心臓はもつのだろうか。それが心配だ。

（でも……）

　徐に顔を上げ、ちらりとシグルドの方を見る。こうして行動を共にするのは、コリアリィで出合ったとき以来だ。長い時間、二人きりでいることができる。

（たくさん、お話し……できるかな？）

　コリアリィで会ったときもそれなりに話したと思うが、内容は盗賊退治についてのことばかり。そんな殺伐としたことではなく、他愛ないことを、たくさん話してみたい。例えば好きな食べ物だとか、普段どんな依頼を受けているのだとか。シグルド自身のことを、いろいろ聞いてみたい。

「お、みっけ。あの店の料理美味いんだよなぁ。あそこ入るけどいいか？」
「あ、はい。行きましょう」

　シグルドが目をつけた食堂へと足を運び、リンはそれに続く。高鳴る胸をぎゅっと抑えながら、来訪者を継げる鐘の音が耳に響いた。